一般資料

帝室制度史

第六卷

帝國圖書館藏

国立国会
27.7.23
図書館
273636

目次

第一編　天皇

第四章　稱號

第一節　帝號

第一款　帝號の種類……一

一……八　二……一二　三……一六

四……六六　五……八〇　六……一〇〇

第二款　帝號の用法……一二七

一……一三　二……一三三　三……一三五

四……一六九　五……一七二　六……一七九

第二節　敬語及び書式

第一款　敬語……一九一

帝國圖書館藏

一……一九五　二……二〇一　三……二一六
四……二三八　五……二七六　六……二八七

第二款　書　式……二九〇

一……二九四　二……二九八　三……三〇七
四……三四五　五……三四七　六……三六八
七……三七五

第三節　御　名

第一款　總　説……三八一

一……三八八　二……三九四　三……四〇三
四……四一八　五……四二三　六……四二五
七……四二七　八……四三三　九……四三四
一〇……四三四　一一……四九八　一二……五〇一
一三……五〇三　一四……五一六

第二款　親署　附花押印璽……五二一

一……五二六　二……五二八　三……五三〇
四……五三四　五……五五〇　六……五六〇
七……五六一　八……五六五

第三款　御名の敬避……五八一

一……五八八　二……五九五　三……五九六
四……五九七　五……五九八　六……六〇九
七……六二〇　八……六二一　九……六二三
一〇……六二九　一一……六二九　一二……六三三
一三……六四三

第四節　諡號及び追號

第一款　諡　號……六四八

一……六五七　二……六五八　三……六五八
四……六六二　五……六六四　六……六七七
七……六七八　八……六八二　九……七一三
一〇……七二一　一一……七二三

第二款　追　號……七二五

一……七四〇　二……七四六　三……七四六
四……七六九　五……七七〇　六……七七〇
七……七七九　八……七八一　九……七八一
一〇……七九三　一一……七九五　一二……七九六
一三……七九七　一四……七九九　一五……八〇一
一六……八一九　一七……八二三　一八……八二三
一九……八三一　二〇……八三一　二一……八三三
二二……八三三　二四……八三五　二七……八三七

二五……八四七　二六……八五一
二八……八六一　二九……八六三
三一……八六六　三〇……八六五
御歴代天皇御名諡號追號表……八六九

第一編　天皇

第四章　稱號

第一節　帝號

第一款　帝號の種類

天皇を稱し奉る稱號には、古來種々の成語あり。上代には專ら我が固有の國語を以て稱し奉り、スメミマノミコト、スメラギ、オホキミ、アキツミカミ、ミカド等の稱號行はれたりしが、後支那の文物の我が國に傳はるに及び、此等の固有の國語を書するに漢字を以てすると共に、天子、皇帝等種々の漢風の稱號も亦我が國に用ひられ、國風及び漢風の兩樣の稱號が竝び行はるゝに至れり。

此等の多數の稱號は、其の語義より謂へば、或は天皇が皇祖以來一系の皇統を承けたまへる御子孫なることを示すものあり、或は天皇が國を統治したまふ君主なることを示すものあり、或は天皇の御一身の神聖尊貴なることを示すものあり、或は又天皇の御一身を憚り、皇居其の他の事物を假りて天皇を稱し奉るものもあり。

天皇が皇祖の御子孫なることを示す稱號には、スメミマノミコト、ヒノミコの古語あり。スメミマノミコトはミマノミコトとも稱せられ、天照大神の御孫の義なり。後に皇孫命、皇御孫命等の文字を以て記せり。ヒノミコは日神の御子孫の義にして、後に日之皇子の文字を以て記せり。タカヒカルヒノミコの成語あり(一)。

統治の意義に基づく稱號には、スメラギ、スメラミコト、ヤスミシル、ヤマトネコの古語の外に、萬乘、御の漢語、佛典に基づく金輪の語あり。スメラギは古くはスメロギと云ひ、スメラ、スベラギの類語あり、スメラミコトと共に、何れも統ぶる君の義にして、後に天皇、天皇命の文字を以て充つるに至れり。ヤスミシルは蓋し八隅を知し食すの義なり。ヤマトネコは大倭を知し食すの義にして、大倭根子とも記す。何れも國風の稱號なり。萬乘は「萬乘、兵車萬乘、謂二天子一也」とある支那の典籍に出で、萬乘の位、萬乘の主等の成語あり。御は四海を統御するの義に出づ。共に漢風の稱號なり。金輪は佛典に須彌山の四洲を統治する帝王の稱なりとあるに出づ。金輪聖王、金輪聖主、金輪聖皇等の成語あり(二)。

君主の意義を示す稱號としては、古語にはオホキミ、漢風に出づるものには天皇、皇帝、帝、王、元首等あり。オホキミは君主の尊稱にして、王、大王、大君等の文字を以て充てたり。君、聖君等の類語あり。

オホキミの冠辭としては、殊にヤスミシシ、トホツカミの語あり。

天皇は史記秦始皇本紀に「古有天皇、有地皇、有泰皇」とあり、支那太古より傳はれる所なれども、其の語が支那に於いて君主の稱號として用ひられしは、舊唐書高宗本紀の咸亨五年の條に「皇帝稱天皇、皇后稱天后」とあるを初見とするが如し。我が國に在りては、日本書紀推古天皇十六年の條に、隋に遣はしたまひし國書に東天皇と記したまひしこと見えたるを國史に於ける初見とす。爾後日本書紀を初め勅撰の國史には、歷代天皇を稱し奉るに專ら此の稱を以てし、明治天皇の憲法及び皇室典範を制定したまふに至り、之を以て正式に公の稱號として定めたまへり。皇帝は蔡邕の獨斷に「皇者煌也、盛德煌煌無所不照、帝者諦也、能行天道、事天審諦、故稱皇帝」とあり。帝、王、元首と共に、何れも君主の義なり。帝皇、聖皇、聖主、明王等の類語あり(三)。

天皇の神聖を稱へ奉る稱號には、アラヒトガミ、アキツミカミ、ヒジリの古語の外、漢語には天子、佛典に出づるものには十善の語あり。アラヒトガミは現人神、アキツミカミはアキツカミ、アラミカミとも謂はれ、明神、現神、明御神、現御神の文字を以て充つ、共に世におはしますの神の義なり。ヒジリは日知又は聖の字を以て充つ、日の如く天下を知し食すの義なるべし。聖明、列聖等の成語あり。天子は獨斷の所謂「父天母地、故稱天子」の義に出づる漢語なり。十善は十善戒を守る功德に因り王となるとする佛說に出で、十善の王、十善の主、十善の位等の成語あり(四)。

天皇の尊貴を稱へ奉る稱號には、古語にはウヘ、漢語には上、至尊、南面、九五、一人(イチジン)等あり。ウヘは尊貴の御位に在すの義にして、上の字

を以て之に充て、上樣、今の上、雲の上等の成語あり。漢語としての上も亦同じ義にして、更に主上、皇上、聖上、今上等の成語あり。今の上又は今上の類語には尙當代、當今等あり。至尊は尊貴の至極なる義、南面は王者は南面して聽政する支那の故事に基づき、九五は九を陽とし五を人君の位に當つる易の說に出づ。南面の主、九五の位等の成語あり。一人は支那に於いては本來天子の自稱なれども、其の我が國に傳はるに及びては、等しく天皇を稱し奉る稱號として用ひられたり(三)。

皇居其の他の事物を假りて稱し奉る稱號には、ミカド、ウチ、オホヤケ、公方、天朝、叡慮、禁裏、禁中、內裏、御所、國家、陛下、宸儀、乘輿、車駕(キョガ)等あり。ミカドは皇居の御門の義にして、天皇の御身を憚り御居所を假りて稱し奉るなり。ウチは皇居の義にして、內と書し、內の上、內の御前、今の內、大內等の成語あり。オホヤケは公家とも書し、朝廷の義より出づ、公方、天朝等亦同義なり。叡慮は本來大御心の義なれども、時代に依り轉じて天皇を稱し奉る義に用ひられたることあり。禁裏、禁中、內裏、御所は何れも皇居の義なり。國家は本來國の義なれども、古書には天皇を稱し奉る義に用ひたるもの少からず。律疏に「不敢指斥尊號、故託云國家」と見えたり。陛下は獨斷に「陛下者、陛階也、所由升堂也、天子必有近臣、執兵陳於陛側、以戒不虞、謂之陛下者、群臣與天子言、不敢指斥天子、故呼在陛下者而告之、因卑達尊之意也」とあるの義に出づ。皇室典範の制定に及び、陛下は天皇、太皇太后、皇太后、皇后の敬稱として定められたり。宸儀の宸は皇居の義、乘輿、車駕は天子の輿車の義に出づるものにして、共に漢風の稱號なり(四)。

天皇が皇祖の御子孫なることを示す稱號

スメミマノミコト

一日本書紀 六 垂仁天皇 二十五年三月丁亥朔丙申(十日)、離天照大神於豐耜入姫命、託于倭姫命、(中略)一云、天皇以倭姫命爲御杖、貢奉於天照大神、(中略)取丁巳年冬十月甲子、遷于伊勢國渡遇宮、是時倭大神著穗積臣遠祖大水口宿禰、而誨之曰、太初之時期曰、天照大神、悉治天原、皇御孫尊、專治葦原中國之八十魂神、我親治大地官者、言已訖焉、

古語拾遺 天祖吾勝尊、納高皇產靈神之女栲幡千千姫命生天津彥尊、號曰皇孫命、天照大神、高皇產靈神、二神之孫、故曰皇孫、

日本書紀 二 神代下 天照大神之子正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊、娶高皇產靈尊之女栲幡千千姫、生天津彥彥火瓊瓊杵尊、故皇祖高皇產靈尊、特鍾憐愛、以崇養焉、遂欲立皇孫天津彥彥火瓊瓊杵尊、以爲葦原中國之主、

一書曰、(中略)故天照大神乃賜天津彥彥火瓊瓊杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡、草薙劍、三種寶物、(中略)因勅皇孫曰、葦原千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可王之地也、宜爾皇孫就而治焉、行矣、寶祚之隆、當與天壤無窮者矣、

日本紀竟宴和歌 得天穗日命二首 學生蔭孫從七位下矢田部宿禰公望

俱娑幾微儺、擧都夜謎豫斗底、婀肆撥羅乃、矩兒閉多智儞芝、夷裝鳴那梨氣聲、(中略)

あまてるおほかみの、すへみまを、あしはらのなかつくにのきみとせんとすると

きに、そのくにゝ、さはへなすあしきかみたちあり、

日本書紀 二十八 天武天皇 元年秋七月壬子(二十三日)、(中略)先是軍金綱井之時、高市郡大領高市縣主許梅、慵忽口閉而不能言也、三日之後、方著神以言、吾者高市社所居、名事代主神、又牟狹社所居、名生靈神者也、乃顯之曰、(中略)便亦言、吾者立皇御孫命之前後、以送奉于不破而還焉、今且立官軍中而守護之、且言、自西道軍衆將至之、宜愼也、言訖則醒矣、

令集解 二十八 儀制令 天子、祭祀所稱、謂告于神祇、稱爲天子、凡自天子至車駕、皆是書記之類也、釋云、天子是告神之稱、俗語云、皇御孫命、古記云、天子祭祀所稱、謂祭將書記字、謂之天子也、辭稱須賣彌麻乃美己等耳也、

文德實錄 三 仁壽元年冬十月乙卯(十七日)、遣使者向平野神宮、策命曰、(中略)此狀乎聞食旦、神那我良母、天皇御孫命乎、堅磐爾常磐爾護幸奉賜比、天下平安爾守矜賜倍止申賜久止申、

延喜式 八 祝詞 神祇八 祈年祭

集侍神主祝部等諸聞食登宣、(中略)御年皇神能前爾、白馬、白猪、白鷄、種々色物乎備奉氏、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

大御巫能辭竟奉皇神等能前爾白久、(中略)皇御孫命御世乎手長御世登、堅磐爾常磐爾齋

比奉茂御世爾幸閇奉故、(下略)

常陸國風土記　香島郡　古老曰、(中略)天地草昧以前諸祖天神俗曰、謂賀味魯岐、會集八百萬神於高天之原、時諸祖神告曰、今我御孫命(ミマノミコト)、光宅豐葦原水穗之國、自高天原降來大神、名稱香島天之大神、

日本書紀　六　垂仁天皇　二十五年三月丁亥朔丙申(十日)、(中略)一云、(中略)取丁巳年冬十月甲子、遷于伊勢國渡遇宮、是時倭大神、著穗積臣遠祖大水口宿禰、而誨之曰、(中略)然先皇御間城(崇神)天皇、雖祭祀神祇、微細未探其源根、以粗留於枝葉、故其天皇短命也、是以今汝御孫尊(ミマノミコト)(垂仁)、悔先皇之不及而愼祭、則汝尊壽命延長、復天下太平矣、

日本書紀　九　神功皇后　足仲(仲哀)彥天皇九年十二月戊戌朔辛亥(十四日)(中略)一云、足仲彥天皇沙麼縣主祖內避高國避高松屋種、以誨天皇曰、御孫尊(ミマノミコト)也、若欲得寶國耶、將現授之、便復曰、琴將來以進于皇后、則隨神言而皇后撫琴、於是神託皇后、以誨之曰、今御孫尊所望之國、譬如鹿角以無實國也、其今御孫尊所御之船、及穴戸直踐立所貢之水田、名大田爲幣、能祭我者、則如美女之睫、而金銀多之眼炎國以授御孫尊、

續日本紀　十五　聖武天皇　天平十五年五月癸卯(五日)、宴群臣於內裏、皇太子(阿倍內親王)親儛五節、右大臣橘宿禰諸兄奉詔、奏太上(元正)天皇曰、(中略)因御製歌曰、蘇良美都、夜麻止乃久爾波、可未可良斯、多布度久安流羅之、許能末比美例波、又歌曰、阿麻豆可未、美麻乃彌己止乃、登理母知氐、許能等與美岐遠、伊末多氐末都流、

祝詞考　上　祈年祭　皇御孫命(スメミマノミコト)能　天御孫、日子番能邇々藝命より、同じ日嗣しろしめす大御次(オホミツギ)にませば、今の天皇の御事をも、御孫(ミマ)命と申奉れり、

古事記傳　十五　番能邇々藝命(中略)古語拾遺には、たゞ天津彥尊と申せり、さて皇御孫(スメミマ)命とは、此尊を始めて、後の御世御世の天皇をも申奉る稱なり、書紀に、皇孫とある是なり、續紀十五に、美麻乃彌己止(ミマノミコト)とあり、讀は此に依べし、孫を麻とのみ云むは、心得がたけれど、未考得ず、又書紀に、天孫ともあるは、古言に非ず、こは天神之御子を、例の漢めかして、簡に書れたる物なり、阿麻都加微能美古と訓べし、阿米美麻と訓は非なり、

古事記　下　天皇(仁德)爲將豐樂而、幸行日女嶋之時、於其嶋鴈生卵、爾召建內宿禰命、以歌問鴈生卵之狀、(中略)於是建內宿禰、以歌語白、多迦比迦流(タカヒカル)、比能美古(ヒノミコ)、宇倍志許曾、斗比多麻閇、麻許曾邇、斗比多麻閇、阿禮許曾波、余能那賀比登、蘇良美都、夜麻登能久邇爾、加理古牟登、伊麻陀岐加受、

萬葉集　一　雜歌　藤原宮之役民作歌

八隅知之、吾大王、高照(持統)日之皇子(ヒノミコ)、荒妙乃、藤原我宇倍爾、食國乎、賣之賜牟登、(下略)

萬葉集　一　雜歌　藤原宮御井歌

八隅知之、和期大王、高照(持統)日之皇子(ヒノミコ)、麁妙乃、藤井我原爾、大御門、始賜而、(下略)

統治の意義に基づく稱號

スメラギ

冠辭考　五多部　たかひかる、ひのみこ、ひのみや人、

古事記に、景行條、みやすひめ、倭建命に答奉る、多加比加流、比能美古、夜須美斯志、和賀意富岐美、雄略條、天多加比加流、比能美夜比登とも、万葉卷一に、人麻呂、高照日之皇子、卷二に、高照日之御子云云、こは天たかく光日といふ意につゞけて、且八隅しゝ吾大きみてふまで、天皇御ひとりのうへを申めり、日神の御繼々なれば、後にも日のみこ、日の御孫など申て、其おはします所をも、日の宮、日の御門などいへり、さてかゝる古言をば、古へより古言のまゝによみ來しと見えて、古事記はもとより、万葉にも高光、また日之御子と書り、然れば日之皇子とあるをも、ひのみこと四言によみ、高照の字も、同し記によりて、たかひかるとよむべき也、今の万葉の訓はわろし、古語拾遺の說も誤れり、

二　日本紀竟宴和歌

天慶六年　得天命開別天皇（天智）

参議正四位下兼右衞門督行備前權守源朝臣高明

須女羅枳能、婀布彌濃美也爾、都玖利於岐斯、登磯農麻邇麻邇、微與毛多裔勢數、

夫木和歌抄　三十五　雜部十七　帝王　題不知　よみ人しらす

すめらきの神の御門をかしこみとさふらふときにあへる君かも

スメロギ

日本紀竟宴和歌　得橘豐日（用明）天皇

参議正四位下行右兵衞督兼播磨守藤原朝臣清經

多知波那能、須女羅乃支美遠、々之美介無、多須那可末己止、和禮毛於止良之、

日本紀竟宴和歌　天慶六年　得秦酒公

外從五位下行造酒正葛井宿禰清鑒

己止能禰濃、阿波麗那禮波夜、數梅羅機彌、飛多能多久美濃、都美烏喩留勢流、（雄略）

萬葉集　十五　到壹岐島、雪連宅滿忽遇鬼病死去之時作歌一首　并短歌、

須賣呂伎能、等保能朝廷等、可良國爾、和多流和我世波、伊敞妣等能、伊波比麻多禰可、（中略）

右三首、挽歌、

萬葉集　十七　入京漸近、悲情難撥、述懷一首　并一絶、

可伎加蘇布、敷多我美夜麻爾、可牟佐備底、多底流都我能奇、（中略）安之可流等、安麻乃乎夫禰波、伊里延許具、加遲能於等多可之、曾己乎之毛、安夜爾登母志美、之怒比都追、安蘇夫佐香理乎、須賣呂伎能、乎須久爾奈禮婆、美許登母知、多知和可禮奈婆、（中略）

右、大伴宿禰家持、贈掾大伴宿禰池主、四月廿日、

スメラ

萬葉集　二十　陳防人悲別之情歌一首并短歌

大王乃、麻氣乃麻爾麻爾、島守爾、和我多知久禮婆、（中略）天皇乃、美許等可之古美、多麻保己乃、美知爾出立、

萬葉集　六雜歌　天皇（聖武）賜酒節度使卿等御歌一首并短歌

食國、遠乃御朝廷爾、汝等之、如是退去者、平久、吾者將遊、手抱而、我者將御在、天皇朕、宇頭乃御手以、搔撫曾、禰宜賜、（中略）

右御歌者、或云太上天皇（元正）御製也、

萬葉集　二十　阿良例布理、可志麻能可美乎、伊能利都都、須米良美久佐爾、和例波伎爾之乎、

右二首、那賀郡上丁大舍人部千文、

延喜式　八祝詞　神祇八　伊勢太神宮　二月祈年、六月十二月月次祭、

天皇我御命以氏、度會乃宇治乃五十鈴川上乃、下津石根爾稱辭竟奉流皇太神能太前爾申久、

日本紀竟宴和歌　日本紀竟宴、各分史得大鷦鷯（仁德）天皇、二首、

氣不利奈岐、也度遠女玖美之、須女良己曾、也曾度世阿末利、玖爾之良之氣禮、

皇太后宮大夫藤原朝臣國經

日本紀竟宴和歌　天慶六年　得天命（天智）開別天皇

參議正四位下兼右衛門督行備前權守源朝臣高明

須女羅枳能、婀布彌濃美也爾、都玖利於岐斯、登磯農麻邇麻邇、微與毛多裔勢數、（中略）

このすめら、ひつきのみことゝましゝとき、みつからときはかるうつはものをつくりて、はしめてあふみのおほつのみやに、おきたまふといへり、

續日本紀　四元明天皇　和銅元年春正月乙巳（十一日）、武藏國秩父郡獻和銅、詔曰、現神御宇倭根子天皇詔旨勅命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞宣、（中略）如是治賜慈賜來留天豆日嗣之業、今皇朕（スメラワガ）御世爾當而坐者、天地之心乎勞彌重彌辱彌恐彌坐爾、聞看食國中乃東方武藏國爾、自然作成和銅出在止奏而獻焉、（中略）是以天地之神乃顯奉瑞寶爾依而、御世年號改賜換賜波久止詔命乎、衆聞宣、故改慶雲五年而和銅元年爲而、御世年號止定賜、

續日本紀　十聖武天皇　天平元年八月癸亥（五日）、天皇御大極殿、詔曰、現神御宇倭根子天皇

詔旨勅命乎、親王等、諸王等、諸臣等、百官人等、天下公民衆聞宣、（中略）皇朕（スメラワガ）御世當而者、皇止坐朕母、聞持流事乏久、見持留行少美、（中略）京職大夫從三位藤原朝臣麻呂等伊、負圖龜一頭獻止奏賜不爾、所聞行驚賜怪賜、所見行歡賜嘉賜氐、所思行久者、于都斯久母皇朕政乃所致物爾在米耶、（中略）是以天地之神乃顯奉留貴瑞以而、御世年號改賜換賜、是以改神龜六年、爲天平元年而、大赦天下、

古今和歌集　十九　雜體長歌　ふる歌奉りし時の目錄のその長歌　貫之

やちくさの、言の葉ことに、すへらきの、仰せかしこみ、まき〳〵の、中につくすと、（上下略）

榮花物語　二十三　こまくらべの行幸　（後一條）　（萬壽元年）なが月のとうかやうかに、あからさまに（太皇太后彰子）わたらせ給へるが故に、わがすべらぎ（後一條）も、きのふみゆきせさせ給て、ひねもすに御あそびありて、

堀河院御時百首和歌　夏　氷室　從四位上行木工頭源朝臣俊頼

すへらきのみことの末のたえせねはけふも氷室のおものたつなり

左大將家百首歌合　建久五年　二十七番　野行幸　（中略）

右勝　（藤原家房）中宮權大夫

（後鳥羽）すへらきの今日のみゆきはみかり野の草葉もなひくものにそありける

神皇正統紀　一　白山本　昔皇祖天照太神、天孫尊ニ御勅セシニ寶祚之隆當與天壤無窮トアリ、天地モ昔ニカハラス、日月モ光ヲ不改、況ヤ三種ノ神器世ニ現世（在）シ給ヘリ、窮リ有ヘカラサルハ我國ヲ傳ル寶祚也、仰テタトヒ奉ルヘキハ日嗣ヲ受給フスヘラキニナムヲハシマス、

類聚名義抄　六　玉　天皇　スヘラキ

八雲御抄　三下　異名　帝王　すべらぎ、すべらぎみとも、すべらとも、

祝詞考　上　新年祭　皇睦神漏伎命、神漏彌命以、皇（スベ）は統（スベ）らふ事にて、尊みの言なり、何ぞといはゞ、天（アメ）を統知（スベシリ）ますを皇大御神（オホミカミ）國（クニ）を統知（スベシリ）坐（マス）を皇大君（スベラギ）と申す、是なり、

日本書紀傳　二十八　須賣良岐は、本、須賣漏伎と申奉る御事なり、（中略）須賣良岐と云ふは、古今集より以降の事なり、如何にしてか古には天皇を須賣良と唱へ奉りながら、此を須賣呂伎とのみ申せり、古今集序に、今、須倍良岐の天下所知食す事、四の時九返りにな（倍）む成りぬる、其の長歌に、須賣良岐の仰せ可畏云云と有りて、須賣呂岐より須賣良岐に轉り、又其より再轉りて須賣良岐と唱へ奉る事とは成れり、

古事記　上　天神御子之御壽者、木花之阿摩比能微此五字以音、坐、故是以至于今、天皇命等之御命不長也、

日本書紀　三　神武天皇　神日本磐余彦天皇（カムヤマトイハレヒコノスメラミコト）、諱彦火火出見、彦波瀲武鸕鷀草葺不合

ヤスミシル

尊第四子也、

令義解　六儀制令　天子、祭祀所稱、（中略）凡自天子至車駕、皆是書記所用、至風俗所稱、別不依文字、假如皇御孫命、及須明樂美御德之類也、

續日本紀　一文武天皇　元年八月庚辰（十七日）詔曰、（中略）此天津日嗣高御座之業止、現御神止大八嶋國所知倭根子天皇命（ヤマトネコ　スメラミコト）、授賜比負賜布貴支高支廣支厚支大命乎受賜利恐坐弖、此乃食國天下乎調賜比平賜比、

延喜式　八祝詞　神祇八　出雲國造神賀詞

掛麻久毛畏岐明御神止大八島國所知食須天皇命（スメラミコト）乃手長能大御世止、（下略）

兵部卿貞保

日本紀竟宴和歌　得瑞（反正）齒別天皇

見門乃爲能、曾己爾之奈天留、波奈乃以呂也、數女良（スメラ）美己度（ミコト）乃、見奈度奈利介武、

日本書紀私記　三　神日本磐余彥天皇加美也末止伊波阿禮比己乃須倍良美己止、

年中行事歌合　七番　右　除目縣召　（冷泉爲秀）新中納言

八隅しる君かおさむる（を）あかためしめくみにあへる名こそ聞ゆれ

新古今和歌集　序　そも〳〵むかしは、いつたびゆづりし跡をたづねて、あまつひつぎの（後鳥羽天皇）位にそなはり、いまはやすみしる名をのがれて、はこやの山にすみかをしめたりといへども、（下略）

ヤマトネコ

八雲御抄　三下帝王　異名　やすみしる

古事記　中　大倭根子日子賦斗邇命（オホヤマトネコヒコフトニノミコト）（孝靈）、坐黑田廬戸宮、治天下也、

大倭根子日子國玖琉命（クニクルノミコト）（孝元）、坐輕之堺原宮、治天下也、

若倭根子日子大毘毘命（ワカヤマトネコヒコオホビビノミコト）（開化）、坐春日之伊邪河宮、治天下也、

日本書紀　四孝靈天皇　大日本根子彥太瓊天皇（オホヤマトネコヒコフトニノスメラミコト）、日本足彥國押人天皇太子也、

日本書紀　四孝元天皇　大日本根子彥國牽天皇（ヒコクニクルノスメラミコト）、大日本根子彥太瓊天皇（孝惠）太子也、

日本書紀　四開化天皇　稚日本根子彥大日日天皇（ワカヤマトネコヒコオホヒヒノスメラミコト）、大日本根子彥國牽天皇（孝元）第二子也、

日本書紀　二十五孝德天皇　大化二年二月甲午朔、戊申（十五日）、天皇幸宮東門、使蘇我右大臣詔曰、明神御宇日本倭根子天皇、詔於集侍卿等、臣、連、國造、伴造、及諸百姓、

續日本紀　九聖武天皇　神龜元年二月甲午（四日）、受禪卽位於大極殿、大赦天下、詔曰、現神大八洲所知倭根子天皇詔旨止勅大命乎、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食宣、（中略）四方食國、天下乃政乎、彌高彌廣爾、天日嗣止高御座爾坐而、大（元正）八嶋國所知倭根子天皇乃大命爾坐、（中略）是平城大宮爾、現御神止坐而、大八嶋國所（元明天皇）知而、靈龜元年爾、此乃天日嗣高

御座之業、食國天下之政乎、朕爾(元正天皇)授賜讓賜而、敎賜詔賜都良久、挂畏淡海大津宮御宇倭根子天皇(天智)乃、萬世爾不改常典止、立賜敷賜閉留隨法、(下略)

御產部類記　二　利三十五　伏見宮御記錄

冷泉院　外記立太子

天曆四年七月廿三日戊子、今日有奉立皇太子(冷泉天皇)宣命之事、(中略)

現神止大八州(洲)所知須倭根子(村上)天皇詔旨良麻勅命於、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食止宣、

兵範記　保元三年八月十一日戊戌、今日可讓位於皇太子(二條天皇)、(中略)

現神度大八洲國所知須倭根子(後白河)天皇我詔旨良度勅御命乎、親王、諸王、諸臣、百官能人等、天下公民衆諸聞食度宣、

朕以薄德天、天日嗣乎承傳賜倍留事、漸歷年序利、愚庸之身波、此位乎不可堪度歎畏賜比天、令避皇位賜比奈牟度所念行天奈牟、皇太子度定賜倍留守仁親王仁、此天日嗣乎授賜布、

御讓位幷御卽位記　貞永元年十月四日庚辰、是日皇帝(後堀河)於閑院、當時皇居便宜同大內、讓位於皇太子(四條天皇)、諱秀仁、今上第一皇子、(中略)

宣命如此、

現神度大八洲所知須倭根子天皇我詔旨良止万勅命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食度宣、(中略)

貞永元年十月四日

古事記傳　二十一

大倭根子日子賦斗邇命、御名意、根子は尊稱にて、景行天皇の御子にも、倭根子命と申すあり、凡人にも、記中に難波根子、書紀神功卷に、山背根子など云名見えたり、天皇は、大倭國所知看を以て、倭根子とは申奉るなり、故此御號、是を始として、孝元開化の二御世、又淸寧元明などの御名にも稱奉れり、光仁より仁明までの御諡號には、皆是あり、凡て御代御代の天皇の御通號となりて、詔命などにも、みな倭根子天皇と申し奉ることなり、孝德紀大化二年の詔に、明神御字日本倭根子天皇詔云々、天武紀十二年の詔に、明神御大八洲日本根子天皇勅命者云々、續紀一の詔に、現御神止大八島國所知倭根子天皇命云々などとあるが如し、

菅家文草　十表狀

爲太政大臣、重謝年官隨身第二表、

臣良房言、(中略)臣所有一兩僕隷、皆是陛(淸和)下幼年之侍童也、隨分得官者、或年三四人、陛下以爲慰舊功力、臣以爲拜家數人、未報萬乘之先恩、何以擬三宮、(中略)

貞觀十三年四月十八日、太政大臣云云、

萬乘の位

萬乘の主

江吏部集（下木部）　暮春侍宴左丞相（藤原道長）東三條第、同賦渡水落花舞、應製一首、以輕爲韻、并序、

洛城有一形勝、世謂之東三條、本是太相國之甲第也、傳爲左丞相之花亭、（中略）賢相輔主、以雖世榮、父子未必致萬乘之臨幸、（一條）於戲千載一遇、不光古乎、

本朝續文粹（十三　追善）　願文下　右府室家、爲亡息后、被供養堂願文、　江大府卿

嗟呼、本是萬乘之國母也、（細河）玉榮（藤原賢子）彌貴於南浮之風、（中略）

年月日　　女弟子源朝臣

白河上皇御告文　京都府石清水八幡宮所藏　八幡宮寺告文部類第一

維寛治四年歲次庚午十二月辛卯朔、十六日丙午爾、掛毛畏き某大神乃廣前爾、太上天皇恐美恐美も申久、謬天以一得之身天、久在万乘之位き、

願文集　一　（安樂壽院內不動堂供養）同結願御願文

（鳥羽法皇）弟子沙門敬白、（中略）抑弟子雖保禁戒猶難保、雖慨罪障不能慨、所以者何、正嫡則太上皇、（崇德）（近衛天皇）少子亦萬乘主、二代扶持之間、定招不慮之咎、衆務諸詢之處、豈無自然之愆靜、（中略）

久壽二年六月廿六日　　弟子沙門　敬白

增鏡　五　煙のすゑ〳〵　（後深草）うへはまだいといはけなき御程にて、かくいつくしき万乘のあるじにそなはり給へる御ありさまを、女院もいとやむごとなくかたじけなしとみたてまつり給、

萬乘の屣

御

願文集　四　（後鳥羽上皇）顯德院一日一切經供養

（後鳥羽上皇）弟子忝承祖父法皇（後白河）之叡託、雖守聖人大寶之尊位、璇璣不在、陰陽難調、幼昧未識之時、無辨春氷之隨步、庸質漸長之後、唯思白雲之伴心、遂解四海之家、更脫萬乘之屣、（中略）

建暦元年四月廿三日　　太上天皇（承成）御諱　敬白

孟子　一　梁惠王章句上　萬乘之國、弑其君者、必千乘之家、（中略）乘車數也、萬乘之國者、天子畿內地方千里、出車萬乘、千乘之家者、天子之公卿采地方百里、出車千乘也、

孟子注疏　一上　梁惠王章句上　萬乘之國、弑其君者、必千乘之家、萬乘、兵車萬乘、謂天子也、千乘、兵車千乘、謂諸侯也、夷羿之弑夏后、是以千乘取其萬乘者也、

令義解　七　公式令　御、謂斥至尊、謂一人也、

令義解　五　宮衛令　凡車駕出入、諸從駕人、當按次第、如鹵薄（簿）圖、（註略）去御三百步內、不得持兵器、其宿衛人、從駕者聽之、

肥前國風土記　彼杵郡　昔者、纒向（景行）日代宮御宇天皇、誅滅球磨噌唹之時、天皇在豐

前國宇佐海濱行宮、勅陪從神代直、遣此郡速來村、捕土蜘蛛、於茲有人、名曰速來津姫、此婦女申云、妾弟名曰健津三間、住健村之里、（中略）健（津脫カ）三間云、（中略）亦申云、有人名曰箆簗、住川岸之村、此人有美玉、愛之固秘、定無服命、於茲神代直、迫而捕獲問之、箆簗云、實有之、以貢於御、不敢愛惜、神代直捧此三色之玉、還獻於御、于時天皇勅曰、此國可謂具足玉國、今謂彼杵郡訛之也、

延喜式　一　神祇一　四時祭上　御贖

東文部捧横刀、入就版位、勅曰、參來、即稱唯就階下、轉授中臣女、取奉御、訖即出、（中略）次宮主捧坩、中臣轉執授中臣女、執奉御、訖退授中臣、

元亨釋書　十八　尼女四　願雜十之三　如意尼者、天長（淳和）帝之次妃也、（中略）承和二年正月、帝幸山中、如意對御演說、皇情大悅、扈從甚盛、

安齋隨筆　十三　稱御辭　御の字は、天子の事に云ふ詞なり、されども每事每物、悉く御と云ふに非ず、國史令式等に、御と云ふ事稀にあり、中古以來、天子は勿論、貴人には每事每物、悉く御と云ふ、御の詞、喧く聞ゆ、今に至りては賤き我々とても、相互に御の字を付けて云ふ事に成れり、其の本は御宇、御製、崩御などの類、天子の事に稱する詞なり、

毛詩註疏　十六　思齊　大雅　刑于寡妻、至于兄弟、以御于家邦、（中略）〔箋〕（中略）御治也、文王以禮法、接待其妻、至于宗族、以此、又能爲政、治于家邦也、

文選　十一　論　過秦論　賈誼

及至始皇奮六世王餘烈、振長策而御宇內、呑二周、亡諸侯、

類聚國史　百七十九　佛道部六　諸宗　貞觀元年八月廿八日辛亥、依十禪師傳燈大法師位惠亮表請、始置延曆寺年分度者二人、（中略）表曰、惠亮言、皇覺導物、且實且權、大士垂迹、或王或神、故能聖王治國、必賴神明之冥助、神道剪累、只憑調御之慧刄、伏惟金輪（清和）陛下、乘六牙而降神迹、逮九歲而登九五、

本朝文粹　十三　願文上　供養塔寺　村上天皇供養雲林院御塔願文　江納言

夫雲林院者、松筠有心之地、香花不朽之場也、（中略）仰願玉臺之中、彌添玉德、金殿之上、又照金輪、（中略）

應和三年三月十九日

善法寺尙淸言上狀案　京都府　石淸水八幡宮所藏

言上

請早任先規、今度書札禮內當宮祠官可守僧□□□(中禮也)被仰下條々子細事、(中略)

一　當宮祠官品秩事、

右、祖師行敎和尙者、武內臣之末苗、贈太政大臣紀朝臣之後胤、大納言古佐美卿之孫、參議廣濱卿之子也、第一代別當安宗□(大)法師者、彼廣濱卿之孫、右少辨夏井之子、行敎和尙入室之□□□(弟子也)、夏井者、行敎和尙之舍兄也、第一代檢校益信僧正者、同和尙之舍弟也、祠官等苟受紀家棟梁之子葉、各爲當宮廟門之雄英、依在世之曩因、陪仕于宗廟、依譜代之功勳、繼而列祠官、于朝于暮、雖奉祈金輪(後宇多)之上壽、惣官權官、未從人臣之後塵、因玆、貞觀聖曆以後、代々之君臣、專雖有優異無雙之賞、安宗別當以來、□□□(面々之)祠官、未全聞比擬同一之禮、尤任彼舊規、欲被定今法矣、(中略)

正月廿五日(弘安九年)

進上　左衞門大夫殿　　法印尙淸

諸祭文故實抄　第十五　妙見祭

勅願(中略)

維天喜三年歲次乙未、正月朔戊寅(庚申)、十四日癸酉、南贍部州大日本國金輪(後冷泉)聖王、不及御諱否、敬眞言敎主大日如來、(中略)鎭護國家諸大明神申給、

大般若法則　奉爲金輪(正親町)聖王天長地久、藥師佛名丁、爲護持法主息災延命、心中所願成就圓滿、大聖不動明王丁、(中略)奉爲金輪聖王天長地久、國土豐饒、(中略)

天正十二年正月吉日、諸衆敬白、

本朝文粹　十三　表白文　天皇(村上)御筆法華經供養講說日、問者表白、　前中書王(兼明親王)

金輪(村上)聖主、堯雲遍燾、潤藥草於春畝、舜日重照、轉法輪於昏衢、方今開蓮之文、出聖跡臨池之妙、貫花之偈、生神筆入木之功、(中略)

天曆九年正月四日

本朝續文粹　十二　願文上　白河法皇八幡一切經供養願文　敦光朝臣

金輪(崇德)聖主、太上(鳥羽)天皇、國母后房、皇子公主、一善所及、萬壽無疆、(中略)

大治三年十月廿二日

願文集　二　安元(治承元)三年宸筆御八講初座云願前權僧正啓白詞、

敬恭乃至敬白言、今南贍(高倉)部洲大日本國金輪聖皇、凝白善於叡慮、抽丹誠於玉體、課毗首奉造立白檀釋迦如來三尊形像、振宸筆奉書寫金字法華妙典、一乘眞文供養、恭敬開眼開題、

祝詞案　京都府八幡宮石清水八幡宮所藏第六末　小祝

維當歲年月某日撰定吉日良辰乎、掛畏支八幡三所大菩薩乃宇豆乃廣前爾、某次々僧俗官等、異口同音爾恐々毛申久、大菩薩波、往昔には大自在王菩薩、我朝には金輪聖皇トシ天、一天乎治メ、萬民乎養比給幾、

阿毘達磨倶舍論　十二　論曰、從此洲人壽無量歲、乃至八萬歲、有轉輪聖王生、減八萬時、有情富樂、壽量損減、衆惡漸盛、非大人器故、無輪王、此王由輪旋轉應導、威伏一切名轉輪王、施設足中說有四種、金銀銅鐵輪、應別故、如其次第、勝上中下、逆次能王領一二三四洲、謂鐵輪王、王一洲界、銅輪王二、銀輪王三、若金輪王、王四洲界、契經就勝、但說金輪、

祕藏金寶鈔　四　金輪法

又云、四輪王中、金輪王殊勝也、故稱此尊云金輪王、又國王(主イ)寄之奉祈稱金輪聖王云々、

〔實運撰　永曆二年寂〕

三　日本書紀

十一　仁德天皇　五十年春三月壬辰朔丙申(五日)、河內人奏言、於茨田堤雁產之、卽日遣使令視、曰旣實也、天皇於是歌、以問武內宿禰曰、(中略)武內宿禰答歌曰、夜輸瀰始之、和我於朋枳瀰波、于陪儺于陪儺、和例烏斗波輸儺、(下略)

君主の意義を示す稱號　オホキミ

日本書紀　十四　雄略天皇　五年春二月、天皇狩獵于葛城山、(中略)俄而見逐嗔猪、從草中暴出逐人、獲徒緣樹大懼、天皇詔舍人曰、猛獸逢人則止、宜逆射而且刺、舍人性懦弱、緣樹失色、五情無主、嗔猪直來、欲噬天皇、天皇用弓刺止、擧脚踏殺、於是田罷、欲斬舍人、舍人臨刑而作歌曰、野須瀰斯志、倭俄飫裒枳瀰能、阿蘇麼斯志、斯斯能宇拖枳、舸斯固瀰、倭俄尼碍能裒利志、阿理嗚能宇倍能、婆利我曳陁阿西嗚、皇后聞悲、興感止之、

續日本紀　四　元明天皇　慶雲四年秋七月壬子(十七日)、天皇卽位於大極殿、詔曰、(中略)威加母、我王朕子(文武)天皇乃詔豆羅久、朕御身勞坐故、暇間得而御病欲治、此乃天豆日嗣之位者、大命爾坐世、大坐坐而治可賜止、讓賜命乎受被賜坐而、(下略)

萬葉集　二　挽歌　天皇(天智)聖躬不豫之時、大后(倭姬王)奉御歌一首、

天原、振放見者、大王乃、御壽者長久、天足有、

萬葉集　十四　東歌　於保伎美乃、美己等可思古美、可奈之伊毛我、多麻久良波奈禮、欲太知伎努可母、

萬葉集　十六　有由緣并雜歌　筑前國志賀白水郎歌十首

王之不遣爾、情進爾、行之荒雄良、奥爾袖振、

オホキミの冠辭
ヤスミシシ

八雲御抄　三下　異名　帝王　おほきみ、たゝ王と　もいふ、

金槐和歌集　下　雜部　太上(後鳥羽)天皇御書下預時歌

大君の勅をかしこみちゝわくに心はわくともひとにいはめやも

萬葉集　一　雜歌　天皇(舒明)遊獵內野之時、中皇命使間人連老獻歌、

八隅知之(ヤスミシシワガ)我大王(オホキミ)乃、朝庭、取撫賜、夕庭、伊縁立之、御執乃、梓弓之奈加弭乃、音爲奈利、朝獵爾、今立須良思、暮獵爾、今他田渚良之、御執、梓能弓之、奈加弭乃、音爲奈里、

續日本紀　十五　聖武天皇　天平十五年五月癸卯(五日)、宴群臣於內裏、皇太子(阿倍內親王)親儛五節、右大臣橘宿禰諸兄奉詔、奏太上(元正)天皇曰、(中略)因御製歌曰、(中略)又歌曰、夜須(ヤスミシシ)美斯志(ワゴ)、和己(オホ)於保支(キミ)美波、多比良氣久、那何久伊末之豆、等與、美岐麻都流、

和訓栞　前編三十四　也の部　やすみしゝ　萬葉集に八隅知之と書せり、天皇の枕辭にいへは、大八洲を知しめすの義也、すみしまは音通せり、八隅は、抱朴子に猶八方と見えたり、一說に安見知せるを正義とす、安國と見したまひ、知しめし玉ふ義也ともいへり、

冠辭考　十　也部　やすみしゝ、わが大きみ、

仁德紀に、武內宿禰の歌、夜輸彌(ヤスミシ)始之、和我於朋枳(ワガオホキ)瀰(ミ)波云々、紀に猶有、萬葉卷一に、八隅知之(ヤスミシシ)、我大王(ワガオホキミ)乃

云云、集中にかく書たるいと多し、此八隅云云と書、また他し古書に四方八方(モヤモ)を治め給ふなどいへる語もあれば、八隅まで殘なく知しめす天皇と申す事と、誰もおもひて、實にさる御ことなれば、さても有べし、然れどもかくては、から文のことばのごとく理り過て、皇朝の上つ世の稱(タヘ)ごとにも似ず侍るはいかに、よりて思ふに、萬葉卷一より始めて、かたゞに、安見知之(ヤスミシシ)、和期大王(ワゴオホキミ)と書たるを、正(マサ)しき字とせんか、集中にも祝詞にも、安良氣久(ヤスラケク)、平良氣久(タヒラケク)、見之賜聞之賜(シタマヒキコシタマヒ)などいひ、安國(ヤスクニ)と見し給ひ知しめすともよめり、さらば安らけく見そなはし、しろしめし賜ふてふ語をつゞめて、安見知(ヤスミシ)爲といひて冠らしめたるにや侍らん、語を(つゞめて冠辭とせし類ひ前に多し、卷二に、內大臣藤原卿娶采女安見兒時とて、我者毛也(ワレヘモヤ)、安見兒得有(ヤスミコエタリ)とよまれし此采女の名は、目(メ)やすき意にて付たるか、集中に事無吾妹(コトナキワギモ)とは、難なく見る目の安きをいへり、さてこの事無てふ語は、せばく人一人の上にも用ゐ、ひろく天が下の平らかなるにもいへば、天皇の天が下に事無安見(コトナクヤスミ)させ給ふにもいふべき也、しからば古へ安見てふ語の有し事を、此采女の名にても知べく、はた八隅てふ意ならば、女の名とせんよしなくや、此外いにしへは、物のよろしきを安きといひし事多きをも思へ、且知之(シ)、とは立(タ)せ給ふをたゝしゝ、御坐(シ)ますをおはしゝなどいふ類にて、天皇の御事につ

けてあがめ申語也、依て天が下を安らけく見させ給ふてふ意ならんといふは、猶ひがこと歟、

神武紀(頭書)に、取天香山之埴土云云、遂得安定區宇、故號取土之處曰埴安、この得安定區宇の五字を、古語の例にていはゞ、くぬちをやすみしゝ給ひぬとよむべし、

萬葉集　一　雜歌　幸讃岐國安益郡之時、軍王見山作歌、(舒明天皇)

珠手次、懸乃宜久、遠神吾大王乃、行幸能、山越風乃、獨座、吾衣手爾、(上下略)

萬葉集　三　雜歌　角麻呂歌四首

清江乃、木笑松原、遠神我王之、幸行處、(上下略)

冠辭考　六　登部　とほつかみ、わがおほきみ、

天皇は即顯津御神にまして、遙に人のたぐひならねば、遠つ神とは申也、

日本書紀　十七　繼體天皇　元年三月庚申朔、詔曰、神祇不可乏主、宇宙不可無君、天生黎庶、樹以元首、使司助養、令全性命、

續日本紀　二十一　淳仁天皇　天平寶字二年八月甲子(二十五日)、以紫微內相藤原朝臣仲麻呂任大保、勅曰、(中略)況自乃祖近江大津宮內大臣(藤原鎌足)已來、世有明德、翼輔皇室、君歷十帝、年殆一百、

令義解　九　喪葬令　凡服紀者、爲君謂、天子也、父母及夫、本主、(註略)一年、

古今和歌集　二十　大歌所御歌

君か代は限もあらし長濱のまさこの數はよみつくすとも

これは仁和(光孝天皇)の御への伊勢國の哥、

讃岐典侍日記　下　君(鳥羽)はいはけなくおはします、

玉葉　建久三年三月十三日乙酉、此日寅刻、太上法皇(後白河)崩御于六條西洞院宮、御年六十六、鳥羽院第四皇子、御母待賢門院、二條高倉兩院父、六條(安德)、先帝(後鳥羽)、當今三帝祖、(中略)未刻余參御所、(中略)余示合可有亮闇哉否事、左大臣(藤原實房)云、承和例符合之上、大治上皇(鳥羽)著御一年之服、(中略)何況大治無亮闇者、爲帝不快也、承和有亮闇者、爲君最吉也、

椿葉記　伏見のさと、車の道もちかごろはたえにしに、むかしにかへるにぎはひにてぞ侍る、かくてむろまち殿(足利義教)をさへ入申侍れば、よもぎのやどにむぐらの露をはらはせ給、これもきみ(後花園)の御ひかりと眉目にてぞ侍し、

續日本紀　十　聖武天皇　天平元年八月癸亥(五日)、天皇御大極殿、詔曰、(中略)高天原由天降坐之天皇御世始而、許能天官(高)御座坐而、天地八方調賜事者、聖君止坐而、賢臣供奉、天下平

人君

久百官安久爲而之、

日本書紀　十八　安閑天皇　勾大兄廣國押武金日天皇、男大迹(繼體)天皇長子也、(中略)是天皇爲人、墻宇凝峻、不可得窺、桓々寛大、有人君之量、

菅　三品

本朝文粹　二　意見封事　封事三箇條

一、請禁奢侈事、(中略)

抑朝廷所行者、從制猶遲、人君所好者、承指蓋速、(中略)

天暦十一年十二月二十七日　　從五位上行右少辨臣菅原文時上

我君

願文集　一　千日御講御願文　第五度

夫以慈悲者、諸佛發心之本也、故以度衆生爲四弘之始、仁惠者皇王理政之要也、故以愛萬民爲五常之先、弟子昔(鳥羽法皇)爲人君、豈忘愛萬民之心、今作佛子、盍發度衆生之願、(中略)

久安三年十一月卅日　　弟子沙門　敬白

菅家文草　五　詩五　三月三日(寛平三年)、同賦花時天似醉、應製、并序、

春之暮月、月之三朝、天醉于花、桃李盛也、我君(字多)一日之澤、萬機之餘、曲水雖遙、遺塵雖絶、書巴字而知地勢、思魏文以翫風流、蓋志之所之、謹上小序云爾、

本朝文粹　九　詩序二　乙　論文　北堂漢書竟宴、詠史、得蘇武、　紀　在昌

我君(醍醐)之馭天下也、憲章六籍、搜獵百家、留玄覽於鳥策、傾清聽於蠹簡、延喜十九年仲冬十一月、以此書經國之常典、命翰林菅學士講之、

讃岐典侍日記　上　思ひ出づれば、我君(堀河)につかうまつること、春の花、秋の紅葉を見ても、月の曇らぬ空をながめ、雪のあした御ともに侍らひて、もろともに八年の春秋つかうまつりしほど、(下略)

宮寺緣事抄告文部類　京都府　石清水八幡宮所藏

從一位藤原朝臣道(家)―信心堅固、敬啓、(中略)

我君(四條)猶幼、人以憑上皇之諸詢、

上皇不在、誰又扶我君之政化、(中略)我君實祚長久、鼎嗣繁昌、臣等始終如思、君臣合體者所悅也、又所仰也、(中略)然則我君之玉體無恙、(中略)

天福(文暦元)二年十月十八日

年中行事歌合　四十四番　右　行幸　內大臣

萬民てらさぬかたもなかりけり日の我君のいつる御幸に

我が寶の君

一天下の君

一天の君

天皇

榮花物語（二花山たづぬる中納言）　中納言（藤原義懐）は、守宮神かしこどころの御まへにて、ふしまろび給て、わが（花山）たからの君は、いづくにあからめさせ給へるぞやと、ふしまろびなき給、

榮花物語（五浦々の別）　七日（長徳四年三月）の夜は、今宮（敦康親王）見奉りに、藤三位をはじめ、さるべき命婦、藏人達參る、そのほどの御ようゐ皆有べし、二位は夢をまさしくみなして、かしらだにかたくおはしまさば、一天下の君にこそはおはしますめれ、よく〳〵心ことにかしづき奉らせ給へと、常に啓せさす、

太平記（九）　主上上皇御沈落事

爰ニ備前國ノ住人中吉彌八、行幸ノ御前ニ候ケルガ、敵近ク馬ヲ懸寄テ、忝モ一天ノ君、關東ヘ臨幸成處ニ、何者ナレバ加樣ノ狼藉ハ仕ルゾ、心アル者ナラバ、弓ヲフセ冑ヲ脫イデ通シ奉ルベシ、

日本書紀（二十二推古天皇）　十六年九月辛巳（十一日）、唐客裴世清罷歸、則復以小野妹子臣爲大使、吉士雄成爲小使、福利爲通事、副于唐客而遣之、爰天皇聘唐帝、其辭曰、東天皇敬白西皇帝、

上宮聖德法王帝說　明年（推古天皇三十年）二月廿二日甲戌夜半、太子（聖德）崩、

于時、多至波奈大女郎悲哀嘆息、白畏天（皇前日啓イ）之雖恐、懷心難止、使我大王與母王如期從遊、痛酷無比、我大王所告、世間虛假、唯佛是眞、玩味其法、謂我大王應生於天壽國之中、而彼國之形、眼所叵看、悕因圖像、欲觀大王往生之狀、天（推古）皇聞之、悽然告曰、有一我子、所啓誠以爲然、敕諸采女等、造繡帷二帳、畫者東漢末賢、高麗加西溢、又漢奴加己利、令者椋部秦久麻、

右在法隆寺藏、繡帳二張縫著龜背上文字者也、更更不知者云云、

法隆寺藥師如來光背銘

池邊（用明）大宮治天下天皇大御身勞賜時、歲次丙午年、召於大王天皇與太子而誓願賜、我大御病太平欲坐、故將造寺、藥師像作仕奉詔、然當時崩賜、造不堪者、小（推古）治田大宮治天下大王天皇、及東宮聖王大命受賜而、歲次丁卯年仕奉、

大安寺伽藍緣起流記資財帳（舒明）　初飛鳥岡基宮御宇天皇之未登極位、號曰田村皇子、是時、小（推古）治田宮御宇太帝天皇、召田村皇子、以遣飽浪葦墻宮、命問厩戸皇子之病、勅、病狀如何、思欲事在耶、樂求事在耶、復命、蒙天皇之賴、無樂思事、唯臣（伊）羆（熊）凝村始在道場、仰願奉爲於古御世御世御宇帝皇、將來御世御世御宇帝皇、此道場（乎）欲成大寺營造、伏願此之一願、恐朝廷讓獻（止）奏（支）、太皇天皇受賜已訖、（下略）

元興寺伽藍緣起并流記資財帳　難波(孝德)天皇之世、辛亥年正月五日、授塔露盤銘、

大和國天皇斯歸(シキ)斯麻(シマ)宮治天下名阿末(アマツ)久尒(キミ)意斯波羅岐比里尒波(ヒロニハ)彌己等之(ミヒ)、奉仕巷宜名伊那米(イナメ)大臣時、百濟國正明王上啓云(ヒテ)、万法之中、佛法最上也、是以天皇并大臣聞食旦宣、善哉、則受佛法造立倭國、然天皇大臣等受報業盡(ノ之イ)故、天皇之女佐久羅韋等由良宮治天下名等己彌居加斯夜比(支イ)彌乃彌己等世、及甥名有麻移刀等己彌(カイ)彌乃彌己等時、奉仕巷宜名有相明子大臣爲領、及諸臣等讚云、魏々乎、善哉〻〻、造立佛法、父天皇父大臣也、即發非心、誓願十方諸佛、化度衆生、國家大平、敬造立塔廟、

令義解　六儀制令　天皇、詔書所稱、

日本書紀　三神武天皇　神日本磐余彦天皇、諱彦火々出見、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊第四子也、母曰玉依姬、海童之小女也、天皇生而明達、意確如也、

續日本紀　一文武天皇　天之眞宗豐祖父天皇、天(天武)淳中原瀛眞人天皇之孫、日並知皇子尊之第二子也、日並知皇子尊者、寶字二年追崇尊號、稱岡宮御宇天皇也、有勅、母天(天智)命開別天皇之第四女、平(元明)城宮御宇日本根子天津御代豐國成姬天皇是也、

日本後紀　十四平城天皇　天皇、諱安殿、皇(桓武)統彌照天皇之長子、母曰藤原(乙牟漏)贈太皇太后、寶龜五年、生於平城宮、

續日本後紀　一仁明天皇　天皇、諱正良、先(嵯峨)太上天皇之第二子也、母太皇太后、贈太政大臣正一位橘朝臣清友之女也、太后曾夢、自引圓座積累之、其高不知極、每一加累、且誦言卅三天、因誕天皇云、

文德實錄　一　文德天皇、諱道康、仁明天皇長子也、母藤原氏、贈太政大臣正一位冬嗣之女也、

三代實錄　一清和天皇　天皇、諱惟仁、文德天皇之第四子也、母太皇太后藤原氏、太政大臣贈正一位良房朝臣之女也、嘉祥三年歲在庚午三月廿五日癸卯、生天皇於太政大臣東京一條第、

類聚三代格　二年分度者事

太政官符

應以勸修寺爲定額寺并置年分度者二人事（中略）

右律師法橋上人位承俊奏狀�√、件寺贈皇(藤原胤子)后存生之日、爲令誓護天(字多)皇陛下所建立也、（中略）

延喜五年九月廿一日

中右記　寛治(嘉保元)八年正月一日癸酉、(中略)天皇(堀河)御南殿、(註略)內侍二人候璽劍、女房四人扈從、(中略)天皇御出、近仗稱警、(中略)天皇還御中殿、

民經記　寛喜三年正月七日甲午、(中略)今日白馬節會、(中略)天皇(後堀河)著御靴、頭亮、頭中將候之、(中略)天皇御箸鳴、此間入御、頭中將進候、

看聞御記　永享五年正月三日、(中略)抑今夜天皇(後花園)有御元服、加冠攝政太政大臣、(二條持基)理髮左大臣(室町殿義教)右大將兼、

言國卿記　明應二年正月一日、(中略)今夜節會、(中略)次天皇(後土御門)出御、

宣順卿記　明曆二年正月廿三日、天皇(後西)登壇、卽位日也、

實久卿記　文化十四年九月廿一日壬戌、今日天皇(仁孝)於紫宸殿、被行卽位禮給、

大日本帝國憲法　第一章　天皇

第一條　大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス

皇室典範　第二章　踐祚卽位

第十條　天皇崩スルトキハ皇嗣卽チ踐祚シ祖宗ノ神器ヲ承ク

史記　六秦始皇本紀　二十六年、(中略)秦初并天下、(中略)寡人(始皇)以眇眇之身、興兵誅暴亂、賴宗廟之靈、六王咸伏其辜、天下大定、今名號不更、無以稱成功傳後世、其議帝號、丞相綰、御史大夫劫、(註略)廷尉斯等(註略)皆曰、昔者五帝、地方千里、其外侯服夷服諸侯或朝或否、天子不能制、今陛下(註略)興義兵誅殘賊、平定天下、海內爲郡縣、法令由一統、自上古已來未嘗有、五帝所不及、臣等謹與博士議曰、(註略)古有天皇、有地皇、有泰皇、泰皇最貴、臣等昧死上尊號、王爲泰皇、命爲制、令爲詔、(註略)天子自稱曰朕、(註略)王曰、去泰著皇、采上古帝位號、號曰皇帝、他如議、制曰可、

舊唐書　本紀五高宗下　五年(咸亨)秋八月壬辰、(中略)皇帝稱天皇、皇后稱天后、〔晉劉昫等撰開運三年(天慶九年)卒〕

書紀集解　三神武天皇　按、晉書安平獻王傳曰、天皇之尊、此文指魏帝爲天皇、蓋稱周王爲天王之類也、唐書高宗紀曰、上元(咸亨五年)元年皇帝稱天皇、皇后稱天后、上元元年、當天武天皇三年、此紀以十年始之、後于上元元年七年、推古天皇十六年紀曰、天皇聘唐帝、其辭曰、東天皇敬白西皇帝、推古天皇十六年、當隋大業四年、距上元元年六十七年、旣有天皇之號、是不據于唐之證也、

滿濟准后日記　永享四年四月廿六日、(中略)一、當年御任槐事、內大臣、自攝政(二條持基)頻被申

天王

間、大略御治定、其故ハ明年天王(後花園)御元服也、被任至德御例、理髮事可有御參歟、

羅山林先生文集 六十一 雜著六　本朝年中行事略

正月

元日　四方拜　朔日寅時　天王唱屬星名、拜天地四方、以禳年災祈福祚、(中略)

二日　朝觀　天王行幸于太上皇及太后宮、

古事記 上序　臣安萬侶言、(中略)伏惟皇帝(元明)陛下、得一光宅、通三亭育、

續日本紀 十三 聖武天皇　天平十年春正月丙戌(十七日)、皇帝幸松林、賜宴於文武官主典已上、賚祿有差、

日本後紀 五 桓武天皇　延曆十六年春正月戊子朔、皇帝御大極殿、受朝賀、

令義解 六 儀制令　皇帝、華夷所稱、謂、華華夏也、夷夷狄也、言王者詔諭於華夷稱皇帝、即華夷之所稱亦依此也、

淳和天皇御卽位記　弘仁十四年四月廿七日辛亥、今皇帝大極殿即位記、儀同元正、

三代實錄 四十四 陽成天皇　元慶八年二月四日乙未、(中略)親王公卿步行、奉天子神璽寶鏡劍等、今皇帝於東二條宮、百官諸仗、圍繞相從、

後二條師通記　寛治三年正月五日丙子、(中略)天皇(編河)御南殿北廂、着給大床子、(中略)

裏書、(中略)左大臣(源俊房)進皇帝前、小左跪膝行、理御冠訖、立西柱下內、本所立也、皇帝入北廂、(中略)皇帝受杯、置於薦西、攝政(藤原師實)立定後、左大臣取一肴物、以進皇帝、々々受之、(中略)皇帝取坏、以匕嚌醴、了置於薦東、(中略)皇帝入清涼殿、

愚昧別記　文治(建久元)六年正月三日戊午、今日主上(後鳥羽)御元服日也、(中略)次皇帝著朝衣出御、縫腋袍、御草鞋、

後深草院御記　御即位部類　弘安(正應元)十一年三月十五日庚子、今日皇帝(伏見)即位日也、治曆以後相續之嘉例、用太政官廳也、仍早旦行幸彼廳、(中略)朕密見物也、八葉車如常、

伏見院御記　御即位部類　延慶元年十一月十六日庚子、今日皇帝(花園)爲即位、行幸于太政官廳、仍爲路頭御見物、辰一點、上皇(後伏見)并永福門院御幸、

公名公記　永享五年正月三日戊午、今日天皇(後花園)御歲十五、有御元服事、予可令參仕之由、藏人權右少辨長淳相催畢、(中略)次皇帝着縫腋御袍、黃染、櫨出御草鞋、帳中御座、(中略)次兩府再拜歸入給、次皇帝入御、

獨斷　上　天子正號之別名

皇帝、至尊之稱、皇者煌也、盛德煌煌無所不照、帝者諦也、能行天道、事天審諦、故稱皇帝、

日本書紀　繼體天皇（十七）　六年冬十二月、百濟遣使貢調、別表請任那國（中略）四縣、（中略）由是改使而宣勅、付賜物并制旨、依表賜任那四縣、大兄皇子（安閑天皇）前有緣事、不關賜國、晩知宣勅、驚悔欲改、令曰、自胎中（應神）之帝、置官家之國、輕隨蕃乞、輙尒賜乎、乃遣日鷹吉士、改宣百濟客、使者答啓、父天皇圖計便宜、勅賜既畢、子皇子豈違帝勅、妄改而令、必是虛也、

續日本紀　淳仁天皇（二十二）　天平寶字三年春正月庚午（三日）、帝臨軒、高麗使楊承慶等貢方物、（中略）六月庚戌（十六日）、帝御內安殿、喚諸司主典已上、

文德實錄　一　嘉祥三年夏四月癸丑（六日）、帝公除、百官吉服、（中略）戊午（十一日）、帝自雅院、移御中殿、（中略）甲子（十七日）、帝卽位於大極殿、

三代實錄　陽成天皇（三十四）　元慶二年冬十月廿四日丙戌、（中略）天皇御紫宸殿、王公侍宴、命酌奏樂、終日酣暢、（中略）先是、去元慶元年五月六日、帝御武德殿、令左右馬寮細馬競走角其足、（中略）去年冬有事大嘗、帝親奉祀、是故今日有此事焉、

寬平御遺誡　醍醐天皇（延喜）　帝王、（中略）造羅城門、巡幸覽之、卽仰工匠曰、此門高可減五寸云云、後又幸覽之、卽喚工匠如何、工匠云、旣減、帝歎曰、悔不加五寸、工匠聞之、伏地絕息、帝奇聞（聞カ）、工匠良久蘇息、卽云、實不減、然而爲有煩詐言耳、帝宥其罪、

愚昧別記　文治（建久元）六年正月三日戊午、今日主上（後鳥羽）御元服日也、（中略）太政大臣（藤原兼實）昇西階、入第二間、（中略）此間帝取盃、奠簀薦西端、

岡屋關白記　御卽位記　貞永元年十二月五日庚辰、是日天皇（四條）卽位於太政官廳、（中略）已斜行幸、入御東門、自休幕遙見其儀、皇后（藤原鎌子）抱帝同輿、一如舊、叔父攝政左大臣（藤原教實）候御後、

大外記師遠記　大治二年六月十七日、巳刻、相者主計漏（屬カ）重經來、依相招也、師遠示云、今年天皇（崇德）可有御書始事、爲明經博士之輩九人、爲帝者之師、

日本書紀　雄略天皇（十四）　四年春二月、天皇射獵於葛城山、急見長人、來望丹谷、面貌容儀相似天皇、天皇知是神、猶故問曰、何處公也、長人對曰、現人之神、先稱王諱、然後應導、天皇答曰、朕是幼武尊也、長人次稱曰、僕是一事主神也、

日本書紀　繼體天皇（十七）　二十四年春二月丁未朔、詔曰、自磐余（神武）彥之帝、水間（崇神）城之王、皆賴博物之臣、明哲之佐、（中略）爰降小泊（武烈）瀨天皇之王天下、幸承前聖、隆平日久、俗漸蔽而不寤、政浸衰而不改、

日本書紀　孝德天皇（二十五）　大化二年秋八月庚申朔、癸酉（十四日）、詔曰、（中略）由是預宣、使聽知朕所懷、王者之兒、相續御寓、信知時帝與祖皇名、不可見忘於世、而以王名、輕掛川野、呼名百姓、

誠可畏焉、凡王者之號、將隨日月遠流、祖子之名、可共天地長往、

小右記　治安元年二月十四日己未、（中略）匠作來、小時退出、臨昏來云、參入道殿（藤原道長）、命云、行幸歸御同往亡、々々不歸宅云々、見曆序、吉平所陳不當者、行幸延引事、問遣吉平朝臣、注送云、（中略）依如此事延引歟、往亡日事、其謬（誤カ）事也、擇日、王者與臣下體異也、以出行不吉日、古今行幸多、何況於還御之日哉、

蕉軒日錄　文明十八年三月四日、（中略）昨日、慈祥袖陳古冊至、是乃佛心古劒禾（和）上所謄也、今朝開而讀、（中略）噫佛心者、南朝王者所鑽仰、大雄之貴基尙存、一百年手澤雄健拜誦之、

日本書紀　繼體天皇（十七）　元年三月庚申朔、詔曰、神祇不可乏主、宇宙不可無君、天生黎庶、樹以元首、使司助養、令全性命、

懷風藻　從四位下刑部卿山前王一首、

五言、侍宴、一首、

至德洽乾坤、清化朗嘉辰、四海旣無爲、九域正清淳、元首壽千歲、股肱頌三春、優々沐恩者、誰不仰芳塵、

本朝文粹　菅三品（文時）　二勅答　答諸公卿請減封祿表勅

勅、朕（村上天皇）以眇身、謬爲元首、連屬澆世、道離淳源、近曾炎旱、人庶憂勞、（中略）

天曆十年八月十九日

本朝世紀　大內記藤原兼衡作

康和（承德三）元年八月廿八日戊戌、改元、爲康和元年、（中略）

康和　地震并疾疫

詔、訪連山之奧義、則革故之蹤長存、酌大漢之遺流、亦建元之源無竭、（中略）朕（堀河天皇）以眇身、謬爲元首、所守者前哲之道焉、（中略）

康和元年八月廿八日　御畫　中務少輔從五位上藤原朝臣家保宣奉行

新續古今和歌集　序　征夷大將軍源（足利義教）丞相、稟左文右武之資、懋南征北伐之績、不啻股肱于元首、父母於黎民、（中略）永享戊午（十年）八月下澣謹序、

日本書紀　仁德天皇（十一）　四十一（應神天皇）年春二月、譽田（應神）天皇崩、（中略）爰淤宇往于韓國、即率吾子籠而來之、因問倭屯田、對言、傳聞之、於纒（垂仁）向玉城宮御宇天皇之世、科太子大足彥（景行天皇）尊、定倭屯田也、是時勅旨、凡倭屯田者、每御宇帝皇之屯田也、其雖帝皇之子、非御宇者、不得掌矣、是謂山守地非之也、

續日本紀　四　元明天皇　和銅元年二月戊寅(十五日)、詔曰、(中略)遷都之事、必未遑也、而王公大臣咸言、往古已降、至于近代、揆日瞻星、起宮室之基、卜世相土、建帝皇之邑、定鼎之基永固、無窮之業斯在、

續日本紀　三十　稱德天皇　神護景雲三年冬十月乙未朔、詔曰、(中略)復詔久、掛毛畏伎朕我天乃御門帝皇我御命以天勅之久、朕爾奉侍牟諸臣等、朕乎君止念牟人方、太皇后仁能奉侍禮、

本朝文粹　二　意見封事　意見十二箇條　善相公

一、應消水旱、求豐穰事、

右臣伏以、(中略)臣窺漢國之史籍、閱本朝之文記、凡厥禪徒、未必皆修學俱備、禪智兼高者也、然而或固守律儀、至死不犯、或偏行菩薩、忘身利佗、故帝皇之誡、依禪僧而易感、禪僧之念、與如來而必通、(中略)

延喜十四年四月廿八日　從四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上封事

源平盛衰記　二十六　入道非直人、附慈心坊得闍魔請事、

唐國ノ帝王マデ聞ェ給ツ、日本輪田ノ平親王ト呼テ、諸ノ珍寶ヲ送ラル、帝皇ヘダニ

モ參ザルニ、有難キ面目ナリキ、

日本書紀　六　垂仁天皇　三年春三月、新羅王子天日槍來歸焉、(中略)一云、(中略)天日槍對曰、僕新羅國主之子也、然聞日本國有聖皇、則以己國授弟知古、而化歸之、

續日本後紀　十三　仁明天皇　承和十年春正月辛丑(十二日)、(中略)左大臣正二位藤原朝臣緒嗣上表言、踟躕暮景、側足重泉(黃泉)、仰堯闕而待終、(中略)此則聖皇叡思無窮、議及胡耇、臣數年臥疾、不自支持、

三代實錄　五　清和天皇　貞觀三年三月十四日戊子、於東大寺、設無遮大會、(中略)卽說咒願曰、(中略)

先帝(文德)昇遐、聖皇繼體、文思欽明、垂拱無爲、

菅家文草　五　詩五　七夕(寛平七年)應製

今夜不容乞巧奠、唯思萬歲聖皇(字多)占、明朝大史何來奏、更有文星映玉簾、

本朝文粹　十一　詩序四　序丁草　惜秋翫殘菊、各分一字、應製、　紀納言(長谷雄)

晚秋九月、夜漏三更、聖皇詔於侍臣、令各獻詩、卽賜題目、惜秋翫殘菊、蓋賞時變也、

台記　久壽二年五月三日己酉、今日重辭左大臣并隨身、(中略)表中聖代天慈闕字、聖

明皇

皇平出、其聖代天慈可平出歟、問長光之處、申云、所習傳如表、余(藤原賴長)忝見公式令、天皇々帝平出、聖化天恩闕字、今案、聖皇可准天皇々帝等、聖代可准聖化、天慈可准天恩、長光所申既合令意、(中略)

臣某言、屢獻表章、粗述意緒、(中略)聖(近衛)皇之恩未報焉、何過高枕於家園之夜月、

性靈集　三　勅賜屏風書了、即獻表并詩、

沙門空海言、去六月二十七日、主殿助布勢海、將五彩吳綾錦緣五尺屏風四帖、到山房來、奉宣聖旨、令空海書兩卷古今詩人秀句者、(中略)沙門空海、誠惶誠恐謹言、

弘仁七年八月十五日　沙門空海上表

蒼嶺白雲觀念人、等閑絕却草行眞、心遊佛會不遊筆、不顧揚波爾許春、豈謂明皇(嵯峨)交染翰、

鵠頭龍爪爲君陳、

凌雲集　從六位下守大內記大伴宿禰氏上一首

渤海入朝

自從明皇御宰曆、悠々渤海再三朝、乃知玄德已深遠、歸化純情是最昭、

本朝麗藻　上　七言、暮春侍宴左丞相東三條第、同賦度水落花舞、應製詩、一首、以輕爲韻、并序、

皇明

我皇

君臣宴樂歡游好、落葉亂葩度水輕、霜葉冬題陪地下、風花春宴近皇明、醉歌得趣桃源路、蹈舞欲看李部榮、　江匡衡（中略）

日本書紀　二十五孝德天皇　大化二年三月壬午(二十日)、(天智天皇)皇太子使使奏請曰、昔在天皇等世、混齊天下而治、及逮于今、分離失業、謂國業也、屬天皇我皇可牧萬民之運、天人合應、厥政惟新、

凌雲集　外從五位上行山城介高丘宿禰第越二首

三月三日、侍宴神泉苑應詔、

我皇微樂事、元巳宴華林、壽爵山府久、恩波□謝深、

菅家文草　一詩一　九日、侍宴同賦喜晴、應製、并序、

我皇駈人壽域、觀風光以過凄涼、導物福庭推日月、而得長久、(上下略)

本朝文粹　十三咒願文　臨時仁王會咒願文　後江相公(大江朝綱)

三千界中、唯佛是仰、十六會外、此經殊勝、(中略)我皇虛心、叡慮安在、聖主責己、神襟何由、(中略)

天慶三年二月廿二日

主

日本書紀　十六武烈天皇　十一年(仁賢天皇)八月、億計(仁賢)天皇崩、(中略)十二月、大伴金村連平定賊訖、反政太子、請上尊號曰、今億計天皇子、唯有陛下、億兆攸歸、曾無與二、(中略)日本必有主、主日本者、非陛下而誰、(中略)於是太子命有司、設壇場於泊瀨列城、陟天皇位、

君主

後宇多法皇御遺告　京都府　大覺寺所藏

遺告諸弟子等

應勤護當寺教法後代內外事貳拾伍箇條狀

竊以法體常恒流傳屬人、幸宿緣相引、得沐高祖大師法流、此地相應建立寺院、傳持法流、仍聊書條目、以示吾後矣、(中略)

一、可眞俗同運勵興隆緣起第三、

夫以我大日本國者、法爾稱號秘教相應法身之土也、故我後繼血脉之法資、傳天祚之君主、可同盛衰、可伴興替、我法斷廢者、皇統共廢(廢)、吾寺興復者、皇業安泰、努々背吾此意莫悔耳、

聖主

續日本紀　四十桓武天皇　延曆十年春正月癸酉(十二日)、春宮亮正五位下葛井連道依、主稅大屬從六位下船連今道等言、(中略)方今聖主照臨、在幽盡燭、至化潛運、稟氣歸仁、

續日本後紀　十八仁明天皇　承和(嘉祥元)十五年春正月癸未(二十二日)、正三位守右大臣兼行右近衛大將藤原朝臣良房上表、請退大臣職曰、(中略)臣以菲磷、本謝聲華、幸藉時議、早參藩邸、聖主加其簪屨之恩、採其錐刀之末、

類聚三代格　二佛事上　年分度者事

太政官符

應置仁和寺年分度者二人事、(中略)

如今聖(宇多)主陛下、近爲莊嚴山陵、遠爲興隆佛法、建立精舍於山陵、奉廻白業於聖靈、(中略)

寬平二年十一月廿三日

明衡朝臣

本朝續文粹　八序上　詩序上　帝道　七言、仲秋釋奠聽講左傳、同賦上下和睦詩一首、并序、

我國家聖主臨朝、賢相佐政、文教秀於劉秀、更褊大漢之譽、

古今著聞集　三政道忠臣第三　延喜(醍醐)聖主、位につかせおはしまして後、本院(藤原時平)、右大臣(菅原道眞)菅家、定國朝臣、季長朝臣、長谷雄朝臣、此五人、其心をしれり、

玉葉　文治二年十一月十四日丁巳、(中略)親經又云、御書始日次、重問之處、十二月一

明主

日甲戌、爲天曆(村上)并延久(後三條)聖主御書始之日之由、所申也云々、

樵談治要　一、神をうやまふべき事、

代々の聖主は、いづれも我御身のためとはおもひ給はず、萬民のために、かくのごとき祭などをさだめさせ給へる也、

本朝文集　七十七　勸進再興書寫山圓敎寺狀　藤原公夏

書寫山別院文理寺勸進沙門盛賢敬白、請早蒙信男信女之芳助、以遂一宇一佛之再興狀、

夫當寺者、行基菩薩開闢之名趾、藥師如來本尊之靈閣也、(中略)保元(後白河)聖主、汲觀自在尊之誓海、晝夜七箇、滿參籠之願焉、故勅而賜文理之寺號、(中略)

永正十四年八月日

續日本紀　十四聖武天皇　天平十三年三月(二十四日)乙巳、詔曰、朕以薄德、忝承重任、未弘政化、寤寐多慚、古之明主、皆能先業、國泰人樂、災除福至、修何政化、能臻此道、

江吏部集　中人倫部　述懷古調詩、一百韻、

其後未幾日、昇殿接神仙、近左右師子、攀樓殿環玭、執卷授明主、縱容冕旒裏、

國主

晴御會部類記　無名記

建保六年八月十三日壬子、於中殿、初講和歌、題云、池月久明、戌時出(順德天皇)御書御座、(中略)

秋夜侍中殿、同詠池月久明、應制和歌一首、并序、　右大臣正二位臣藤原朝臣道家上

夜月屬於誰人、蓬萊宮之明主也、秋水比於何處、芙蓉池之勝形也、賞此景趣、命以宸遊、

願文集　三　伏見院第三回忌如法經供養御願文　日野前大納言草

夫一切三世之如來、(中略)同本朝寬元(後嵯峨)明主之二十餘、而御俗、弘詩書禮樂之道、(中略)

元應元年八月廿四日　太上(後伏見)天皇敬白

三代實錄　三十三陽成天皇　元慶二年夏四月廿九日甲午、設一百講座、說仁王般若經、京師始自御在所、至于聖神寺卅二、畿內及外國六十八、其咒願文曰、南閻浮提、日本國主、位纂洪緒、業字黎民、

菅家文草　八太上天皇贈答天子文　奉朱雀(字多)院太上皇勅、重請停尊號狀、

使者往反、來報再三、(中略)縱佛子早停本號、其國王猶修舊禮、雖非上皇、可得尊重、一人國主如是尊重、四海黎民、誰爲輕慢、(中略)

昌泰二年十月廿(卅カ)日

人主

願文集　二　龜山殿御逆修願文　弟子沙彌敬白

夫以（中略）加之憐窮乏之輩、施賑恤之恩、國主（龜山）皇帝下聖旨、而宥五刑輕重、太上（後嵯峨）天皇廻仙蹕、而增一善之威儀、（中略）

文永五年十月二十三日

日本書紀　十七　繼體天皇　八年（武烈天皇）冬十二月己亥（八日）、小泊瀨（武烈）天皇崩、元無男女、可絶繼嗣、壬子（二十一日）、大伴金村大連議曰、方今絶無繼嗣、天下何所繫心、自古迄今、禍由斯起、今足仲彦（仲哀）天皇五世孫、倭彦王、在丹波國桑田郡、請試設兵仗、夾衞乘輿、就而奉迎、立爲人主、大臣大連等、一皆隨焉、

類聚三代格　七　公卿意見事

太政官符

一、順時令事、

右同前奏狀偁、人主發號施令、必奉天時、十二月得其時、則陰陽和而終始成也、（中略）以前意見奏狀、依今月八日詔書、頒下如件、

天長元季八月廿日

源平盛衰記　四十三　二位禪尼入海事

一天ノ主

明王

聖王

昔ハ一（安德）天ノ主トシテ、殿ヲバ長生ト祝ヒ、門ヲバ不老ト名ケシカ共、今ハ雲上ノ龍下テ、忽ニ海中ノ鱗ト成給コソ悲シケレ、

菅家文草　四　讀改元詔書、絶句、　源爲憲

明王欲變舊風煙、詔出龍樓到海壖、爲向樵夫漁父祝、寛平兩字幾千年、

本朝麗藻　下　帝德部　感減四分一之詔、一首、

減服御常膳物

明王濟世幾多功、遍代疲民事儉恭、御府奇文應減製、天厨異味不要重、

江吏部集　中　文部　仲春釋奠、聽講左傳、同賦以德撫民、一首、

明王德遍撫黔首、雨露不論踈與親、獨有翰林花未拆、朝恩弃忘晚成人、

源平盛衰記　十一　清盛上洛、靜憲法印勅使、附靜憲與入道問答事、

入道大ニ瞋レル體ニテ、爰ニテ對面セラレタリ、宣ケルハ、（中略）臣下ノ身トシテ、爭カ明王ノ勅ヲ背侍ルベキ、（中略）漢家本朝、明王ノ臣下ヲ憐給フ事タメシ多シ、

日本書紀　十一　仁德天皇　四年（丙子）春二月己未朔甲子（六日）、詔羣臣曰、朕登高臺以遠望之、烟氣不起於域中、以爲百姓既貧、而家無炊者、朕聞、古聖王之世、人々誦詠德之音、家々有康哉之歌、

文華秀麗集　上遊覽　江樓春望應製、一首、　野岑守

春雨濛々江樓黑、悠々雲樹盡微茫、(中略)滔々流水何所似、四海朝宗歸聖王、

扶桑略記　二十九後冷泉天皇　康平(治暦元)八年九月廿五日壬午、公家(後冷泉)奉爲先帝(後朱雀)、於宸居東對、設四日八座法會、供養御筆金字法華經并白檀釋迦三尊、一間、阿闍梨惟尊表白、聖王陛下、舜日高晴、一天皆仰仁風、堯川永清、四海悉浴恩波、

文德實錄　五　仁壽三年夏四月丙戌(二十六日)、詔曰、皇王建極布政、貴其順時、聖哲凝規宣風、欲其應節、

類聚三代格　二年分度者事

太政官符

應任理課試年分度者事

右去延曆廿五年正月廿六日格云、(中略)奉勅頃年如聞、愛憎任意、選擇失方、漢音癈(廢)之而無試、大義問之而不精、高才含鵕退之歎、淺識懷鴻漸之喜、一則違如來之幽禁、一則乖皇王之顯法、非唯愁吟切於人心、兼復喧訟驚於物聽、(中略)

貞觀十一年五月七日

日本紀竟宴和歌　天慶六年　日本紀竟宴、各分史、得王仁一首、并序、

從五位下行大內記兼近江權少掾橘朝臣直幹

原夫有國有家之后、先設記言記事之官、所以知萬代之規摹、察百王之號令者也、(中略)文武謳歌之初、受其曆數、乃是四十二帝之興衰者、纖微必錄、一千餘年之治亂者、旨要無遺、寔著述之菁藻、爲皇王之炳戒、

猪隈關白記　承元二年閏四月廿七日丙申、(中略)此日、依多武峯御影燒失事、有三社奉幣事、使氏職事等也、(中略)

三社告文如此、

維承元二年歲次戊辰閏四月庚午朔、廿七日丙申吉日良辰爾、關白從一位藤原(近衛家實)朝臣、掛毛畏岐某大神乃宇豆乃廣前爾、恐美恐美毛申賜者久申久、謬承列祖之餘慶旦、專忝惣己之崇班世利、庸質爾志旦爲家門之長利、短慮爾志爲皇王之佐利、

本朝文粹　十四追善　願文下　爲大納言藤原卿息女女御四十九日願文　慶保胤

弟子爲光、前白佛言、(中略)故圖金人以爲使、將通音信而無便、兼寫寶偈以代書、不聞于今

仁王

仁王垂哀憐、不知又我老身忘寢食、(中略)

寛和元年閏八月二日　弟子正二位行大納言兼春宮大夫藤原朝臣爲光

帝王

日本書紀　三十持統天皇　高天原廣野姫天皇(持統)、少名鸕野讃良皇女、天命開別天皇(天智)第二女也、(中略)天皇深沈有大度、(中略)雖帝王女、而好禮節儉、

寛平御遺誡　延曆(桓武)帝王、每日御南殿帳中、政務之後、解脫衣冠、臥起飲食、(中略)帝王平生晝臥帳中、令遊小兒諸親王、

本朝文粹　十一詩序四　序丁和歌序　奉賀村上天皇四十御算和謌序　藤後生

夫和歌之興、來尙矣、(中略)行基菩薩、臨難波津、贈於婆羅門僧正、達磨和尙、至富緒河、寄於斑鳩宮太子、況上古旣有奉賀帝王之嘉什、當今何無奉祈寶算之誦音哉、敢獻四首、其辭云、

玉葉　文治二年十月廿八日辛丑、(中略)又今年可有御書始之年也、一條院七歲有此事、又代々例、十二月有此事、帝王御書始、大略每度十二月被行也、

看聞御記　永享五年四月十九日、(中略)內裏ヘ九條相國伊通公奏書一帖進之、高倉院ニ被書進者也、帝王可有御心得事十七ヶ條被書載秘藏之本也、進置之、

本朝文集　八十　延喜式跋

清原賢忠　延喜式

延喜年中、藤左相府奉勅課諸博士、約復古之舊典、爲將來之矩範、上質諸天理、下達諸人情、帝王之制、坦然明白也、(中略)

正保丁亥(四年)夷則日

菅家文草　八太上天皇贈答天子文　奉朱雀(字多)院太上皇勅、重請停尊號狀

使者往反、來報再三、初擧佛法附國王之義、次陳天皇弃寶位之情、披讀之中、心神迷亂、雖似急々、不能不言、凡所謂附法國王者、是膺籙受圖之人君、非燒香散花之弟子、(中略)縱佛子早停本號、其國王猶修舊禮、雖非上皇、可得尊重、一人國主如是尊重、四海黎民、誰爲輕慢、(中略)

昌泰二年十月廿日(卅カ)

本朝世紀　仁平三年閏十二月八日壬辰、戌剋、中納言重通(朝臣)ヽ參議兼長(朝臣)ヽ着仗座、被定申仁王會(註略)并大祓、(註略)有草奏、(註略)

臨時仁王會咒願文

鷲頭之巔、釋尊說法、像末之隆、般若利生、波斯匿王、昔受付屬、日本國王、今致歸依、喩塹喩城、傳護國號、(中略)

仁平三年閏十二月十日

夢中問答　上　問、佛力法力たやすく定業を轉ずることあたはずば、何をか佛法の利益と申すべき、

答、（中略）日本に佛法のわたれることは、第三十帝廣庭（欽明）の天皇の御時なり、（中略）昔は內裏なんどへも出家の形にて參ることはなかりき、佛法流布の世になりて、國王御歸依の御ために、有智高德の僧を召し入れらる、それよりして法師の出入をゆるされけり、

凌雲集　內藏頭從五位上兼左馬頭美濃守小野朝臣岑守十三首、（中略）

奉和春日暮宿江頭亭子御製

君王獵罷日云暮、江上郵亭駐綵輿、

文華秀麗集　上遊覽　嵯峨院納涼、探得歸字、應製、　巨識人

君王倦熱來玆地、玆地清閑人事稀、池際追涼依竹影、巖間避暑隱松帷、

菅家文草　一詩一　早春侍內宴、同賦無物不逢春、應製、并序、

臣聞、春者一年之警策、四時之光粉也、時是鶯花、人皆鳧藻、君王遊豫、其不悅乎、

內舍人隨身表　京都府　陽明文庫所藏

如臣者山嶽降隔譽、（中略）偏賴祖宗之餘慶、久理君王之宏綱、

日本書紀　十一仁德天皇　十年冬十月、甫科課役、以構造宮室、於是百姓之不領、而扶老携幼、運材負簀、不問日夜、竭力競作、是以未經幾時、而宮室悉成、故於今稱聖帝也、

類聚三代格　二年分度者事

太政官符

應試度金勝寺年分者（度脫カ）二人事（中略）

右得近江國解偁、（中略）於是承（仁明）和聖帝、殊降綸旨、施入燈分、卽改金肅、賜額金勝、（中略）

寬平九年六月廿三日

本朝文粹　四論奏　太政官謹奏　都良香

停多嶺島隷大隅國事

右參議大宰大貳從四位下小野朝臣峯守等解偁、（中略）聖帝登樞、事期濟世、明王布政、理貴適時、（中略）

天長元年九月三日

今帝

東大寺獻物帳　正倉院御物

奉爲太(聖武)上天皇捨國家珎寶等入東大寺願文　皇太(光明子)后御製

又願、今帝(孝謙)陛下、壽同法界、福類虛空、刼石盡而不盡、海水竭而無竭、(中略)

天平勝寶八歲六月廿一日

續日本後紀　十　仁明天皇　承和八年六月庚戌(十一日)、武藏守從四位下正道王卒、(中略)緣

(淳和)後太上天皇之付屬、今帝亦鍾寵愛、

類聚三代格　二年分度者事

太政官符

應令受戒年分度者事

右得延曆寺去年四月十一日牒�√、(中略)但此寺年分者、惣八人也、就中六人、是先皇(文德)御願、

國忌之日、同令得度、今二人、卽今帝(清和)御願、臨降誕之日、奉爲賀茂春日兩處名神、亦令得度、(中略)

貞觀八年閏三月十六日

伊勢集　下　院(宇多)の帝と今(醍醐)の帝とおはしましける時、

當帝

日の光かさねて照れは紫のほしもふたつに色やなるらん

水鏡　下　仁明天皇　此東宮(恒貞親王)ト申ハ、淳和ノ御子ニテ御坐スレバ、當帝(仁明)トハ御イトコニテ、御年ハ十六歲ノ御事也、

后

今鏡　三　すべらぎの下　ふた葉の松　當帝(高倉)は一院(後白河上皇)の御子、御母は皇后宮滋子ときこえさせ給ふ、贈左大臣平時信のおとゞの御女なり、

古事記　上序　覺夢而敬神祇、所以稱賢后(崇神)、望烟而撫黎元、於今傳聖(仁德)帝、

本朝續文粹　一　雜詩　古調詩　西府作　江大(匡房)府卿

事后磨遲鈍、顧身榮蹇駑、朝恩常感激、暮齒更煩紆、

我后

本朝文粹　三　對冊　壽考　文章得業生正六位上行越前大掾大江朝臣匡衡對

對、竊以濠鴻滋萌、其靈肇彰、一十三頭之降跡、(中略)我后名軼稽古、化施當今、同降誕於壽

丘、富春秋而天長地久、

本朝文粹　十　序　詩序　丙　三　木　(寬平三年)三月三日、同賦花時天似醉、應製、　菅贈(道眞)大相國

春之暮月、月之三朝、天醉于花、桃李盛也、我(宇多)后一日之澤、萬機之餘、曲水雖遙、遺塵雖絕、書巳

字而知地勢、思魏文以翫風流、蓋志之所之、謹上小序云爾、

吾后

天皇の神聖を稱へ奉る稱號

アラヒトガミ

本朝續文粹　九　詩序中　七言、春日於秘書閣、同賦花柳如佳妓詩、并序　孝言朝臣

我后德化遠被、繼體守文、葳蕤之呈祥瑞也、當禁庭而挺出、

本朝文集　七十七　（永享九年十月）冬日侍行幸室町第、同詠松色映池和歌序　藤原兼良

東京城外勝境、左（足利義教）相府中名園、水引鴨川之餘流、山移鼇背之品宇、戲乎、太液何以過之、積翠未足比焉、吾后乘萬機之餘閑、動六龍之遊幸、

四

日本書紀　七　景行天皇　四十年冬十月戊午（七日）、（中略）爰日本武尊、則從上總、轉入陸奥國、時大鏡懸於王船、從海路廻於葦浦、橫渡玉浦、至蝦夷境、蝦夷賊首嶋津神、國津神等、屯於竹水門而欲距、然遙視王船、豫怖其威勢、而心裏知之不可勝、悉捨弓矢、望拜之曰、仰視君容、秀於人倫、若神之乎、欲知姓名、王對之曰、吾是現人神之子也、

日本書紀　十四　雄略天皇　四年春二月、天皇射獵於葛城山、忽見長人、來望丹谷、面貌容儀相似天皇、天皇知是神、猶故問曰、何處公也、長人對曰、現人之神、先稱王諱、然後應導、天皇答曰、朕是幼武尊也、長人次稱曰、僕是一事主神也、

續日本後紀　十九　仁明天皇　嘉祥二年三月庚辰（二十六日）、興福寺大法師等、爲奉賀天皇寶算滿于其冊、奉造聖像冊軀、（中略）副之長歌奉獻、其長歌詞曰、（中略）我國之、聖乃皇波、尊毛、御坐加、（中略）每皇爾、現人神止、成給、御坐（世波、下略）

アキツミカミ

書紀集解　七　王對之曰、吾是現人神之子也、按、現人神天皇之稱、言有神德而現在之人、孝德天皇大化元年紀曰、明神御宇（アラミカミトアメカシタシラス）、又公式令詔書式、明神御宇日本天皇、續後紀嘉祥二年興福寺大法師等長歌曰、我國之、聖乃皇波、御世御世爾、相承襲天、每皇爾、現人神止、成給、御坐世者、並是也、

續日本紀　一　文武天皇　元年八月庚辰（十七日）詔曰、現御神止大八島國所知天皇大命良麻止詔大命乎、集侍皇子等、王等、百官人等、天下公民諸聞食止詔、高天原爾事始而、遠天皇祖御世御世、中今至麻爾、天皇御子之阿禮坐牟彌繼繼爾、大八島國將知次止、天都神乃御子隨母、天坐神之依之奉之隨、聞看來此天津日嗣高御座之業止、現御神止大八島國所知倭根子天皇命、授賜比負賜布貴支高支廣支厚支大命乎受賜利恐坐氐、（下略）

續日本紀　四　元明天皇　和銅元年春正月乙巳（十一日）、武藏國秩父郡獻和銅、詔曰、現神（アキツミカミ）御宇倭根子天皇詔旨勅命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞宣、

延喜式　八　祝詞　神祇八　出雲國造神賀詞

八十日日波在止毛、（中略）掛麻久畏毛岐明御神（アキツミカミ）止大八島國所知食須天皇命乃手長能大御世止齋止（註略）爲氐、（下略）

萬葉集　六　雜歌　讃久邇新京歌二首、并短歌、

アキツカミ

アラミカミ

明津神、吾皇之、天下、八島之中爾、國者霜、多雖有、(下略)

八雲御抄　三下　帝王　異名　あきつ神、君を申也、わがすべらぎとつゞけたり、

日本書紀　二十五　孝德天皇　大化元年秋七月丙子(十日)、(中略)巨勢德太臣、詔於高麗使曰、明神

御宇日本天皇詔旨、

日本書紀　二十九　天武天皇　十二年春正月丙午(十八日)、詔曰、明神御大八洲日本根子天皇勅命者、

諸國司國造郡司及百姓等諸可聽矣、

令義解　七　公式令　詔書式

明神御宇日本天皇詔旨、謂以大事宣於蕃國使之辭也、云々咸聞、

明神御宇天皇詔旨、謂以次事宣於蕃國使之辭也、云々咸聞、

明神御大八洲天皇詔旨、謂用於朝庭大事之辭、即立皇后皇太子、及元日受朝賀之類也、云々咸聞、

釋日本紀　二十　第二十五　祕訓五　明神御宇日本天皇詔旨、

日本書紀通釋　五十七　明神、續紀に現御神とあり、共にアキツミカミと訓むべし、本訓にアラミカミとあるはわろし、萬葉に明津神吾皇とあり、天皇は明らかに神に坐すよしなり、

祝詞考　下　出雲國造神賀詞

萬葉に、明津神、吾王と有をば、あきつかみ、わがおほきみと訓、外なし、然らば公式令に、明神御大八洲天皇、こゝに明御神、宣命に、顯御神と有をも、共にあきつみかみと訓べき也、

後世顯御神をも、こゝをも、あらみかみと訓は、言よくもとゝのはざるをおもへ、

さて天皇は、今あきらかに、世におはします御神ぞと崇み畏みて申す言なり、

萬葉集　一　雜歌　過近江荒都時、柿本朝臣人麻呂作歌、

玉手次、畝火之山乃、橿原乃、日知之御世從、阿禮座師、神之盡、樛木乃、彌繼嗣爾、天下、所知食

之乎、(下略)

續日本後紀　十九　仁明天皇　嘉祥二年三月庚辰(二十六日)、興福寺大法師等、爲奉賀天皇寶算滿

于其冊、奉造聖像冊軀、(中略)副之長歌奉獻、其長歌詞曰、(中略)、我國之聖乃皇波、尊毛、御

坐加、日宮能、聖之御子能、天下爾、御坐天、御世御世爾、相承襲豆、每皇爾、現人神止、成給、御坐

世波、四方之國、隣皇波、百嗣爾、繼云止毛、何豆加、等久有牟、

日本紀竟宴和歌　得櫛玉饒速日命二首　學生蔭孫從七位上藤原朝臣忠紀

蘇朗美都邇、阿麻能伊婆布然、玖陀斯志波、比志理廼微餘袁、和多須登傳那理、

玉葉和歌集　十九　釋教歌　後嵯峨院御出家の時、御戒師に參りて侍りける、又後深草

院御ぐしおろさせ給ひけるに、おなじやうに參りて、思ひつゞけゝる、

二品法親王尊助

あきらけきひしりの御代に二かへりこゝろの玉をまたみかくかな

萬葉考　一　日知てふ言は、先月讀命は、夜之食國を知しめせと有に對て、日之食國を知ますは大日女の命なり、これよりして、天つ日嗣しろしをす御孫の命を日知と申奉れり、紀に神聖など有は、から文體に字を添しにて、二字にてそれはかみと訓なり、聖の字に泥て、日知てふ言を誤る說多かり、

倭訓栞　前編二十五　比の部　ひじり　日本紀に聖字をよめり、萬葉集に日知とかけり、日德を知しめす聖天子の稱也、又大人をもよめり、西土にも天子を聖といへれど、我邦日知の意は西土と異なり、天つ日嗣しろしめす皇孫の尊を申奉る也、

古事記傳　三十五　聖帝、二字を比士理と訓べし、日知の意なり、但し此は、皇國の元よりの稱には非じ、（中略）其は漢籍に、聖人と云者の德をほめて、日月に譬へたることあるを取て、日の如くして、天下を知しめすと云意なるべし、されば、日の如知の意なるを、如を省き云は常なり、然るに、此を皇國の元よりの稱として、日嗣所知看す意と思ふは非ず、日嗣知を日知と云むは、古の物言ざまに非ず、且若其意ならば、御世〻〻の天皇は、皆本より日知に坐ますを、今此仁德天皇をとり分て、されば、天皇を贊奉て日知と申すは、此天皇より始まれる稱申せるは、何の意とかせむ、事にて、漢國の例に效へる稱なり、

聖明

本朝文粹　五　佛事　奏狀上　請被以私稻各三千束、加擧正稅、充給施無畏寺三昧料狀、　（兼明親王）前中書王

右兼明、從去天德（曆カ）某年以還、奉爲聖明并法界衆生、結三昧之座、講一乘之文、（中略）

天曆七年二月日

明聖

江吏部集　上　四時部　七言、夏夜守庚申、侍淸涼殿、同賦避暑對水石、應製、一首、（并序）（中略）

幸入蓬萊近聖明、逐涼避暑石泉淸、五更眠覺巖風冷、三伏汗收岸雨晴、

本朝續文粹　六　奏狀上　正四位下行伊豫守源朝臣賴義、誠惶誠恐謹言、

請殊蒙天恩、依征夷功、被下重任宣旨、興復任國勘料公事狀、

右賴義謹撿案內、（中略）去康平六年、被任伊豫守矣、明聖之恩、尤足欽仰、（中略）

列聖

年月日

本朝世紀　久安四年五月廿日丁丑、今日、春季仁王會也、（中略）

臨時仁王會咒願文、（中略）

我后因此、御宇以來、逐列聖蹤、歸仁王敎、中丹叡慮、前白佛言、

大日本史　序　人皇肇基、二千餘年、神裔相承、列聖纘統、

累聖

三代實錄　序　臣時平等、竊惟、(中略)今上陛下、承累聖之寶稱、順兆民之樂推、

國聖

本朝文粹　十一詩序四　序丁草　九日侍宴、同賦寒菊戴霜抽、應製、　後江相公(大江朝綱)

白藏七旬、玄月九日、天子會王侯將相、宴集于紫宸殿、居談如舊、風景猶新、斯乃累聖之故事、重陽之佳遊也、

東大寺續要錄　八供養編　建久記　六年(建久)三月廿四日己酉、依東大寺供養、被行流人召返、(中略)

夫以一身三身之相、即皆出本覺眞如之中、(中略)彼法皇(後白河)叡情之慇懃、佛像開眼之鄭重、累聖尊崇之至、萬邦歸敬之趣、已詳於前、不須復記、(中略)

建久六年三月十二日　　皇帝(後鳥羽)　敬白

餘芳編年雜集　御祈之卷數表

法花一卷、爲八幡大神固之亦始、

不動呪千遍　三百爲國聖　三百春宮中宮

右大臣元　三百爲中納言元

一百爲　內藏大夫(中略)

聖代

聖日

仁壽二年十二月十四日　記上

本朝續文粹　四表上　辭關白表　　實綱朝臣

臣賴通言、(中略)倩思聖代殊私之寵、還爲愚躬沈痾之媒、伏乞、陛下(後冷泉)曲許懇祈、彌照旁午之德耀、早罷總己之恩詔、(中略)

康平七年七月八日　　關白從一位臣藤原朝臣上表

八雲御抄　三帝下王　異名　ひじりの御よ、聖代也、在萬葉、

本朝文粹　六申官奏　狀中官爵

散位從五位下宮道朝臣義行誠惶誠恐謹言、

請被殊蒙天恩、因准先例、拜任安房能登淡路等國守闕狀、　江　以言

右義行、天延元年候藏人所、貞元元年任木工允、當時造宮、日夕奔營、(中略)方今聖日(一條)新昇、淳風忽返、設官分爵、先後之次守法、春雨秋霜、賞罰之科克諧、(中略)

長德三年正月廿一日　　散位從五位下宮道朝臣義行上

日本書紀　十二履中天皇　五年冬十月甲寅朔甲子(十一日)、(中略)或者曰、車持君行於筑紫國、而悉挍車持部、兼取充神者、必是罪矣、天皇則喚車持君、以推問之、事既得實焉、因以數之曰、爾

雖車持君、縱撿校天子之百姓、罪一也、

日本書紀　二十四皇極天皇　四年六月戊申(十二日)、天皇御大極殿、(中略)中大兄(中略)以劍傷割入鹿頭肩、(中略)入鹿轉就御座叩頭曰、當居嗣位、天之子也、臣不知罪、乞垂審察、天皇大驚、詔中大兄曰、不知所作、有何事耶、

令義解　六儀制令　天子、祭祀所稱、謂告于神祇、稱爲天子、

類聚三代格　二年分度者事

太政官符

應加試年分度者二人事、(中略)

右延曆寺座主法眼和尙位圓珍表偁、(中略)仍於延曆(桓武)天子聖躬不豫之時、依經修法奉資寶祚、山家之開泰、莫不賴此功、(中略)

仁和三年三月十四日

日本紀略　醍醐天皇　延喜十年九月某日(二十五日、字多)、太上法皇登天台山、於座主增命房受灌頂、其次、廻心御受戒、々壇現紫金之光、天子(醍醐)聞之、遣使增命、授法眼和尙位、

本朝文粹　十一詩序四　序丁草　九日侍宴、同賦寒菊戴霜抽、應製、　後江相公(大江朝綱)

白藏七旬、玄月九日、天子會王侯將相、宴集于紫宸殿、居談如舊、風景猶新、斯乃累聖之故事、重陽之佳遊也、

台記　久安三年八月十日辛丑、今日天子(近衞)幸鳥羽南院、

禁祕御抄　下詔書　上卿奉勅、仰內記令作詔書、(註略)上卿令持內記奏之、入筥、天子覽之、書日返給、

願文集　三

無品法親王家

請諷誦事

三寶衆僧御布施麻布百端

右奉仰偁、後深草法皇、初者溫孝文帝之賢風、來從代邸兮、即天子之尊位、後者訪放勛氏之聖日、久卜汾懸兮、恣仙陬之樂遊、(中略)

別當法印大和尙位權大僧都圓譽奉

嘉元三年七月十三日

草文章博士淳範朝臣

後醍醐天皇宸筆御願文　和歌山縣　金剛峯寺所藏

敬白

立願事

一、天野社就垂跡本地、可奉甚深法樂事、

一、行幸高野山、可興密宗事、

一、爲當山佛法紹隆、興寺領可寄田地事、

右條々、天下靜謐之時、可果遂之狀如件、

延元々年十二月廿九日　　天子尊治　敬白

康富記　寶德二年五月十六日己未、(中略)清少納言殿令語給云、聖武天皇東大寺御建立之時、主上自令荷佛壇土之由有所見、以此例、龜山院南禪寺御建立之時、天子自令荷土給云々、

禁中幷**公家諸法度**

一、天子御藝能事、第一御學問也、

櫻町天皇宸筆般若心經　京都府　仁和寺所藏

(奥書)(中御門)伏惟、先帝仁政施萬姓、恩波溢四海、謙遜之聖慮深、而忽起脫履之思、花晨月夕、達和漢之睿才、鳳琴龍笛、御律呂之和調、堪思慕焉、嗚呼哀哉、寶算有限、登九天霞、眇身謾受神器、久居大寶、兢々如踏薄氷、愛憐終難忘厚恩、何以報之、今玆丁七回之忌辰、因親書金字般若波羅(密)密多心經、以祈追福云爾、

寛保三年四月十一日　　大日本國天子昭仁敬書

禮記　曲禮下第二　君天下曰天子、

獨斷　上　王者至尊四號之別名

天子、夷狄之所稱、父天母地、故稱天子、

榮花物語　十　ひかげのかづら　寛弘八年六月十三日(一條天皇)御讓位、十月十六日(三條天皇)御卽位なり、

(中略)そこらのかんだちめ殿上人、御おくりつかうまつりたまひて、御こしのさゝげられたまへるほどこそ、なをかぎりなき十善の王におはしますめれ、

古今著聞集　十三　哀傷　扨もかの御門(花山)、世をそむかせ給ふ事のおこり、いとあはれにかなし、(中略)この世のたのしみは、夢まぼろしの程なり、國王の位よしなしなどおぼしめしとりて、たちまちに十善の王位をすてゝ、一乘菩提の道に入らせ給にけり、

平家物語　八　法住寺合戰

十善の主

平大納言、新中納言、さこそ世末に成て候とも、義仲に語らはれて、都へ歸り入らせ給はん事、然るべうも候はず、十善の帝王、三種神器を帶して渡らせ給へば、甲を脱ぎ弓の弦を弛いて、降人に是へ參れとは仰候べし、

本朝文粹　十四　追善　願文下　陽成院四十九日御願文　後江相公（大江朝綱）

右去九月二十九日、忽出冷泉之寶宮、永遷眞如之華界、七七御忌、已當今朝、（中略）言其尊儀、娑婆世界十善之主、計其寶算、釋迦如來一年之兄、（中略）

天曆三年十一月十八日　別當前大納言源朝臣

圓融院御受戒記　寛和二年三月廿二日庚寅、（中略）侍臣曰、（中略）十善之主既富春秋、其猶如此、我等何益、

增鏡　上藤衣　三　今上（四條）は二歳にぞならせ給、あさましきほどの御いはけなさにて、いつくしき十善のあるじにさだまり給ことは、いとゆゝしきまで、さきの世ゆかしき御ありさまなり、

保元物語　三　新院（崇德上皇）御遷幸事

新院ヲ讃岐國ヘ遷シ奉ルベキ由ヲ奏聞ス、（中略）異朝ヲ聞バ、（中略）我國ヲ思ヘバ、安

康天皇ハ繼子ニ殺サレ、崇峻天皇ハ逆臣ニ犯サレ給ヒキ、十善ノ君、萬乘ノ主、先世ノ宿業ヲバノガレ給ハズト思召慰ムハシトゾ成ニケル、

太平記　七　先帝（後醍醐）船上臨幸事

忠顯朝臣是ヲ聞キ給テ、（中略）是程ニ推シ當テラレヌル上ハ、何ヲカ隱スベキ、屋形ノ中ニ御座アルコソ、日本國ノ主、忝モ十善ノ君ニテ入ラセ給フ、

讃岐典侍日記　十戒を先の世にうけさせ給ひて、破らせ給はざりければこそ、此世にて、十善の位ながく保ち、佛法をあがめ、一切衆生をあはれみさせ給ふ心、いまだ昔より今に至るまで、かばかりの帝王おはしまさず、

平戸記　仁治三年正月十九日壬寅、（中略）抑此事、關東計申之條、雖知末世之至極、可悲々々、十善帝位之運、更非凡夫愚賤之所思、

宴曲集　五　山

清和天皇は十善の寶位を振捨て、水の尾の山に住み給ふ、

受十善戒經　若有受持此十善戒、破十惡業、上生天上爲梵天王、下生世間作轉輪王、

十善法語　一不殺生戒　十善ヲ上品ニ護持スレハ諸天及金輪王ノ位ヲ得ル、中品ニ護持スレハ人中諸ノ王位ヲ得ル、下品ニ護持スルハ人中ノ豪貴トナルヤ、乃至分受護持ノ者モ人中ニ在テ其果報ムナシカラヌシヤ、是ニハ異說モ有、又此上中下品ト云ニ、各淺深ノ有コトナレトモ、先ツ大抵ハ上ノ如クニ憶念スヘキシヤ、〔慈雲撰〕

五伊勢集　下　亭子の帝をりゐ給はんとしける秋、

白露のおきかはるらん百敷をうつろふ秋は物そかなしき（中略）

とかきたりけるを、うへ御覽して、かたはらに書付させ給ふ、

身一つにあらぬ計をおしなへてゆき歸りてもなとかみさらん

圓融院扇合　宮の御方に上おはしまして、らごとらせ給ひて、かたせ玉へるかちわざ、六月十六日に、うへせさせ給ふ、

枕草子　宮の御前に、内の大臣の奉り給へりし御草子を、これに何を書かまし、うへの御前には、史記といふ文を書かせ給へるなどの給はせしを、

紫式部日記　殿、若宮いだき奉り給ひて、御前にいで奉り給ふ、うへいだきうつし奉らせ給ふ、

天皇の尊貴を稱へ奉る稱號

ウヘ

うへの御前

上様

榮花物語　五浦々の別　上わたらせ給て、若宮見奉らせ給、えもいはずうつくしうおはしまして、たゞ笑にわらひ物語せさせ給、（中略）うへも宮も萬におぼしめしはゞからせ給事おほくおはしませど、（下略）

增鏡　五内野の雪　時なりて、うへこなたに渡らせ給ふ、

御湯殿上日記　天正三年六月十五日、てんやくむすめ御下にまいる、日こあけあり、大はん所にての事也、（中略）御下は御ちやのゆのたなのかた、ふすましやうしのかたにさふらはれ候、うへにはれんたいの御しとねのうへに御さ候、

无上法院殿御日記　寛文九年九月卅日、かう神の御なくさみに、こよひ御くちとり有、女中衆みな〳〵殘らず御人數なり、（中略）上にも御らん成、

太平記　七　先帝船上臨幸事

佐々木富士名判官ガ番ニテ、中門ノ警固ニテ候ケルガ、（中略）彼官女ヲ以テ申入ケルハ、上様ニハ未ダ知シ召レ候ハズヤ、楠兵衞正成、金剛山ニ城ヲ構テ楯籠候シ處ニ、（下略）

資勝卿記　元和七年十二月十五日、

一、女御様御脇フサギ也、（中略）女御様の御うつくしさ、うへ様もながめいらせられ候

今の上

つる、

伏見宮日記　寶暦十二年七月廿一日、

一、上様(桃園)崩御ニ付、御所様爲伺御機嫌、御家來之輩、今明日准后様御殿江参上候也、

禁中執次詰所日記　文化六年三月二十四日甲申、仙洞(後櫻町上皇)御所ゟ御使、井上丹波守、

一、仙洞御所ゟ

上様(光格)江、生鯛一折、三尾、長御文箱添、

文會雜記　三上

一、上様ト云詞、平安ニテハ、上代ヨリ天子ヲサス詞ナリ、憲廟(德川綱吉)ノ御時、兩上様御機嫌宜ト京都ヘ云ヤラレタル文書アリ、京都ヨリトカクシテ、兩上様トハ、當今ト院御所ノ御事ナリヤ、合點ユカズト云來ル、憲廟モ聞召、今ヨリ左様ナル事云ヤルナト御意アリテ、ヤメニナリタリ、上ト公方ノ事ヲ云、尤廣クサス詞ナレドモ、書ニクキ事也、

榮花物語　一月の宴　かくていまのうへ(村上)の御こゝろばへ、あらまほしくあるべきかぎりおはしましけり、

增鏡　十一　さしぐし　いまのうへ(後二條)も、源氏(基子)の御腹にてものし給いとめづらしくやむごとなし、

俊賴口傳集　下　白雲の下居(オリヰル)山と見えつるは高根の花や散紛(マガ)ふ覽

是は忠岑に春の歌奉れと宣旨ありけるに、つかうまつりける歌也、躬恒是を聞て、府生おほきにあやまてり、いかでか宣旨によりて奏する歌に、おりゐるとはよまむ、御門を雲の上とは申に、位さらせ給ふをば、おりゐさせ給ふと申、

日本後紀　十二　桓武天皇　延暦二十三年冬十月甲辰(三日)、行幸和泉國、其夕至難破行宮、乙巳(四日)、(中略)上(桓武)御舟泛江、四天王寺奏樂、國司奉獻、

續日本後紀　三　仁明天皇　承和元年二月甲午(十三日)、上(仁明)始御射場、左右衞府相共奉獻、兼設賭物、上先射之、一箭中鵠、

台記　久安六年三月四日辛巳、午刻參内、申刻、上覽(近衞)明日舞人、召騎用之御馬、

玉葉　建久四年正月一日己巳、(中略)其後大將來臨、相伴參内、(中略)上(後鳥羽)御中宮御方云々、仍追參、小時上還御、聊有御歡樂事也、然而故不出口外、

類聚名義抄　一　上君

獨斷　上　上者、尊位所在也、太史令司馬遷記事、當言帝、則依違但言上、不敢渫瀆言

主上

尊號、尊王之義也、

續日本後紀　三仁明天皇　承和元年春正月辛未(二十日)、主上(仁明)內宴於仁壽殿、敎坊奏態、

貞信公記　延喜十三年正月十七日、依固物忌不參、今日主上(醍醐)不出御、

御堂關白記　長保(寛弘元)六年七月十日壬辰、參內、主上(一條)於庭中有御祈、候宿、

春記　長暦(長久元)四年十一月廿二日癸酉、賀茂臨時祭日也、未明參上、主上(後朱雀)先是御坐之、於臺盤所御覽也、

帥記　承暦四年九月十五日甲辰、今日齋宮群行也、(中略)主上(白河)遷御大極殿、

江記　天仁元年十一月廿一日、主上(鳥羽)御裝束御總角、

後鳥羽院宸記　建保二年四月四日戊戌、(中略)今日午剋許、主上(順德)聊御風氣云々、

禁祕御抄　下殿舍渡御　寛治堀河院燒亡後、大炊殿從東對還御西對、敷筵道、主上(堀河)御引直衣、內侍二人取劍璽出、

花園天皇宸記　元亨二年二月十二日庚戌、(中略)主上(後醍醐)殊令學中庸道給、政道可歸淳素云々、尤可然事也、近代儒道已廢來久、遇此時可有中興歟、

薩戒記　永享五年九月九日、今日內裏內々和歌御會也、當代初度也、(中略)主上(後花園)御年十五年也、仍左府被申行、內々御短冊始也、

東寺執行日記　嘉吉三年九月廿三日、子刻、大內悉燒亡、東西棟門計殘、主上(後花園)樣ハ近衞殿ヘ出御成、

拾芥記　永正四年三月廿六日、(中略)先主上(後柏原)御畫御座、作法見次第、

惟房公記　天文十一年正月廿五日丙午、主上(後奈良)爲御祈禱、因幡堂藥師參、

後水尾院年中行事　九月八日、內藏頭きくわたを獻ず、(中略)主上、院、女院、中宮、親王などは、こきくといひて、菊の花の上にしべのやうに小りん有、

无上法院殿御日記　寛文七年十一月廿二日、主上(靈元)御まりあそはされ、御くめしたまふと也、

八槐記　享保二十年十二月一日丙寅、今日主上(櫻町)被聞食琴、大膳權大夫近任宿禰參、假打板彈之、

小野職保日記　嘉永四年七月朔日乙酉、今日內侍所假殿渡御也、未半刻著束帶、參仕、戌半刻過渡御被相催、(中略)主上(孝明)令降殿御、東庭敷筵爲御座、

實麗卿記　慶應二年十二月十八日、主(孝明)上御疱瘡之由、臣下日々可窺御機嫌、

中家實錄　一　稱號　竝　音訓口義

主上、種倚、　天子之御別稱也、蓋尊居衆人之上、而主安國之事之義也、

南天竺婆羅門僧正碑幷序

夫佛日西流、遺風東扇、(中略)于時聖朝通好、發使唐國、使人多治比眞人廣成、學問僧理鏡、仰其芳譽、要請東歸、僧正感其懇志、無所辭請、(中略)以天平八年五月十八日、得到築紫大宰府、(中略)於是道俗輻輳、闐城溢郭、連成幕之袂、灑爲雨之汗、肩隨踵接、送入京華、皇(聖武)上大喜、仍勅住大安寺、供給隆厚、公王英彥、莫不宗敬、(中略)

新儀式　四　天皇賀大后御算事　(實龜元)神護景雲四年四月二十一日　故婆羅門僧正入室弟子傳燈住位僧修榮

裝束訖、皇上先令后宮近習侍女候氣色、大后着御大床子、

範國記　長元九年十一月十七日辛卯、無童御覽、(中略)次令入悠紀神殿給、(中略)皇(後朱雀)上端笏入御、出居左近中將良頼朝臣、持御劍在右、

願文集　四　顯德院(後鳥羽上皇)一日一切經供養

抑弟子(後鳥羽上皇)有限一日光陰、書一切經典之旨願、今當皇(順德)上君臨之初、謂天下聖治之德、保艾之代、善根得時、(中略)

建暦元年四月廿三日　　太上天皇(尊成)御諱　敬白

定基卿記　寶永四年正月一日乙卯、四方拜、出御、頭中將隆典朝臣候御劍、藏人辨尙長取御裾、(中略)皇(東山)上出御簀子時、隨御步前行也、

八槐記　明和七年十一月十三日乙卯、參內、今夜新嘗祭也、皇(後櫻町)上御于神嘉殿、夕曉神饌了、翌卯半刻、還御、

續日本紀　二十　孝謙天皇　天平寶字二年二月己巳(二十七日)、勅曰、得大和國守從四位下大伴宿禰稻公等奏偁、部下城下郡大和神山生奇藤、其根虫彫成文十六字、王大則幷天下人、此內任太(大)平臣守昊命、即下博士議之、咸云、(中略)聖上擧賢、內任此人、昊天報德、命其太平者也、加以地卽大和神山、藤此當今宰輔、事已有効、更亦何疑、

三代實錄　二十四　清和天皇　貞觀十五年十一月十六日丁丑、公卿奏言、(中略)豈可聖上尙撤菲食之膳、群下還厚素飡之祿、

小右記　長和四年四月七日丙辰、(中略)今日中宮女(藏子)親王三歲、著袴、(中略)左大臣催

李部王已下著饗座、酒酣夜深有朗詠、垂母屋御簾、卷庇御簾、聖上(三條)出御、

御讓位 并 **御卽位記**　貞永元年十月四日庚辰、是日皇帝(後堀河)於閑院、當時皇居、便宜同大內、讓位於皇太子(四條天皇)、諱秀仁、今上第一皇子、母皇后藤原蹲子、今中宮是也、聖上春秋廿一、太子二歲、

和長卿記　文龜元年九月十四日己丑、了菴和韻事、依侍從大納言之命、今日綴一章、付遣彼亞相之許、(中略)

和慧日大慈老和尙、名高海內、而恰爲叢林之座主也、于玆咫尺先皇(後土御門)龍顏、久致臣僧之禮、益有華衮之厚矣、頃得一夢之感、一日詣城南巨刹、焚瓣香於神靈之前、措佳什於尊影之傍、以同舊臣之懷、厥墨蹟飛入丹階、竟恭得受聖上(後柏原)之製和、因之亞台府拾遺公、亦取志於筆海也、

八槐記　延享四年三月十五日乙巳、今日遐(桃園天皇)仁親王、於小御所、可有御元服也、(中略)次聖上(櫻町)出御、

東大寺獻物帳　正倉院御物

奉爲太(聖武)上天皇捨國家珍寶等入東大寺願文

妾聞、悠々三界、猛火常流、(中略)

皇太(光明子)后御製

厨子壹口　赤漆文櫻木古樣作金銅作鉸具

右件厨子、(中略)天皇傳賜今上(孝謙)、今上謹獻盧舍那佛、(中略)

天平勝寶八歲六月廿一日

日本後紀　二十二　嵯峨天皇　弘仁三年十二月戊子(四日)、攝津國河邊郡空地冊町賜某親王(淳和天皇)諱、今上、

類聚國史　百四十七　國史　文部下　日本後紀序

今上(仁明)陛下、禀乾坤之秀氣、含宇宙之滴精、受玉璽而光宅、臨瑤圖而治平、

類聚三代格　二　修法灌頂事

太政官符

應修灌頂事

右入唐廻請益傳燈大法師位圓仁表偁、(中略)今上(仁明)陛下建華宇、安置名僧、轉經禮念、夙夜連聲、(中略)今上寶祚萬代長榮者、右大臣(藤原良房)宣、奉勅、依請、

嘉祥元年六月十五日

貞信公記　延喜九年八月廿四日丁巳、(中略)今上(醍醐)一皇子(將順親王)對面、

本朝文粹　十四　追善　願文下　爲二品長公主（尊子内親王）四十九日御願文、　慶　保胤

夫以人中之尊、猶現四枯之相、天上之樂、終爲五衰之悲、（中略）公主者、先太上皇之女、後太（冷泉）（圓融）皇之妃、今上陛下之姉、（中略）

寛和元年六月十七日

枕草子　今上（一條）一の宮（敦康親王）、まだ童にておはしますが、（下略）

扶桑略記　三十　堀河天皇　今上天皇、七十四代、諱善仁、

增鏡　三　藤衣　今上（四條）は、二歳にぞならせ給、

李花集　上　冬歌　今上（後村上）いまた吉野行宮にまし〳〵ける比にや、歳暮歌よみ侍しに、

あしかきのよしの丶里の冬こもり難波の春のためしにそまつ

願文集　五　盡七日（後土御門天皇）結緣經供養願文

夫解頤於圓融之月、衆僉非建立如來哉、（中略）抑今上（後柏原）皇帝蒙鞠育之恩卅有餘歳、（中略）

明應九年十二月廿三日

季連宿禰記　天和三年十二月十一日戊申、今上（靈元）女一宮（靈子内親王）、今夜令移近衛殿給云々、

實久卿記　天保九年三月廿八日、恭宮（仁孝）皇女、御違例、昨日ヨリノ御事也、不輕御容體、

中家實錄　一　稱號　並　音訓口義

今上皇帝、孝讓光帝、　當帝之尊稱也、

大鏡　下　太政大臣道長　此道長のおとゞは、いまの入道殿下これにおはします、一條院、三條院の御舅、當代（後一條）、東宮（後朱雀天皇）の御祖父にておはします、

榮花物語　三十八　松の下枝　齋宮には、當代（後三條）の女三宮（俊子内親王）居させ給へりつる、九月にくだらせ給、あはれなる事どもおほかり、

增鏡　十三　秋のみ山　當代（後醍醐）もまたしきしまのみちもてなさせ給へば、いつしかと勅撰のことおほせらる、

願文集　七

敬白　八幡大菩薩

立願事

右しやうかいのうんめいは、神明のさたむる所也、ほんりよとして、これをちうするにたらす、老後のきせいは長嫡儲君のせんそ也、祖神のかこなんそむなしからんや、當代（後醍醐）在位十とせあまり、あくまて御えいこんをきはめらる、（中略）

嘉暦三年十一月廿一日　太上天皇(後伏見)胤(仁)敬白

本朝文粹　六　奏狀中　申官爵

從五位上行文章博士兼尾張權守大江朝臣匡衡誠惶誠恐謹言、

請特蒙鴻慈、因准先例、兼任辨官、左右衞門權佐、大學頭等、申佗官替狀、(中略)

方今當今(一條)莅民之後、聖宰輔政以來、近訪延喜天暦之故事、遠問周室漢家之遺風、去秋遇重陽之宴、誇文道之已興、今春見朝拜之儀、感聖代之復舊、(中略)

正暦四年正月十一日　從五位上行文章博士兼尾張權守大江朝臣匡衡上

江吏部集　中人倫部　昔祖父江中納言、延(醍醐)喜聖代、奉付兩皇子之名、(註略)天(村上)暦聖代、奉付兩皇子之名、(註略)叔父左大丞、奉付當今(一條)之名、江家代々之功大也、

本朝續文粹　四　表上　富家(藤原忠實)殿辭攝政第二表　敦宗朝臣

先朝(堀河)馭俗之時、猥忝惣己之機要、當今(鳥羽)握符之日、枉登攝籙之榮班、(中略)

天仁元年十月九日　攝政右大臣正二位藤原朝臣上表

玉葉　建久三年三月十三日乙酉、此日寅刻、太上(後白河)法皇崩御于六條西洞院宮、御年六十六、六鳥羽院第四皇子、御母待賢門院、二條高倉兩院父、六條、先帝(安德)、當今(後鳥羽)三帝祖、(中略)

四年十月十一日甲辰、(中略)此日、當今(後鳥羽)初度日吉行幸也、

願文集　五　後花園院御經供養恒例

敬白

請諷誦事

三寶衆僧御布施

右

先院聖靈昇霞年、既古、(中略)仍諷誦所修如件、敬白、

明應九年十二月日(中略)

後花園院卅一回御作善、

當今(後柏原)御沙汰也、

中家實錄　一　稱號　並音訓口義

當今、唐銀、當帝之宸稱也、

令義解　一　職員令　神祇官

大嘗、謂嘗新穀、以祭神祇也、朝諸神之相嘗祭、夕者供新穀於至尊也、

三代實錄（三十五陽成天皇）　元慶三年二月十七日丁丑、先是太上天皇（清和）勅、返御封一千戶、至是皇帝上表、不奉勅旨、猶奉充二千戶曰、（中略）臣聞、天之與人、孝子業在諧命、事之隨理、愚夫愼其有常、故一天下之至尊、臣不拒前勅於童稚、二千戶之甚少、臣能稽舊章於老成、而今枉降中使、重叙睿情、

江吏部集（中人倫部）　頃年以累代侍讀之苗胤、以尙書一部十三卷、（中略）侍聖主御讀、（中略）就中祖父江納言、以老子經、奉授延喜（醍醐）天曆（村上）二代明主、今以不佞之身、侍至尊之讀、江家之才德、可謂光古今、

小右記　長和四年四月七日丙辰、（中略）今日、中宮女子（彰子）親王三歲、著袴、（中略）此間至尊（三條）渡御、（中略）御遊漸闌、至尊入御、

願文集　一　千日御講御願文第七度

蓋聞煩惱海深、（中略）弟子昔是帝闕之至尊也、萬姓撫育之仁豈忘、今則釋門之法侶也、衆生濟度之思彌深、（中略）

仁平三年七月日　　弟子沙門　敬白

文選　十一　論　過秦論　　賈誼

及至始皇、奮六世王餘烈、振長策而御宇內、吞二周而亡諸侯、履至尊而制六合、

漢書　六　武帝紀　元封元年夏四月癸卯、上還登封泰山、降坐明堂、詔曰、朕目眇身承至尊、兢々焉、

拾芥抄　中本官位部　唐名大略　唐名部　帝王（中略）南面之主、

願文集　一　御逆修御願文（中略）

弟子者北闕南面之本主也、寔知有十善之本因、聖主（近衛）上皇（崇德）之慈親也、（中略）

仁平元年閏四月廿日　　弟子沙門敬白

古今著聞集　二　釋敎二　推古天皇の御宇、厩戶豐聰耳皇子、東闈の位にそなはり、南面の尊にかはりて、專萬機の政敎をたれて、佛法の興隆をいたし給へり、

新撰長祿寬正記　同五日雪中ニ於仙洞、三席御會有、御遊有、詩題曰、八聖猷、以明字爲韻、（寬正五年十二月）

敎化多年功未成、　遂辭南面換閑情、
皇家願復唐虞道、　百國威誇聖德明、
仙洞億兆子來皈、　帝京八紘四海仰、
披庭徽號准三后、　新得黃麻紫詔榮、

南面の主

南面の尊

南面

本朝文集　七十七　奉爲後土御門天皇修冥福御願文　菅原和長　含英私集抄

征夷大將軍從一位行左大臣源朝臣義政上

爰眇身(後柏原天皇)謬列丹朱之蹤、未正南面禮而已、偏廢昭明之業、敢守北闕器乎哉、(中略)

文龜三年九月廿八日

中朝事實　皇統禮儀章　謹按、即位者、人君之大禮也、(中略)大臣北面、以捧神器、天子南面、以詔萬國、

周易　說卦第九　離也者明也、萬物皆相見、南方之卦也、聖人南面而聽天下、嚮明而治、蓋取諸此也、

莊子　齊物論第二　昔者堯問於舜曰、我欲伐宗膾胥敖、南面而不釋然、其故何也、疏、南面君位也、

三代實錄　三　清和天皇　貞觀元年八月廿八日辛亥、依十禪師傳燈大法師位惠亮表請、始置延曆寺年分度者二人、(中略)表曰、惠亮言、皇覺導物、且實且權、大士垂迹、或王或神、故能聖王治國、必賴神明之冥助、神道剪累、只憑調御之慧刃、伏惟金輪(清和)陛下、乘六牙而降神迹、逮九歲而登九五、

願文集　一　金剛心院供養御願文

伏冀三寶境界、知見證明、慧業所覃、先資禁闥九五之位、無動乾坤之德、(中略)

仁平(久壽元)四年八月九日　弟子沙門(鳥羽法皇)　敬白

同咒願文

禪定仙院(鳥羽法皇)、遁九五尊、藐姑射山、送卅餘曆、(中略)

仁平(久壽元)四年八月九日　弟子沙彌(後白峰法皇)　敬白

願文集　二　龜山殿御逆修願文

夫以、(中略)謬居九五位、雖歷兩三廻、幸遇天然之師、遂愛虛謙之道、(中略)

文永五年十月二十三日

本朝文集　七十八　正親町天皇奉爲後奈良帝七回忌御諷誦文并御願文　藤原公條　常修院家藏古筆

爰眇身忽雖居九五之位、更難酬万一之恩、(中略)

永祿六年九月五日

周易　乾　九五、飛龍在天、利見大人、

一人

周易　文言傳　飛龍在天、乃位天德、〔朱註〕天德天位也、

周易兼義　七繫辭上第七　崇高莫大乎富貴、（中略）〔疏〕正義曰、（中略）崇高莫大乎富貴者、以王者居九五、富貴之位、力能齊一天下之動、而道濟萬物、是崇高之極、故云莫大乎富貴、

令義解　一職員令　太政官

太政大臣一人

右師範一人、儀形四海、

令集解　二職員令　朱云、（中略）一人者天子也、儀形者猶言法也、四海者天下、然則此人、師範人君、亦儀形庶人耳、

令義解　七公式令　御、謂斥至尊、謂一人也、

本朝文粹　十三祭文　育供物　北野天神、供御幣并種種物文、　中原長國

獻上、御幣上紙百帖、供物二、長櫃、中折櫃、色紙繪馬三疋、走馬十列、

右天滿自在天神、或鹽梅於天下、輔導一人、或日月於天上、照臨萬民、（中略）

（長和元）寛弘九年六月廿五日　正四位下行式部大輔兼文章博士丹波守大江朝臣匡衡

願文集　四　（後鳥羽上皇）顯德院御逆修御願文

結願日（中略）

彼寛平、天永、保延、平治之跡、溫故知新、造佛寫經、散花燒香之營、慇懃周備、倩見四代之規摸、皆爲一人之父祖、（中略）

建保三年五月廿四日

祇園千部經開白法則

祇薗千部經法則、（中略）

次表白、

愼敬白一代教主釋迦如來、（中略）若爾者、帝城基堅、而上一人契寶算於椿葉八千春、（中略）

永正第六曆己巳初冬十二日　播州大山寺衆徒等

時慶卿記　文祿二年十二月二十五日、天下疫病流行、殘者一人モ無、上一人ヨリ下萬民皆病、不思儀ノ事共也、

官職難儀　關白とは、（中略）

攝政關白をば大職と申也、必一座の宣下とて第一に著給ふべきよし、宣下あるの故に一の人と申也、同字ながらも一人と申時は、天子の御事也、よの常の人の事をば一人と

皇居其の他の事物を假りて稱し奉る稱號ミカド

申事、誰もしりたる事ながら、その事々に讀かへる事、ならひのうちにてある也、

中家實錄　一　稱號　竝音訓口義

一人、伊智慈牟、奉稱主上、亦稱伊智乃比登、則關白之別稱也、

尙書註疏　八　太甲下第七　嗚呼弗慮胡獲、弗爲胡成、一人元良、萬邦以貞、（中略）（疏）（傳）（中略）

謂天子爲一人者、其義有二、一則天子自稱一人、是爲謙辭、言已是人中之一耳、一則臣下謂天子爲一人、是爲尊稱、言天下惟一人而已、

論語　十　堯曰二十　周有大賚、善人是富、雖有周親、不如仁人、百姓有過、在予一人、

六萬葉集　二十　可之故伎也、安米乃美加度乎、可氣都禮婆、禰能未之奈加由、安左欲比爾之弖、作者未詳、

日本書紀　五　崇神天皇　十年九月丙戌朔壬子、（三十七日）（中略）埴安彥望之、問彥國葺曰、何由矣汝興師來耶、對曰、汝逆天無道、欲傾王室（ミカド）、故擧義兵欲討汝逆、是天皇之命也、

日本書紀　五　崇神天皇　六十年秋七月丙申朔己酉、（十四日）詔群臣曰、武日照命（一云、武夷鳥、又云、天夷鳥、）從天將來神寶、藏于出雲大神宮、是欲見焉、則遣矢田部造遠祖武諸隅（一書云、一名大母隅也、）而使獻、當是時、出雲臣之遠祖出雲振根主于神寶、是往筑紫國而不遇矣、其弟飯入根則被皇命、以神寶付弟甘美韓日狹與子鵜濡渟而貢上、既而出雲振根從筑紫還來之、聞神寶獻于朝廷（ミカド）、責其弟飯入根曰、數日當待、何恐之乎、輙許神寶、

日本書紀　九　神功皇后　五十年夏五月、千熊長彥、久氐等至自百濟、於是皇太后歡之問久氐曰、海西諸韓既賜汝國、今何事以頻復來也、久氐等奏曰、天朝（ミカド）鴻澤遠及弊邑、吾王歡喜踊躍、不任于心、故因還使、以致至誠、雖逮萬世、何年非朝、

日本書紀　二十七　天智天皇　元年三月（中略）是月、唐人新羅人伐高麗、々々乞救國家（ミカド）、

伊勢集　下　亭子（宇多）の帝（ミカド）をりゐ給はんとしける秋、

白露のおきかはるらん百數をうつろふ秋は物そかなしき（中略）

みかと物へおはしましけるまゝ、かつらなる家におはしまして花御覽して、かへらせ給けるに、花にむすひつけ給ける、

梅花かた枝のこさす散にけりかこひてたにやをしまさりけん

古今和歌集　一　春歌上　仁和（光孝）のみかと、みこにおはしましける時、人に若菜たまひける御歌、

君かため春の野に出てゝ若菜つむわか衣てに雪は降りつゝ

榮花物語　一　月の宴　この殿（藤原實頼）、おほかた歌をこのみ給ければ、いま（村上）のみかど、このかた

273636

ウチ　内

にふかくおはしまして、おり〳〵には、このおとゞもろともにぞ、よみかはさせ給ける、

徒然草　みかどの御位は、いともかしこし、竹の園生の末葉まで、人間のたねならぬぞやんごとなき、

類聚名物考　百十五　稱號部一　皇帝　御門　みかど　天皇を申奉るとて、御門といふは、階下、陛下の意にて、さしつけて申さぬは、敬の至りなり、されども、この詞、古へはなし、寧樂のころまでは、たゞ大内の禁門をのみ、みかどゝはいひしが、それよりして、すべて朝庭の事をいへるを、今の平安の都となりては、轉りてまたく天子の御身を申奉ることゝはなれり、

齋宮女御集　後に(村上)うちより、まとをにあれやときこえさせ給へる御かへりに、

なれゆくは浮世なれはやすまの海士の鹽やき衣まとをなるらん

榮花物語　三十八　松の下枝　この内(後三條)の御心いとすくよかに、世中のみだれたらん事をなをさせ給はんとおぼしめし、せいなどもきびしく、すゑの世のみかどにはあまりてめでたくおはしますと申けり、

後二條師通記　(永長元)嘉保三年七月十一日戊戌、七月節、内(堀河)御風坐之由、人々所令申也、馳參別事不御、頃之退出、

内の上

中右記　(承徳元)永長二年正月廿九日、今日内(堀河)御物忌也、卅日、(中略)今明内御物忌也、

讃岐典侍日記　かくいふ程に、十月(嘉承二年)になりぬ、辨三位殿より御ふみといへば、取入れて見れば、(中略)院(白河法皇)よりこそ、此のうち(鳥羽)に、さやうなる人のたいせちなり、だうし參るべきよし仰ごとあれば、さるこゝちせさせ給へとある、

玉葉　建久四年十二月五日戊戌、(中略)宗頼申條々事、七日爲内(後鳥羽)御物忌云々、可覆推之由仰之、

宗良親王千首　跋　天授二年の夏の末つかた、(中略)内(長慶×後龜山)春宮二御かた、千首御歌あそばさるべしとて、(下略)

紫式部日記　うち(一條)のうへの、源氏の物語、人によませ給ひつゝ聞しめしけるに、この人は、日本紀をこそよみ給へけれ、まことにざえ有べしとのたまはせけるを、(下略)

增鏡　七　北野の雪　御あそびののち、人々歌たてまつる、花契遐年といふ題なりしに、や、内(龜山)の上の御せい、

たづねきてあかぬ心にまかせなば千とせや花のかげにすごさん

内の御前

榮花物語　三十六　ねあわせ　（天喜元）そのとしの七月に、内（後冷泉）の御前、御わらはやみのやうにせさせ給て、いといたくわづらはせ給、

御前

時信記　天承元年十二月廿九日（壬辰）癸卯、（中略）丑刻有追儺事、（中略）其後讀宣命、此間垂東廂御簾、近衛司帶劍、壺胡籙、老懸、各取葦弓矢、六位同之、御前（泉殿）密々渡御南殿、有御見物事、宣命了之間還御、此間殿上人列立東廂、

今の内

榮花物語　三十六　ねあはせ　（後冷泉）いまの内には、院（後朱雀法皇）の御事のいみじうおはしましつるをおぼしめせば、御よろこびも、なにともおぼしめされぬに、

今鏡　二　やへのしほぢ　すべらぎの中　（近衛）今の内には職事、殿上人などおほせくだされ、あるべきことどもありて、（泉殿上皇）（永治元年十二月）新院は、九日ぞ三條にしのとう院へわたらせ給、

大内

貞信公記　承平二年二月廿九日、有乘牛車聽從上東門出入宣旨、奉爲大内（朱雀）令諷誦廿一寺、依彼此夢想不吉也、

道家祖看記　（永祿十一年九月二十八日）其時信長、粟田口ニ陣ヲヒカヘ、御勅使ニ對面有、自禁中御折ヲ被下、信長イタヽキ、（中略）信長手ツカラ、大内様ヨリ被下イタヽキ、一世之面目トテ悅ヒタ

オホヤケ

マウ、

伊勢物語　昔ふか（仁明）草のみかとの、せり川のみゆきし給けるに、なまおきなの、いまはさることにけなく思ひけれと、もとつきにけることなれは、おほかたのたかゝひにて、さふらひ給ひけるを、すりかりきぬの袂に、鶴のかたをつくりてかきつけゝる、

翁さひ人なとかめそ狩衣けふはかりとそたつもなくなる

おほやけの御きそくもあしかりけり、

榮花物語　十五　うたがひ　（藤原道長）とのゝ御まへ、（中略）左大臣にて攝政つかうまつる、つぎは（藤原頼通）内大臣にて左大將かけたり、（中略）みなこれつぎ〳〵のおほやけの御うしろみをつかふまつるべし、

吾妻鏡　四　（文治元）元暦二年正月六日庚寅、（中略）參河守範頼、（去年九月二日出京赴西海、）去年十一月十四日飛脚、今日參着、（中略）就此申狀、聊雖散御不審、猶被下遣雜色定遠、信方、宗光等、（中略）宗光帶委細御書、是於鎭西可有沙汰條々也、其狀云、

十一月十四日御文、正月六日到來、今日自是脚力を立とし候つる程に、此脚力到來、仰遣たるむね委承候畢、（中略）又八島御座大（安德）やけ、并に二位殿女房たちなと、少もあや

まちあしさまなる事なくて、向へ取申させ給へし、（中略）返々、此大やけの御事、おほつかなき事也、いかにもして、事なきやうにさたせさせ給へし、（中略）

正月六日

蒲殿

八雲御抄　三下帝王　異名　大やけ、官字をかきてよめり、

伯家部類　下　内侍所さい幷刀自傳受之事

ねん號月日、よき日のよきときをもつて申たまはく、御心中の御しゆくくはん成就にかへりて、もゝしかいたいへい、せつしやう、くわんはく、大臣、公卿、百官にいたるまても給へと申、

てんかたいへい、こくとあんおん（朱書ヒウ）、おほやけ（ヘイ）、わたくし、そく才にまもらせ給へと申、

元和八十二六、右の祝詞、さいへ二位殿御傳の下書なり、　雅陳王

寛永九五廿五日、此祝（詞脱カ）二ッおさいへさつけ畢ぬ、　雅陳王

大やけの三字、近年數度の火災、となへ不宜候間、今度改て朱の如くなり、

文徳實錄　四　仁壽二年正月乙酉（十八日）、亦幸豐樂院、覩諸衛府賭射、公家以白布賜勝者、其多籌者、得布亦多、先王舊式也、

日本紀略　一條院　長保四年十月廿二日癸未、公家（一條）奉爲前東三條院（藤原詮子）、被修法華八講、廿四日乙酉、御八講第二（三）日也、有公家幷中宮（藤原彰子）御捧物、

願文集　二　治曆元年九月二十五日壬午、公家（于時御賀陽院也）奉爲先帝（後朱雀）、於宸居東對、設四日八座法會、供養御筆金字法華經幷白檀釋迦三尊、

中右記　嘉承二年七月十二日丙申、於南殿有六十口大般若御讀經、（中略）

（裏書）件御告文、大略一見之後、書樣所注付也、

維嘉承二年歳次丁亥七月十三日丙申、恐み恐き後三條院山陵ニ、太上（白河）法王申給久、近日公家（堀河）不例ニ御、若御祟ならば、早可令平癒給、

顯廣王記　安元（治承元）三年七月五日壬寅、公家（高倉）御筆金泥法華經、奉爲母后建春門院有供養、御八講事、於閑院内裏被修云々、

玉葉　文治三年二月八日庚辰、自今日公家（後鳥羽）天變御祈、被修北斗法、

後鳥羽院宸記　建保二年四月一日乙未、天陰、諸事如例、辰一點着直衣出外、人々多以候、小時入内、對面公家（順德）如常、未刻出馬場、先是又出外、今日依爲旬、有蹴鞠如例、對公家時

着改冠、是例也、

實隆公記　文明八年三月十二日丙辰、（中略）今日於御前有御貝、左方公方（後土御門）、若宮御方、上藪、大典侍、東之方、右方伏見殿、權典侍、勾當、源大、予等也、右方負、各進御兆子、

御湯殿上日記　天文三年二月十五日、御ほうもつとも、いつものことく、くはう（後奈良）、わたくしまいる、あんせん寺とのへも、いつものことくまいらせらるゝ、

元龜三年二月廿六日、くはうさま（正親町）、御かせひかれて、たけ田ちふきやう御みやくにまいりて、御くすりしん上申、

廿七日、くはうさま、けふは御心よくて、めてたしく、

日本書紀　七景行天皇　四十年是歲、（中略）日本武尊、於是始有痛身、（中略）逮于能褒野而痛甚之、（中略）因遣吉備武彦、奏之於天皇曰、臣受命天朝、遠征東夷、則被神恩、賴皇威、而叛者伏罪、荒神自調、是以卷甲戢戈、愷悌還之、冀曷日曷時、復命天朝、

法隆寺伽藍緣起并流記資財帳　大日本古文書二所載

法隆寺

伽藍緣起并流記資財事（中略）

合部足經壹拾貳部（中略）

花嚴經壹部八十卷

右、奉爲天朝、天平七年歲次乙亥、法藏知識敬造者、（中略）

合論疏玄章傳記惣壹拾參部拾壹卷（中略）

智度論壹部一百卷

右、奉爲天朝、天平二年歲次庚午、法藏知識敬造者、（中略）

天平十九年二月十一日　　都維那僧靈尊

類聚三代格　一序事　格式序

大納言正三位兼行左近衛大將陸奥出羽按察使臣藤原朝臣冬嗣等奉勅撰

蓋聞、（中略）天朝以聖承聖、資明繼明、敷景化於寰中、暢仁風於海外、然而顧先緒之未遂、切堂搆於宸襟、（中略）上起大寶元年、下迄弘仁十年、都爲式冊卷、格十卷、

新撰姓氏錄　序　天朝至明、紹脩前業、至聖承聖、垂眷後謀、

石清水八幡宮記錄　十一八幡御託宣記　寶龜八年五月十八日詫（託）宣云、明日辰時、沙門土成、可受三歸五戒、（中略）任御誓願旨、天皇奉守給倍、種々誓言更無疑、令時尅不廻、奉

令消除給倍、(中略)逆人仲麻呂靈乃、天朝乃御壽乎奪世之時仁、依誓願還望天、彼難毛掃退給倍利、自今以後毛、如此御惱不奉令在之天、玉體無動奉守護給倍止申給久(止脫カ)申須、(中略)

裏書(中略)

承久(貞應元)四年二月廿一日、以荒本和之、

經國集 二十 對策 策下 問、設官分職、須得其人、而行殊輕重、能有長短、委任成責、非當覆饋、授受之略、可得聞乎、 刀宣令

對、(中略)伏惟皇朝、化平日域、德及天涯、執禹麾而招能、坐堯衢而訪賢、逃周避漢之臣、鴈行於丹墀、

續日本後紀 十五 仁明天皇 承和十二年三月(二十三日)己巳、武藏國言、國分寺七層塔一基、以去承和二年、爲神火所燒、于今未搆立也、前男衾郡大領外從八位上壬生吉志福正申云、奉爲聖朝、欲造彼塔、望請言上、殊蒙處分者、依請許之、

三代實錄 十一 淸和天皇 貞觀七年十二月十三日庚申、權僧正法印大和尙位豐演重上表曰、沙門豐演言、(中略)伏惟聖朝陛下、以堯舜之聖德、得旦奭之賢佐、宣風則俊士如林、贊化則高僧成市、

經國集 二十 對策 策下 調和五行(中略) 文章生大初位下道守朝臣宮繼上

對、(中略)伏惟聖朝、儀天演粹、道備於禮經、揚德韜英、義光於易象、猶能欲明四時之理、窮五行之要、

本朝文粹 二 意見封事 意見十二箇條 善相公

一、請減五節妓員事、(中略)

伏案故實、弘仁承和二代、尤好內寵、故遍令諸家擇進此妓、即以爲選納之便也、(中略)方今聖朝(醍醐)、修其帷薄、立其防閑、此等妓女、舞了歸家、無預燕寢、(中略)

延喜十四年四月廿八日 從四位上行式部大輔臣三善朝臣淸行上封事

立入宗繼記 村井長門守入道春長軒を、(天正九年)二月晦日夜、初夜以後、立入所迄御出にて、庭田大納言殿、勸修寺中納言殿、甘露寺殿、中山殿、廣橋殿五人御內談、子細有之、立佐入道馳走仕、則叡慮(正親町)樣へ被仰上候、爲其御使、上蔦樣、信長之御屋鋪本能寺へ御成候、(中略)又三月五日に御馬乘有之、(中略)信長之御出立者、はたにこうはい、叡慮より白ふく御拜

領、

兼見卿記　天正十三年七月十三日壬午、（中略）

四番、紅葉狩、此時自殿下（豐臣秀吉）舞臺へ帷數百計歟、臺二ッ裁之、自御殿極臈久脩兩人昇之、兩度ニ遣之、三番、三輪也、樋口石見守山崎地下人也、柴之シラメ自叡慮（正親町）被遣之、

豐臣太閤御事書　覺

一、大ヶ都へ叡慮（後陽成）うつし可申候、可有其御用意候、明後年可爲行幸候、然者都廻の國々十ヶ國可進上之候、其内にて諸公家衆何も知行可被仰付候、下ノ衆可爲十增倍候、其上之衆は可依仁體事、（中略）

一、晨旦國ニ叡慮被爲成候路次、例式行幸之可爲儀式候、御泊々今度御出陣道路御座所可然候、人足傳馬は國限に可申付事、

豐臣秀吉朱印狀　德富猪一郎氏所藏

高麗都、去二日令落去候、然者急度被成御渡海、此度大明國迄も不殘可被仰付候、其方事、頓而可被召寄候間、令用意可相待候、一途之上ニて、明後年ハ叡慮（後陽成）ニ大明國相渡可申候、（中略）

五月十八日（文祿元年）　㊞

民部卿法印

後深草院御記　弘安（正應元）十一年二月廿七日、自禁裏（伏見）、以顯世給玉冠、可加修理乎否、可計由被仰之、

花園天皇宸記　元亨（正中元）四年六月廿五日己卯、卯一點、太上（後宇多）法皇已崩御云々、（中略）近年禁裏（後醍醐）龍樓（邦良親王）不和、法皇御旨在東宮、依之舊臣等懷怖、如踏薄氷云々、

教言卿記　應永十二年十月十二日甲辰、

一、禁裏（後小松）樣御不豫、驚入云々、但御疱瘡聞御、先御安堵歟、

椿葉記　おなじ（應永三十二年）六月、きん（稱光）り逆鱗の事ありて、御くらゐおりさせ給はんなど、さまざまわづらはしくきこゆ、

長興宿禰記　文明十二年三月一日辛巳、近日、禁裏（後土御門）御不豫、

拾芥記　永正十七年四月廿八日、禁裏（後柏原）御伯母嘉樂門院卅三回也、

惟房公記　永祿元年後六月七日、禁裏（正親町）江鶴一、兼右進上之、

京都帝國大學所藏文書　狩野亨吉氏蒐集文書

謹而致言上候、(中略)

一、きんりん(後陽成)様、聚樂へ兩度之御行幸にも、我等御役をつとめ申候、其爲御祝と御太刀折紙代鳥目貳拾貫被下候者、このかうべ四人として取申候事、

一、きんりん様ゟ諸役人ニ御知行被下候も、右之四人ならてハ取不申候事、(中略)

慶長十五年閏二月十五日　　小畑彦七(花押)　沙汰人宗定(花押)

官務様參

殿中日記　寛文十一年十月廿九日、禁裏(靈元)御水痘被遊候、

伏見宮日記　寶暦十二年七月十四日、爲中元御祝儀、御使織田兵庫少允を以、左之通被獻之也、

禁裏(桃園)様江

刺鯖　一折十五、大鷹二枚重、かな書竪目錄添、

女院様江

同　一折拾、右同斷、

定靜朝臣記　文化十一年四月二日己亥、今日任大臣日也、(中略)早朝先有御獻物、禁裏(光格)、東宮、中宮、關白殿、一條殿等也、

京都帝國大學所藏文書　北野松梅院文書二

天滿宮御眞筆、天下隨一之神影、兼而之御由緒を以、去ル文政二年、禁裏(仁孝)御所様、仙洞(光格)御所様、大宮御所様、女御様御覽被爲遊、御備物御附臺頂戴仕、誠ニ以冥伽(加)至極、難有仕合奉存候、(中略)

天保七申年七月　　北野宮神事奉行　松梅院禪恒印

關白(鷹司政通)様

御諸大夫御衆中

中右記　康和四年閏五月十二日、禁中(堀河)御物忌也、終日祗候、入夜退出、

道家祖看記　晦日(永祿五年十一月カ)天氣能、參詣被歸候、夜ニ入御對面、(中略)態禁中(正親町)様ヘモコトハニテ申渡シ候、

无上法院殿御日記　寛文六年八月廿八日丙子、

きん中(靈元)へ、將(徳川家綱)くんより初さけしん上ありて、けふ内侍所へくうせらるゝにより、きん中

御せんにつき、すなはち(後水尾)ほうわうにも御幸なる、我身も參内す、

御產部類記　二　利三十五　伏見宮御記錄　冷泉院　九條殿記　天曆四年七月廿五日庚寅、(中略)今日(冷泉天皇)儲君御衰日、明日(村上)内裏御衰日、

御產部類記　四　利三十五　伏見宮御記錄　後一條院　不知記　寛弘五年七月十七日乙亥、自(一條)内裏有御書、藏人兵部丞藤原惟規爲御使參入、

民經記　安貞二年十月二日壬寅、(中略)内裏(後堀河)晝御座出御儀、藏人告御出之由、次起座東行、

教言卿記　應永十三年正月廿九日庚申、(中略)佛前ハ宗量朝臣頭中將、役之、内裏(後小松)前ハ豐房朝臣頭辨、置之、凡於禁裏、不依位次、

椿葉記　さてだいり(後小松)は御治天卅年、政務おぼしめすまゝにておりさせ給ふ、(中略)同十九年(應永)八月廿九日、一の宮に御くらゐゆづり申さる、

看聞御記　永享五年五月六日、御乳人歸參、内裏(後花園)樣、自廿八日、聊有御惱事、御喉腫、室町殿(足利義教)醫師三位、被召進、良藥被聞食、自二日三日、次第御本復云々、

日本書紀　二十九　天武天皇　十一年五月戊申(十六日)、遣高麗大使佐伯連廣足、小使小墾田臣麻呂等、奏奉使旨於御所、

平家物語　十一　大坂越の事

御所(安德)の御船には、女院、北のまん所、二位殿、いげの女房たちめされけり、

辨内侍日記　上　二月一日(建長元年)、(中略)御所(後深草)も、いまだ御夜にもならせおはしまさず、御手習などありて、面白く思はむ詩かきて參らせよと仰ごとあれば、(中略)公忠の中將候が、誠にさはぎたる氣色にて、せうしの候、皇后宮の御方に火のといふ、淺ましともおろかなり、(中略)御所も二位殿抱き參らせて、(中略)一番に權大納言殿の車參りたるに、御所、皇后宮、中納言のすけ殿、宮内卿のすけ殿のらせ給、

看聞御記　永享六年九月六日、御百首又五卷被出、面々令寫、御所(内裏)樣(後花園)御腹次第ニ御減氣云々、珍重也、

御湯殿上日記　天文六年三月廿三日、げふより御千く、御三所にてあそはす、御所(後奈良)さま、ふしみ殿、あせち、しゆひつ、たかくら三位、なかまさ、すゑときなり、

御湯殿上日記　永祿十二年二月十四日、あすの御ほうもつ、御所(正親町)からと女中からと、ふしみへまいる、

御前

御湯殿上日記　文祿四年正月十六日、けふの御しんきやう、御かんきん、いつものことく女中みな〳〵御よみあり、御所(後陽成)には御こゝろわろくて、女中はかりあそはす、御ひさしにて、その御いわゐとて、女中はかりくこんまいる、御きたうのくわんしゆともまいる、なかはしないし所へ御まいり、

後櫻町院御日記　安永三年五月七日、

一、御所(後櫻町)に御禮申入候、

八日、

一、御所へ願置候誓狀のはこかし被下候、

御湯殿上日記　長享(延德元)三年四月廿五日、(中略)りやうあんの御き、けふあかします、(中略)又ひの御さへなりて、きつ(書)所御らんせらるゝ、御せん(後土御門)には、たゝすゝしの御大くちに、御ひきなほしにてなる、

日本書紀　七　景行天皇　五十一年春正月壬午朔戊子(七日)、招群卿而宴數日矣、時皇子稚足彥尊、武內宿禰、不參赴于宴庭、天皇召之問其故、因以奏之曰、其宴樂之日、羣卿百寮、必情在戲遊、不存國家、若有狂生而伺墻閣之隙乎、故侍門下備非常、

陛下

國家

令義解　二　僧尼令　凡僧尼、上觀玄象、假說災祥、語及國家、妖惑百姓、謂天文爲玄象也、非眞曰假也、天反時爲災也、吉凶先見爲祥也、過誤爲妖言也、語及國家者、不敢指斥尊號、故託曰國家也、言假說之語、關涉人主也、(下略)

律疏　八虐

一曰、謀反、謂謀危國家、謂臣下將圖逆節、而有無君之心、不敢指斥尊號、故託云國家、

陰陽頭安倍泰親朝臣記

一、今月七日丙子、昏戌時、月犯熒惑星、相去二尺五寸所、

謹撿天文要錄云、(中略)前變異等勘錄如右、但如占文者、可有病喪兵亂事歟、又國家(六條)、上皇(後白河)、皇太子(高倉天皇)、并左右將軍、不可不愼、仍謹以申聞、謹奏、

仁安元年十二月十三日　　從五位上行天文博士安倍朝臣

古事記　上序　臣安萬侶言、(中略)伏惟皇帝(元明)陛下、得一光宅、通三亭育、

日本書紀　十三　允恭天皇　十年春正月、幸茅渟、於是皇后奏言、妾如毫毛非嫉弟姬、然恐陛下、屢幸於茅渟、是百姓之苦歟、仰願宜除車駕之數也、

日本書紀　十五　顯宗天皇　二年秋八月己未朔、天皇謂皇太子億計(仁賢天皇)曰、(中略)皇太子億計歔欷不能答、乃諫曰、(中略)陛下饗國、德行廣聞於天下、

令義解（六儀制令）　陛下、上表所稱、

令集解（二十八儀制令）　古記云、上表、謂進天皇之書、謂之上表也、穴云、問、陛下以上四號、於太上天皇何稱、答、太上天皇不見行詔書、豈有何煩乎、於祭祀華夷上表三事、皆稱太上天皇也、但於上表、此一色令習兩說、下條云、上表、太上天皇上表、不云可異之狀、只於三后皇太子上啓、別稱殿下、或云、陛下之字居上故、依父（文カ）云太上天皇耳、或云、尋義合云陛下、不合云太上天皇也、師云、同可稱陛下也、乘輿車駕二事、於太上天皇以上通所申御號、問、依公式令、有天恩慈旨等事、未知、爲誰時所云哉、答、不序制爲其事、假詔書、華夷、上表等併用有耳、或云、可請正說、師云、除此條所云之外、有可稱者、依彼耳、在穴、乘輿、車駕、三后亦同律義也、朱云、於太上天皇上表稱陛下、但皇帝以上名不可稱者、未明、私案、依下條未明、或云、天子以下諸名、太上天皇同稱用者、或云、陛下以上名不可稱者、未明、私案、依下條云、於天皇太上天皇上表、同稱臣妾名者、則知、於太上天皇亦可稱陛下也、依公式令、太皇大妃、太皇大夫人、皇大妃、皇大夫人、亦同者、而則同爲平出故、乘輿以下名同可稱者、未明、額不同也、案私（私案カ）亦不同何、跡云、從乘輿以下、太上天皇、三后名皆通令用耳、又朱云、額不同也、律爲科罪稱同耳、正不同耳、稱乘輿車駕者、而不能一決、未知何、

東大寺獻物帳　正倉院御物

奉爲太上天皇捨國家珍寶等入東大寺願文　皇太后御製

妾聞、（中略）伏惟、（聖武）先帝陛下、德合乾坤、明竝日月、（中略）又願、（孝謙）今帝陛下、壽同法界、福類虛空、切石盡而不盡、海水竭而無竭、身心永泰、動息常安、（中略）

天平勝寶八歲六月廿一日

日本後紀（五桓武天皇）　延曆十六年二月己巳（十三日）、先是、重勅從四位下行民部大輔兼左兵衞督皇太子學士菅野朝臣眞道（中略）等、撰續日本紀、至是而成、上表曰、（中略）伏惟、天皇陛下、德光四乳、道契八眉、握明鏡以惣萬機、懷神珠以臨九域、

日本紀略　嵯峨天皇　弘仁十四年夏四月庚子（十六日）、帝御前殿、引今（淳和）上曰、（中略）今上避座跪言、臣以闇劣、疏派天潢、昔屬世花險、自謂不免於禍、會逢聖明、更同再生、幸莫大焉、又何所望、而陛下殊獎、忝玆儲兩、然身有犬馬之病、不堪承祧之狀、屢語右大臣（藤原冬嗣）、戰々兢々、得到于今、而今復以大寶、俯授愚蒙、心魂迷惑、不敢承敕、帝不許、

本朝文粹（二意見封事）　意見十二箇條　善相公

臣某言、（中略）方今陛下（醍醐）、鍾千年之期運、照萬古之興衰、降惻隱於衆庶、施惠愛於四方、（中略）

延喜十四年四月廿八日　從四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上封事

御讓位幷御卽位記　貞永元年十月四日庚辰、是日皇帝(後堀河)於閑院、(當時皇居宜同大內)便讓位於皇太子(四條天皇)、諱秀仁、(今上第一皇子、(中略)自太子降誕之日、陛下雖有意于讓位、自然及今□

願文集　五　一周忌　淨土曼陀羅供在之

夫君日高上、燕德光於一天、仁風淳加、施政化於四海、朝皆擧良弼、野自無遺賢者乎、伏惟聖宸毫、探玉偈玄文之奧願、恭以彌陀一經之叙旨、蚤助佛地千衲之法儀、(中略)

文龜元年九月廿八日　別當正二位行權大納言藤原朝臣實胤奉

大日本史　進大日本史表

臣治紀、誠惶誠恐、頓首頓首、欽惟皇帝(光格)陛下、紹天祖之正統、神明其德、照臨八方、

皇室典範義解　第四章　敬稱

第十七條　天皇太皇太后皇太后皇后ノ敬稱ハ陛下トス

恭テ按スルニ、陛下ハ臣下ヨリ天子ニ敷奏スルトキノ敬稱ナリ、本條ニ陛下ノ敬稱ヲ以テ、通シテ至尊ニ對スルノ稱謂トシ、而シテ敷奏陛見ノ辭ニ限ラサルハ、舊典ヲ敷衍シテ之ヲ內外ニ廣ムルナリ、

大寶ノ令ニ、三后ニ上啓スルハ殿下ト稱フ、本條ニ太皇太后、皇太后、皇后、皆陛下ト稱フルハ、嫡后國母ハ至尊ニ齊匹シ、至尊ト俱ニ臣民ノ至隆ナル敬禮ヲ受クヘケレハナリ、但シ、君位ハ一アリテ二ナシ、皇后ハ固ヨリ佗ノ皇族ト均ク人臣ノ列ニ居ル、而シテ大寶ノ制ト其ノ稱ヲ殊ニシテ、仍其ノ實ヲ同クスルコトヲ失ハサルナリ、

獨斷　上　陛下者、陛階也、所由升堂也、天子必有近臣、執兵陳於陛側、以戒不虞、謂之陛下者、群臣與天子言、不敢指斥天子、故呼在陛下者而告之、因卑達尊之意也、上書亦如之、及群臣士庶相與言、曰殿下閣下執事之屬、皆此類也、

淳和天皇御卽位記　弘仁十四年四月廿七日辛亥、今皇帝大極殿卽位記、(儀同元正、)

皇帝服冕服就高座、十八女孺奉翳復本所、宸儀初見、

儀式　五　天皇卽位儀　當日(中略)皇帝服冕服、卽高座、(中略)宸儀初見、執仗者俱稱警、

式部錄以下省掌已上、共稱面伏、群官磬折諸仗坐、

後二條師通記　寬治六年十月五日甲寅、(中略)弓場始如恒例、(中略)酉刻、宸儀(堀河)御出、左中將國信朝臣持御劍、畫御座御劍也、候御前、自餘如常、

禪中記　安元元年八月五日、今日御賀定也、(中略)頃之宸儀(高倉)出御畫御座、

二十日、未刻、內裏近邊燒亡事、(中略)宸儀出御南殿、

民經記　寛喜三年正月七日甲午、(中略)今日白馬節會、(中略)此間宸儀(後堀河)出御、兼御裝束師事所奏也、

後光嚴院三十三回聖忌記　應永十三年丙戌正月廿九日、後光嚴院三十三廻之聖忌也、仍自廿九日七ヶ日、於禁裏有御懺法、(中略)廿九日、(中略)亥刻、被始行、宸儀(後小松)御簾中、衆僧入道場、(中略)次宸儀被上御簾半、(洞院大納言卷上之、)吹調子、(中略)次經段、宸儀御行道、(御簾役洞院大納言、)

實隆公記　永正二年十二月十九日庚午、今夜內侍所御神樂、頭中將申沙汰也、(中略)臨時了、更又被始恒例、韓神時分、宸儀(後柏原)還御、

八槐記　享保十八年正月一日癸未、子刻參內、(依四方拜申沙汰也、)諸司設御座於中殿東庭、(立机供香花灯、立廻屏風如例、)此間御劍將已下濟々參集、辨備殿庭裝束之間、奏具之由了、(中略)次秀定、光綱、開庭上御屏風、宸儀(中御門)入御、予獻御笏、即令取給、被置御扇、

有識小說　叡勅　叡、宸、御、龍、鳳、鸞、皆以テ天子ノ御事ニ用來ル文字ナリ、說文云、叡深明也、尙書注云、聖也、說文云、宸屋宅也、增勻云、帝居北辰之宮、故从宀从辰、春秋國語注云、後人指帝居曰宸云云、天子ノ御事ヲ、凡下ノ身トシテ直ニ斥テ申侍ルベキハ、其恐ヲ思ガ故ニ、御居所ヲ呼出ル義、古今人臣ノ通法ナリ、

日本書紀　七景行天皇　四年春二月甲寅朔甲子(十一日)、天皇幸美濃、左右奏言之、玆國有佳人、曰弟媛、容姿端正、八坂入彥皇子之女也、天皇欲得爲妃、幸弟媛之家、弟媛聞乘輿車駕、則隱竹林、於是天皇、權令弟媛至、而居于泳宮、

日本書紀　十應神天皇　二十二年秋九月辛巳朔丙戌(六日)、天皇狩于淡路嶋、(中略)亦麋鹿鳧鴈多在其嶋、故乘輿屢遊之、

日本書紀　二十九天武天皇　六年夏四月壬辰朔壬寅(十一日)、栈田史名倉坐指斥乘輿、以流于伊豆嶋、

續日本後紀　十三　承和十年秋七月庚戌(二十四日)、致仕左大臣正二位藤原朝臣緒嗣薨、(中略)緒嗣者、參議正三位式部卿大宰帥宇合之孫、而贈太政大臣正一位百川之長子也、桓武天皇延曆七年春、喚緒嗣於殿上、令加冠焉、其幞頭巾子、皆是乘輿之所徹也、卽授正六位上、補內舍人賜劍、

令義解　六儀制令　乘輿、服御所稱、謂凡物御王者、皆稱乘輿御物、不敢媟黷以言、故託乘輿以名之、假如、乘輿御馬、乘輿御食、乘輿御書等之類

車駕

也、

令集解　二十八儀制令　釋云、凡御物者、皆稱乘輿御物耳、假如、稱乘輿御馬、乘輿御食、乘輿御書之類也、古記云、乘輿服御所稱、謂御物者、皆乘輿御物稱耳、假令、乘輿御馬、乘輿御食、乘輿御書耳也、

律疏　八虐

六曰、大不敬、謂毀大社、及盜大祀神御之物、乘輿服御物、神御物者、謂大幣者、大社神實亦同、乘輿服御物者、謂主上服御之物、人主以天下爲家、乘輿巡幸、不敢指斥尊號、故託乘輿以言之、本條注云、服通衾茵之屬、眞副等、皆須監當之官、部分擬進、乃爲御物、

獨斷　上　乘輿、出於律、律曰、敢盜乘輿服御物、謂天子所服食者也、天子至尊、不敢渫瀆言之、故託之於乘輿、乘猶載也、輿猶車也、天子以天下爲家、不以京師宮室爲常處、則當乘車輿以行天下、故群臣託乘輿以言之、或謂之車駕、

日本書紀　二十五孝德天皇　白雉元年春正月辛丑朔、車駕幸味經宮、觀賀正禮、味經、此云阿膩賦、是日、車駕還宮、

續日本紀　一文武天皇　二年二月丙申(五日)、車駕幸宇智郡、

三代實錄　四十八光孝天皇　仁和元年九月十四日乙未、(中略)先是、式部省修解偁、大學頭從五位上兼守右少辨藤原朝臣佐世言曰、令云、(中略)又承和十二年宣旨云、車駕行幸之日、官人引文章生等陪從、

令義解　六儀制令　車駕(キヨ)、行幸所稱、

令集解　二十八儀制令　車駕、謂乘輿行幸之時名、謂之車駕也、

內裏式　中五月五日觀馬射式　皇帝出宮就御座、(中略)雅樂寮奏音樂、日暮上下群臣、各於先拜處、再拜退出、車駕還宮、

柱史抄　上朝觀行幸　正月　天皇臨幸仙院之後、着上官座、車駕還御之時、未輦御輿之間、上卿以官人召內記、々々入自中門、磬折而立、

第二款　帝號の用法

天皇を稱し奉る各種の稱號の用法に付いては、上古に在りては、公の制規の定まれるものなく、又一定の慣習も存せざりしが如し。律令の制定せらるゝに及びて、其の制始めて定められたり。大寶

令儀制令に「天子、祭祀所レ稱、天皇、詔書所レ稱、皇帝、華夷所レ稱、陛下、上表所レ稱、太上天皇、讓位帝所レ稱、乘輿、服御所レ稱、車駕、行幸所レ稱」とあるは是なり。令義解に據れば、此等の稱號は文書に用ふる所にして、皇御孫命、須明樂美御德の如く古俗に稱する所は、別に文字に依らずとあり(一)。

儀制令に定むる所の外、大寶令公式令には、別に詔書式の定あり、各種の詔書に用ふる稱號を定む。令義解には、明神御宇日本天皇詔旨云々は、大事を以て外國使に宣する辭、明神御宇天皇詔旨云々は、次事を以て外國使に宣する辭、明神御大八洲天皇詔旨云々は、朝廷の大事卽ち立后、立太子、元日朝賀等に用ふる辭、天皇詔旨云々は、朝廷の中事卽ち左右大臣以上を任ずるの類に用ふる辭なりと見えたり(二)。

然れども此等の令の定は當初より必ずしも嚴格には遵由せられざりしが如く、其の實際に用ひられたる例に就いて見れば、神、佛、山陵への宣命には、皇御孫命、天皇、神祇への祝詞には、皇御孫命、儒敎及び陰陽道に關する願文、祭文には、嗣天子、天子等、佛事に關する敬白文、願文には、皇帝、國主皇帝と記したまふを例とし、卽位、改元、讓位、其の他の大事を宣誥する詔書には、明神御宇日本倭根子天皇、現御神止大八嶋國所知天皇、現神止大八洲國所知倭根子天皇、天皇等、外國使に宣する詔書には、明神御宇日本天皇、天皇、任大臣等の宣命には、天皇と記したまへり(三)。外國に對しては、推古天皇の隋に遣はしたまひし國書に、日出處天子、東天皇と記したまひ、文武天皇以後新羅、渤海等の諸國に遣はしたまひし勅書には、天皇と記したまふを例とせり(四)。外國よりの國書には、唐の國書に日本國王主明樂美

御德と國風の稱號を記せる外は、概ね天皇、日本國天皇、倭皇、日本國王と記し、百濟、新羅、高麗等の服屬國は、特に可畏天皇、日本照臨天皇、日本照臨八方聖明皇帝と記したるもあり(五)。

明治維新の後、同元年正月諸外國に對し、天皇と稱することを告げたまひ、爾來同二年十月米國に對する親書に日本天皇と記したまひしを初め、諸外國に對する親書に於いて常に天皇の稱を用ひたまひしが、同五年四月米國に對する親書には「天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ承ル大日本國天皇」と稱したまひ、次いで同六年一月伊國に對する親書に於いては「天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル日本國皇帝」と稱したまひ、是より以後、外國の元首に對する親書、國際條約の批准書、宣戰の詔書、勳記等には、一般に此の稱號を用ひたまふ例となれり。昭和十一年に至り、外國又は外國人に對する關係に於いても、皇帝の稱を用ひず、大日本帝國天皇と稱したまふことに定められたり(六)。

大寶令儀制令に定むる帝號の用法

一　令義解　六儀制令　天子、祭祀所稱、謂告于神祇、稱爲天子、凡自天子至車駕、皆是書記所用、至風俗所稱、別不依文字、假如皇御孫命及須明樂美御德之類也、天皇、詔書所稱、皇帝、華夷所稱、謂華華夏也、夷夷狄也、言王者詔誥於華夷、稱皇帝、即華夷之所稱亦依此也、陛下、上表所稱、太上天皇、讓位帝所稱、乘輿、服御所稱、謂凡物御王者、皆稱乘輿御物、不敢媟黷以言、故託乘輿以名之、假如乘輿御馬、乘輿御食、乘輿御書等之類也、車駕、行幸所稱、

令集解　二十八儀制令　天子、祭祀所稱、釋云、天子是告神之稱、俗語云、皇御孫命、古記云、天子祭祀所稱、謂祭將書記字、謂之天子也、辭稱須賣彌麻乃美己等耳也、跡云、天子以下七號俗語同辭、但爲注書之時、說此名耳、朱云、天子以下諸名注書也、天皇、詔書所稱、釋云、天皇、公式令云、天皇詔旨云云咸聞是、皇帝、華夷所稱、釋云、華華夏也、夷夷狄也、謂宜告華夷、通因此號耳、表者語耳、華、謂華夏也、夷、謂夷狄也、跡云、皇帝、謂華夷若有可注御名之事者、用此名、陛下、上表所稱、古記云、上表、謂進天皇之書、謂之上表也、穴云、問、陛下以上四號、於太上天皇何稱、答、太上天皇不見行詔書、豈有何煩乎、於祭祀華夷上表三事、皆稱太上天皇也、但於上表、此一色令習兩說、下條云、上表、太上天皇上表、不云可異之狀、只於三后皇太子上啓、別稱殿下、或云、陛下之字居上故、依(文カ)父云太上天皇上表、或云、疇義合云陛下、不合云太上天皇也、師云、陛下也、可乘輿車駕二事、於太上天皇以上通所申御號、問、依公式令、有天恩慈旨等事、未知、爲誰時所云哉、答、不序制爲其事、假詔書、華夷、上表等併用有耳、或云可謂正說、師云、除此條所云之外、有可稱者、依數耳、在穴、乘輿、車駕、三后亦同律義也、朱云、於太上天皇上表稱陛下、但皇帝以上名不可稱者、未明、或云、天子以下諸名、太上天皇同稱用者、或云、陛下以上名不可稱者、未明、私案、依下條云、於天皇太

大寶令公式令に定むる帝號の用法

上天皇上表、同稱臣姿名者、則知、於太上天皇亦可稱陛下也、依公式令、太皇大妃、太皇大夫人、皇大妃、皇大夫人、亦同者、而則同爲平出故、乘輿以下名同可稱者、未明額不同也、案私亦（私案カ）不同何、跡云、從乘輿以下、太上天皇、三后名皆通令用耳、又朱云、額不同也、律爲科罪稱同耳、正不同耳、稱乘輿車駕者、而不能一決、未知何、

二　令義解　七　公式令

詔書式（註略）

明神御宇日本天皇詔旨（アキミカミト　アメノシタシラス　ヤマト　スメラカ　スベラガホコトラマト　ラマト）謂以大事宣於蕃國使之辭也、云々咸聞、

明神御宇天皇詔旨（ト　ス　カ　ラマト）謂以次事宣於蕃國使之辭也、云々咸聞、

明神御大八洲天皇詔旨（トオホヤシマクニシラス　オホヤシマノクニ　カ　ラマト）謂用於朝庭大事之辭、即立皇后皇太子及元日受朝賀之類也、云々咸聞、

天皇詔旨（カ　ラマト）謂用於中事之辭、即任左右大臣以上之類也、云々咸聞、

令集解　三十一　公式令

明神御宇日本天皇詔旨、釋云、宣蕃國大事辭、古記云、御宇日本天皇詔旨、對鄰國及蕃國而詔之辭、問、鄰國與蕃國何其別、答、鄰國者大唐、蕃國者新羅也、朱云、宣蕃國辭、謂我化內來時宣辭耳、非宣遣蕃國、市十今案指宣使之辭也、但宣遣蕃國之辭、可求之、額不同也、但事大少可有式之也、私若臨國、時可定、大少哉何、穴云、令釋云、元條、次條宣蕃國辭、謂遣蕃國其蕃使朝聘時亦同、師同、問、蕃使來時、以二條宣一使、歟、爲當、以使大少隨用歟、答、於一使或用元條、或用次條耳、私思、於同、蕃別哉、答、合有也、假、遣蕃國者用此式、使來時亦同、通鄰國者合別勘、不依此式、但使來明合放使語大事者用上條、語少事者用下條耳、定大少者不見令條、臨時可量耳、問、蕃國與鄰國有

帝號用法の實例　神佛山陵への宣命に於ける用法

用此式也、无別條故也、未審、可撿、云云咸聞、跡云、咸訓如悉、

令集解　三十一　公式令

明神御宇天皇詔旨、釋云、宣蕃國次事辭、穴云、次三條朝庭用辭、事大少臨時可量定不見法條之故、云云咸聞、

令集解　三十一　公式令

明神御大八洲天皇詔旨、釋云、宣大事辭、元日之類、朱云、國內大事者、大事者、未收、古記云、御宇日本天皇詔旨、一端元日宣命等者、額同、或云、不然、此臨時、爲答、日本書紀卷第一云、因問陰神曰、汝身有何成耶、對曰、吾身有一雌元之處、思欲以吾身元處合汝身之元處、於是陰陽始遘合爲夫婦、及至產時、先以淡路州爲胞、意所不快故、名之曰淡路州、等生大日本（日本此云耶麻、讃下皆放此、）豐秋津洲、次生伊豫二名洲、次生（洲）（洲ノ題カ）筑紫洲、次雙生億岐洲與佐度洲、世人或有雙生者、象此也、次生越洲、次生大州、次生吉備子州、由是始起大八州國之號焉、即對馬嶋壹岐嶋及處處小嶋、皆是潮沫凝而成也、穴云、問、文（洲）（洲）稱大八州者、若有號計之方哉、若、古有號計之事、不可新言、然則、安彼可知耳、云云咸聞、

令集解　三十一　公式令

天皇詔旨、釋云、宣次事辭、任右大臣以上之類、云云咸聞、

三　續日本紀　十七　聖武天皇

天平勝寶元年夏四月甲午朔、天皇幸東大寺、御盧舍那佛像前殿、北面對像、皇后太子並侍焉、群臣百寮及士庶分頭、行列殿後、勅遣左大臣橘宿禰諸兄、白佛、三寶乃奴止仕奉流天皇羅我命、盧舍那像（佛カ）能大前仁奏賜部止奏久、此大倭國者、天地開闢以來爾、黃金波人國用理獻言波有登毛、斯地者無物止念部流仁、聞看食國中能東方陸奧國守從五位上百濟王敬福伊、部內少田郡仁黃金出在奏氐獻、此遠聞食驚伎悅備貴備念

久波、盧舍那佛乃慈賜比福波閇賜物爾有止念閇受賜里恐理戴持、百官乃人等率天、禮拜仕奉事遠、挂畏三寶乃大前爾、恐美恐美毛奏賜波久止奏、

續日本紀　十七孝謙天皇　天平勝寶元年十二月丁亥(二十七日)、八幡大神禰宜尼大神朝臣社女其輿紫色、一同乘輿、拜東大寺、天皇、太上(聖武)天皇、皇太(光明子)后、同亦行幸、是日、百官及諸氏人等咸會於寺、請僧五千、禮佛讀經、作大唐渤海吳樂、五節田儛、久米儛、因奉大神一品、比咩神二品、左大臣橘宿禰諸兄、奉詔白神曰、天皇我御命爾坐、申賜止申久、去辰年、河內國大縣郡乃智識寺爾坐盧舍那佛遠禮奉天、則朕毛欲奉造止思登毛、得不爲之間爾、豐前國宇佐郡爾坐廣幡乃八幡大神爾申賜閇止勅久、神我天神地祇乎率伊左奈比天、必成奉无、事立不有、銅湯乎水止成、我身遠草木土爾交天、障事無久奈佐牟止勅賜奈我良成奴波、禮歡美貴毛美奈念食須、然猶止事不得爲天、恐家登毛禮御冠獻事乎恐美恐美毛申賜久止申、

日本後紀　十二桓武天皇　延曆二十四年二月庚戌(十日)、(中略)有勅、准御年數、屈宿德僧六十九人、令讀經於石上神社、詔曰、天皇御命爾坐、石上乃大神爾申給波久、大神乃宮爾收有志器仗乎、京都遠久成奴爾流依豆、近處爾令治牟止爲豆奈去年此爾運收有流、然爾比來之間、御體如常不御坐有流爾、大御夢爾覺志坐爾依豆、大神乃願坐之任爾、本社爾返收豆之、无

鷲久无咎久、平久安久可御坐止奈念志食、(中略)辭別豆申給久、神那我良母皇御孫乃御命乎、堅磐爾常磐爾、護奉幸閇奉給閇止、稱辭定奉久止申、

續日本後紀　五仁明天皇　承和三年五月丁未(九日)、奉授下總國香取郡從三位伊波比主命正二位、常陸國鹿島郡從二位勳一等建御賀豆智命正二位、河內國河內郡從三位勳三等天兒屋根命正三位、從四位下比賣神從四位上、其詔曰、皇御孫命爾坐、四所大神爾申給波久、大神等乎彌高爾彌廣爾仕奉止奈毛思保志食、是以件等冠爾上獻狀乎、中務少輔從五位下藤原朝臣豐繼、內舍人正六位下藤原朝臣千葛等爾令捧持氐、奉出事乎申給久止申、辭別氐申給久、神那我良母皇御孫之御命乎、堅磐爾常磐爾護奉幸閇奉給部、又遣唐使參議正四位下藤原朝臣常嗣乎、路間无風波之難久、慈賜比矜賜比天、平久可太良可爾歸之賜倍止、稱辭定奉久止申、

文德實錄　三仁壽元年冬十月乙卯(十七日)、遣使者向平野神宮、策命曰、天皇我詔旨止、平野大神等爾申給倍止申久、大神等乎彌高爾彌廣爾崇奉牟止那毛所念行須、故是以、正三位今木大神乎波從二位爾、正五位上久度、古開等二前乃神乎波從四位下爾、合殿坐須比咩神乎波正五位下乃御冠爾上奉利崇奉流狀乎、參議正四位下左大辨兼行左近衛中將陸奧出

羽按察使藤原朝臣良相乎差使豆、申奉出須、此狀乎聞食豆、神那我良母、天皇御孫命乎、堅磐爾常磐爾護幸奉賜比、天下平安爾守矜賜倍止申賜久止申、

三代實錄（十六清和天皇）　貞觀十一年十二月廿九日壬子、遣使者於石清水神社奉幣、告文曰、天皇我詔旨爾坐、掛畏岐石清水乃皇大神乃廣前爾、恐美恐美毛申給止申止申久、（中略）自此外爾、假令止之夷俘乃逆謀叛亂之事、中國乃刀兵賊難之事、又水旱風雨之事、疫癘飢饉之事爾至萬天爾、天國家乃大禍、百姓乃深憂止毛可在良牟乎波、皆悉未然之外爾拂却鎖滅賜天、天下無躁騷久、國內平安爾鎭護利救助賜比、皇御孫命乃御體乎、常磐堅磐爾、與天地日月共爾、夜護晝護爾護幸倍矜奉給倍止、恐美恐美毛申賜久止申、

三代實錄（三十一陽成天皇）　元慶（貞觀十九）元年四月八日己卯、欲以今月九日、始作大極殿、仍遣使柏原山陵（桓武天皇）、告以事由、告文曰、天皇我大命止、掛畏岐柏原御陵爾、恐美恐美毛申賜倍止申久、去年四月十日爾、所燒失乃八省院乃大極殿、并東西樓廊等、以今月九日吉日良辰天、可始作之、此院波寂是掛畏岐天皇朝廷、殊勞作賜倍留所奈利、故是以、更可始作岐狀乎爲令申爾、差使參議正四位下行左近衛中將源朝臣能有、從五位上守治部大輔橘朝臣休蔭天奉出須、掛畏岐御陵、相助矜賜天、無事久無障久令作竟賜倍、又天皇朝廷乎毛平安爾護賜矜賜倍止、恐美恐美毛申賜久止申、

本朝世紀　天慶四年八月九日丙申、（中略）以午二點、內裡臨時被奉遣幣帛於石清水賀茂上下、因之上卿不著侍從所也、其宣命在左、

天皇（朱雀）我詔旨度、掛畏岐石清水爾御坐せる八幡大菩薩乃廣前爾、恐美恐美も申給倍度申久、（中略）天皇朝庭（マヽ）乎寶位無動久、常盤堅盤爾夜守日守仁護幸へ賜と、恐み恐みも申賜波久申、東

天慶四年八月九日丙申

朝野群載（十二宣命）　內記　被告御即位由於九陵（山陵、山階、柏原、嵯峨、深草、後田村、後山階、村上、香隆寺、後宇治墓、）

天皇（鳥羽）恐美恐美毛申賜波久申久、忝以庸劣天、天之日嗣乎傳賜波禮留仁依天、以去年十二月一日天即位天、天之日嗣乎戴荷知、守仕奉留狀乎、官位姓名乎差使天、恐美恐美毛申賜波久止奏、（中略）

嘉承（天仁元）三年二月廿二日

後鳥羽天皇宣命　京都府田中文書　石清水八幡宮所藏八幡宮寺宣命告文部類六末

天皇（後鳥羽）我詔旨度、掛畏支八幡大菩薩乃別宮乃廣前仁、恐美恐美も申賜はくと申く、今日東大

寺乃供養乎可致奈利、無風雨之難く、無內外之障く、如叙情爾齋會乎令遂行給者牟事ハ、大菩薩乃厚御惠爾可在奈利、(中略)天皇朝廷乎寶位無動く、常盤堅盤爾、夜守日守爾護幸倍奉給倍度、恐美恐みも申賜はくと申、

建久六年三月十二日

上卿權中納言兼光　職事頭辨宗賴朝臣　作者大內記宗業

猪隈關白記

承元二年五月十二日庚戌、(中略)參內、參御前、今日依多武峯御影燒失事、被發遣勅使也、(中略)

使定文如此

多武峯墓使

前伯耆守藤原朝臣親家

承元二年五月十二日

宣命如此

(土御門)天皇我詔旨度、(藤原鎌足)大織冠內大臣多武峯乃墳墓爾詔度勅命乎聞坐度宣布、今年二月爾金峯山乃衆徒樹黨豆結群比豆、多武峯爾行向比豆、堂宇僧坊乎燔燒岐、佛具寶物乎虜掠須、其時爾聖靈院乃影像二體乎任先例豆、安他所須留處爾、彼院雖全度毛、餘焰遠及布間多、等身乃靈像免煙炎多禮度毛、根本乃尊貌還爲灰燼多利、凡厥乃堂舍乃火災者、雖及數度止毛、影像乃燒失者、未有其例須、此由乎聞食豆、驚歎岐大坐古度無限久無極志、因玆豆、當山爾勅使乎發遣須留古度、先規雖稀止毛、且者尋准據之例禰、且者專尊崇之儀志豆、殊廻冲襟志豆、所令謝申奈利、(中略)故是以、官位姓名乎差使豆、詔勅命乎聞坐度宣、

承元二年五月十二日

荒曆

應永廿一年十二月十三日壬午、此日爲被發遣御即位由伊勢幣、行幸神祇官、(中略)抑奉幣行幸儀、貞和五年以後中絕、(中略)今度被再興、邂逅嚴儀之條、尤以珍重、(中略)今日宣命、後日作者大內記元長寫送之間、續左、

(稱光)天皇我詔旨止、掛畏支伊勢度會乃五十鈴河上乃下津石根爾大宮柱廣敷立豆、高天原爾千木高知豆、稱(竟カ)定定奉留天照坐皇大神乃廣前爾、恐美恐美毛申賜者久申、(中略)此狀乎、平久安久聞食豆、天皇朝廷乎寶位無動久、食國乃天下毛無事久太平爾護賜比矜賜布止、恐美恐美毛申賜者久申、

應永廿一年十二月十三日

後光明天皇宣命

（京都府田中文書　石清水八幡宮所藏宣命太政官符）

天皇我詔旨度、掛畏岐石清水爾御坐勢留八幡大菩薩乃廣前爾、恐美恐美毛申給者久申久、（德川家光）柳營不例乃由乎聞食氏祈請志多万布、急除災厄岐、早令快氣氐、身體安穩爾、運命延長爾、垂擁護給倍止所念行氐、奈牟、故是以吉日良辰乎擇定氐、正三位行權中納言源朝臣廣通乎差使氐、禮代乃御幣乎令捧持氐奉出賜布、掛畏岐大菩薩、此狀乎平久安久聞食氐、天皇朝廷乎寶位無動久、常磐堅磐爾、夜守日守爾護幸給倍止、恐美恐美毛申給者久止申、

慶安四年三月廿三日

京都帝國大學所藏文書

（北野松梅院文書）

（明治）天皇命乃大命爾坐世、掛卷母恐支北野大神乃大前爾、從三位行留守權判官藤原朝臣忠敬乎使止爲旦、白給波久止白左久、今年乃八月乃今日乃祭爾、正三位卜部朝臣良義乎差使旦、宇豆乃御幣帛乎奉出志、東遊仕奉利旦、齋祭留事乎聞食世止白須、如此聞食旦波、天皇命乃大朝廷乎平氣久安氣久、足御代乃茂御代爾齋奉利、堅石爾常石爾幸幣奉利、仕奉留王等臣等乎母平氣久、天皇命乃大朝廷爾、伊加志夜具波衣乃如久仕奉利榮志米給幣止宣留天皇命乃大命乎聞食世止、恐美恐美母白須、

明治四年辛未八月四日

日本書紀傳

（二十八神代上）

皇御孫尊と、天皇とは、詳なると略なるとにて、其義異ならざりける物から、天皇と神祇との御間にては、皇御孫尊と申し奉り、天皇と人臣と相對へて常に申すは、其の須賣良美許登の方なる故、垂仁天皇廿三年紀なる大倭大神の御言に、皇御孫尊、專治葦原中國之八十魂神と見え、天武天皇御紀の事代主神生雷神の神託に、吾者、立皇御孫命之前後、以送奉于不破而還焉、と有るなど、御紀は力めて漢文に書かれたる物ながら、猶在りの任に、如此く美たき事有り、式の祝詞も、古きは皆然り、其一二今抄し出でむには、風神祭詞に、志貴島爾大八島國知志皇御孫命云々、大祓詞も、前後は、百官男女に宣る詞なるが故に、天皇朝廷と申すを、中は神に告る詞なるに依りて、皇御孫命、又皇御孫命乃朝廷と有り、出雲神賀詞、又中臣壽詞等は、天皇の御前にて申す詞なるが故に、前後の文には、形の如く天皇と有りて、中に神世の故事を述ぶる所には、皇御孫命と有り、但今京より以降の詞は、其格に違ひて、神に申すにも人に宣るにも、其差別無くして、何處も天皇とあるは、其古例に違へる事、予別に祝詞講義を著して已に注

せりき、

延喜式 八 祝詞　神祇八　祈年祭

集侍神主祝部等諸聞食登宣、(中略)御年皇神能前爾白馬、白猪、白鶏、種々色物乎備奉氐、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

皇御孫命

神祇への祝詞に於ける用法

大御巫能辭竟奉皇神等能前爾白久、神魂、高御魂、生魂、足魂、玉留魂、大宮乃賣、大御膳都神、辭代主登御名者白而辭竟奉者、皇御孫命御世乎手長御世登、堅磐爾常磐爾齋比奉、茂御世爾幸閇奉故、皇吾睦神漏伎命、神漏彌命登、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

延喜式 八 祝詞　神祇八　六月晦大祓　十二月准之

集侍親王、諸王、諸臣、百官人等諸聞食止宣、(中略)如此所聞食氐波、皇御孫之命乃朝廷乎始氐、天下四方國爾波、罪止云布罪波不在止、(下略)

儒教及び陰陽道に關する顧文祭文に於ける用法

令集解 二十八 儀制令　釋云、天子、是告神之稱、俗語云、皇御孫命、古記云、天子、祭祀所稱、謂祭將書記字、謂之天子也、辭稱須賣彌麻乃美己等耳也、

續日本紀 三十九 桓武天皇　延曆六年十一月甲寅(五日)、祀天神於交野、其祭文曰、維延曆六年歲次丁卯十一月庚戌朔甲寅、嗣天子臣、謹遣從二位行大納言兼民部卿造東大寺司長官藤原朝臣繼繩、敢昭告于昊天上帝、臣恭膺睠命、嗣守鴻基、幸賴穹蒼降祚、覆燾騰徵、四海晏然、萬姓康樂、方今大明南至、長晷初昇、敬采燔祀之義、祗修報德之典、謹以玉帛犧齊、粢盛庶品、備茲禋燎、祗薦潔誠、高(光仁)紹天皇、配神作主、尚饗、又曰、維延曆六年歲次丁卯十一月庚戌朔甲寅、孝子皇帝臣諱、謹遣從二位行大納言兼民部卿造東大寺司長官藤原朝臣繼繩、敢昭告于高紹天皇、臣以庸虛、忝承天序、上玄錫祉、率土宅心、方今履長伊始、肅事郊禋、用致燔祀于昊天上帝、高紹天皇、慶流長發、德冠思文、對越昭升、永言配命、謹以制幣犧齊、粢盛庶品、式陳明薦、侑神作主、尚饗、

孝子皇帝

延喜式 二十 大學寮　釋奠十一座(中略)

饋享、

享日未明三刻、諸享官各服祭服、諸陪祭之官皆公服、(中略)大祝持版進於神座之右、東面跪讀祝文曰、維某年(以下皆音讀)歲次月朔日、子天子謹遣大學頭位姓名、敢昭告于先聖文宣王、惟王固天攸縱、誕降生知、經緯禮樂、闡揚文教、餘烈遺風、千載是仰、俾茲末學、依仁遊藝、謹以制幣犧齋、粢盛庶品、祗奉舊章、式陳明薦、以先師顏子等配、尚饗、(中略)大祝持版進於先師首座之左、西向跪讀祝文曰、維某年歲次月朔日、子天子謹遣大學頭位姓名、昭告于先師顏子等十

子天子

賢、爰以仲春、仲秋、率遵故實、敬修釋奠于先聖文宣王、惟子等、或服膺聖教、德冠四科、或光闡儒風、貽範千載、謹以制幣犧齋、粢盛庶品、式陳明獻、從祝配神、尙饗、大祝興、頭再拜、初讀祝文、訖樂作、祝奠版於神座、興還樽所、頭拜、訖樂止、

朝野群載 二十一 雜文上 釋奠祝文

維某年歲次月朔日、子天子謹遣大學頭位姓名、敢昭告于先聖文宣王、惟王固天攸縱、誕降生知、經緯禮樂、闡揚文敎、餘烈遺風、千載是仰、俾玆末學、依仁遊藝、謹以制幣犧齋、粢盛庶品、祇奉舊章、式陳明薦、以先師顏子等配、尙饗、

小祝文

維某年歲次月朔日、子天子謹遣大學頭位姓名、敢昭告于先師顏子等十賢、爰以仲春、仲秋、率遵故實、敬修釋奠于先聖文宣王、惟子等或服膺聖敎、德冠四科、或光闡儒風、貽範千載、謹以制幣犧齋、粢盛庶品、式陳明獻、從祀配神、尙饗、

已上大學寮釋奠式文

諸祭文故實抄 第十四 玄宮北極祭

按、此祭外典也、祭文稱都狀也、仍年號下謹狀云々、古來之舊草皆此分也、（中略）

勅願、一條院、大膳大夫安倍晴明朝臣、以朱書青紙云々、

天子謹白、　北極玄宮無上無極大帝天皇、

伏惟、北辰居位、衆星共之、至尊至重、惟正惟明、群神所朝宗、萬靈所俯仰、照臨八方、囊括七曜、管百王之曆數、照萬國之興亡、祚明君而光明、罰暗主而昏昧、頒萬機於紫微之中、布七政於明堂之上、偉天官之正直、作人事之儀形、側聞、葛仙公、祭法、豫推帝王曆數、若當厄運、災年、須祈北極之天帝、以延南面之遐齡、爰今年當三合之年、已可恐災孽、何況天變夕觀、地妖頻聞、夢想紛々、怪異數々、占候之家、勘奏不吉、就中今月一日日蝕、亦十五日月蝕、一月之內日月共蝕、倭漢之間、未有此變、所天所奏、占文尤重、朝歎夕惕、寢膳失度、非施神明之威、何拂災禍之萌、仍擇吉日良辰、設如在禮奠、薰惟馨於明德、虫損、二星神敬以供、必垂冥感、觀夫、玄象降光、明鏡合影、懇誠潛通、同淸流寫五夜之月、靈貺饗應、如虛谷谷萬歲之聲、伏願、以神通之智、遙廻玄鑒、以自在之力、俯察丹誠、鎖九橫於未萌、授百年之上壽、削黑籍於北宮、錄生名於南簡、長生久禮、變災爲福、謹白、

日本國長保四年七月廿七　御畫日也、仍不書日云云、

或本、七月廿七日天子謹白云云、

舊草裏書云、此祭文有御諱云々、式部大輔敦光、當今御時、奏草無御書始之間、雖非侍讀勤仕、但家榮稱御畫云々、然而詔有御畫、施行天下之書也、於祭文白神道之事、可有御諱歟、仍有御諱、件狀可守云云、

天子已下御諱事、當流口傳、粗註于上畢、今此舊說、尤相契者乎、珍重、

諸祭文故實抄　第六　天地災變祭

勅願、土御門院、

維日本國、承元四年歲次庚午十月丙辰朔　日、吉日良辰、

天子諱、謹遣有司、齋潔沐浴、奉設禮奠、

謹請、皇天上帝明階下君、太初太素、

太極君　太一天一君　日月府君

明北斗君　南斗君　東斗君

西斗君　中央直人(眞カ)　南極北極

南辰北辰　南郊北郊　典龍頭（中略）

謹啓、降臨尊神等、七字、例文、伏惟新作、諱、驚異恠而修政、則祆不勝德、依災變而謝咎、亦禍轉爲福、（中略）

謹重啓、降臨諸神等、文定例、七字、清酌三流、漏刻相移、禮微座久、不敢稽留、伏乞諸神、（中略）諱、

諸祭文故實抄　第一　尊星王祭文

勅願、後堀川院、　家記(口傳抄)云、祭文者、神道至極書之(也カ)、必可有御諱云々、

維貞永元年歲次壬辰五月辛巳朔、十日庚寅、南瞻部州大日本國

天子茂仁(「平出也」〈朱書〉)敬白、理智不二清淨法身遍照如來、教令輪身四臂大聖不動明王、十方三世一切諸佛、八萬法藏十二部經、地前地上諸大菩薩、聲聞緣覺一切賢聖、別白、本尊界會尊星王大士、梵王帝釋、四大天王、大吉祥天、司命都尉、七曜九執、二十八宿、十二神王、六甲將軍、一千七百善神、焰魔法王、泰山府君等、諸冥官冥道、鎭護國家諸大明神、乃至盡虛空法界三寶護法天等而言、夫尊星王者、照臨八方、囊括七曜、北極正位、雖施威力於一四天下、南浮有緣、契留住於七百劫中、居其所兮不移、一人之象也、受其精兮有治、三皇之風也、誠是體元履正之者、可仰玄鑒、配天建德之者、可莅蒼元、朕以庸瓊、謬守神器、靈應是憑、翹誠於牛碧之上、皇化難覃、招耻於犧黃之後、況亦玉燭之氣不調、玄筮之變頻示、明年當三合、此秋有餘閏、晨兢夕惕、不知所裁、未吐宋景三言之一言、何以消榆象之異、未得殷宗二德之一德、何以却桑難之邪、

不若訴尊星、未兆拂天氛、仍瑜伽瑜祇之法、飭清淨之密壇、七日七夜之勤、款懇篤之心府、白顒潔誠之祭、恨猶非甘露之味、赤劉豐年之祈、悅又有靈星之感、今日之綷、不其然哉、然則聖算無疆、不異齊天之松、民貢有力、宜期如雲之稼、春坊萬春之花添色、秋闈千秋之月增光、天地和合、上下愷樂、祇敬至矣、必其尙饗、

諸祭文故實抄　第四　泰山府君祭

(勅願)同御祈、(先勅願之儀、後府君之事、)

謹上　泰山府君都狀

南浮州日本國天子　年(已下之義、例文略之、)

右諱謹啓、泰山府君、冥道諸神等言、伏惟、諱、雖慙菲德、久保睿圖、今遷新成之皇居、彌舊貫之聖化、盡善盡美之敎及民間、良哉康哉之歌、溢天下、朕所思也、靈其鑒焉、夫府君者、地藏之化身也、在泰山兮威驗其貴、天衆之最長也、鑒率土兮感應惟新、今日緣日也、特抽無貳之誠、明年厄年也、必除太一之分、聖運長久、皇德無偏、可依嶽靈之扶持、偏仰府君之加護、謹啓、

日本國應永九年十二月廿三日　(後小松)天子諱謹啓、

佛事に關する敬白文願文に於ける用法

皇帝

日本國主

續日本紀　十九孝謙天皇

天平勝寶八歲十二月己酉(三十日)、勅遣皇(道祖王)太子、及右大辨從四位下巨勢朝臣堺麻呂於東大寺、右大臣從二位藤原朝臣豐成、出雲國守從四位下山背王於大安寺、大納言從二位藤原朝臣仲麻呂、中衞少將正五位上佐伯宿禰毛人於外嶋坊、中納言從三位紀朝臣麻路、少納言從五位上石川朝臣名人於藥師寺、大宰帥從三位石川朝臣年足、彈正尹從四位上池田王於元興寺、讚岐守正四位下安宿王、左大辨正四位下大伴宿禰古麻呂於山階寺、講梵網經、講師六十二人、其詞曰、皇帝敬白、朕自遭閔凶、情深荼毒、宮車漸遠、號慕無追、萬痛纏心、千哀貫骨、恒思報德、日夜無停、聞道、有菩薩戒、本梵網經、功德巍々、能資逝者、仍寫六十二部、將說六十二國、始自四月十五日、令終于五月二日、是以差使、敬遣請屈、願衆大德、勿辭攝受、欲使以此妙福、无上威力、翼冥路之鸞輿、向華藏之寶刹、臨紙哀塞、書不多云、

三代實錄　三十三陽成天皇

元慶二年夏四月廿九日甲午、設一百講座、說仁王般若經、京師始自御在所、至于聖神寺卅二、畿內及外國六十八、其咒願文曰、南閻浮提、日本國主、位纂洪緒、業宇黎民、忘己之勞、求人之逸、歸心冥護、莫過仁王、

願文集　二

光孝天皇御願　仁和三年丁未八月二十六日崩、被果遂、

御記
寛平元年九月癸巳(四日)、先帝(光孝)舊御願未畢已仙化、今朕一向故修之、(中略)
癸丑(二十四日)、先帝御願八講、今日始修、佛器僧供法服等、惣朕之所營造也、(中略)
嘉祥寺御願八講御願文、橘廣相作、
寛平元年九月二十四日、菩薩弟子皇帝(宇多)某、稽首和南、十方諸佛、本師釋迦如來、(中略)弟子
謬以菲濫叨重託、

菅家文草

十二呪願文　臨時仁王會咒願文、寛平五年閏五月十八日、

國主皇帝(宇多)、歸命頂禮、仁王般若波羅密經、發願無邊所以者何、去歳有疫、往々言上、今年痛甚、
家々病死、

本朝世紀

長保四年十月廿二日癸未、此日奉爲故東三條院(藤原詮子)、公家被修八講初日也、(中略)
呪願文
國主(一條)皇帝、叉手曲躬、敬禮歸依、一切三寶、聞天竺境、一乘新興、興之爲誰、尊者阿難、尋日本國、
八講初開、開之何人、僧正勤操、(中略)
長保四年十月廿二日　作者菅輔正卿

東大寺續要錄

八供養編　建久記

六年(建久)三月十二日丁酉、(中略)今日東大寺供養也、(中略)辰刻、天皇(後鳥羽)御幸當寺、(中略)
夫以一身三身之相、卽皆出本覺眞如之中、(中略)朕德雖庸、虛志仰佛法、且訪本願之遺誡、
且答法皇(後白河)之曩志、再排一十二丈之露軒、忽移四百餘載之風儀、然卽佛法彌弘、王法中興、政
反淳朴、人多歡華、天枝帝榮(榮カ)、同父王之子孫、主壽國富、偏起祖之神仙、願令鳳蓋之勢、遠附龍
華之初、願令香花之勤、必及星宿之劫、乃至九法界、皆證一實相、稽首和南、敬白、
建久六年三月十二日　皇帝　敬白

諸祭文故實抄

第十三　安鎭祭付鎭宅

此祭、內典外典兩家也、外典者大略鎭宅也、內典者安鎭與鎭宅、共被修之、仍安鎭々宅
之差別、安鎭者、本尊四臂不動也、(中略)鎭宅者、本尊葉衣觀音也、(中略)
勅願、土御門造大裏、靑蓮院尊應准后被修之、(今之內裏也、)
維康正二年歳次丙子七月己巳朔、十日戊寅、南浮州大日本國
皇帝(後花園)諱　敬白、四臂大聖不動明王、護世八天諸護法者、七曜九執、二十八宿、十二宮神、十二月
將、五帝五龍、堅牢地神、本朝鎭守諸大明神、守宮神等、夫承(而言脫カ)寶位兮輯乾綱、握珍圖兮居離正、

即位改元讓位其の他の大事を宣語する詔書に於ける用法

明神御宇日本倭根子天皇

明神御大八洲日本根子天皇

久有四海、垂歷年之休、尊臨兆民、保奕世之祚、爰作爲帝室、嚴廊森嚴、恢拓王業、宸陛肅穆、今齊五恪、既刷盛儀、咸率百僚、將致遷幸、因玆、稽舊範而一七箇夜、擇良曜而二十一時、飭三密瑜伽之壇、修八方安鎭之法、綺饌珍菓、備微妙之供、絲竹管絃、奏和雅之曲、明信昭爾、冥鑒揭焉、伏請本尊聖者不動明王、天衆地神、部類眷屬、降臨證明、照視納受、措黼座於泰山之安、等宸居於磐石之固、萬方從化、興復之期在于玆、四夷傾心、治安之美基於是、臺榭不朽、臣庶極娛、敬白、

日本書紀

二十五孝德天皇　大化二年春正月甲子朔、賀正禮畢、即宣改新之詔、（中略）二月甲午朔戊申（十五日）、天皇幸宮東門、使蘇我右大臣詔曰、明神御宇日本倭根子天皇、詔於集侍卿等臣連、國造、伴造、及諸百姓、朕聞、明哲之御民者、懸鍾於門、而觀百姓之憂、作屋於衢、而聽路行之謗、雖芻蕘之說、親問爲師、由是朕前下詔曰、古之治天下、朝有進善之旌、誹謗之木、所以通治道而來諫者也、皆所以廣詢于下也、

日本書紀

二十九天武天皇　十二年春正月丙午（十八日）、詔曰、明神御大八洲日本根子天皇勅命者、諸國司、國造、郡司及百姓等諸可聽矣、朕初登鴻祚以來、天瑞非一二多至之、傳聞、其天瑞者、行政之理、協于天道則應之、是今當于朕世、每年重至、一則以懼、一則以喜、是以親王、諸王及

現御神止大八嶋國所知天皇

現神八洲御宇倭根子天皇

群卿、百寮并天下黎民、共相歡也、

續日本紀

一文武天皇　元年八月甲子朔、受禪卽位、庚辰（十七日）、詔曰、現御神止大八嶋國所知天皇大命良麻止詔大命乎、集侍皇子等、王等、百官人等、天下公民諸聞食止詔、高天原爾事始而、遠天皇祖御世御世、中今至麻爾、氏天皇御子之阿禮坐牟彌繼繼爾、大八嶋國將知次止、天都神乃御子隨母、天坐神之依之奉之隨、聞看來此天津日嗣高御座之業止、現御神止大八嶋國所知倭根子天皇命、授賜比負賜布貴支高支廣支厚支大命乎受賜利恐坐氐、此乃食國天下乎調賜比平賜比、天下乃公民乎惠賜比撫賜牟止奈母、隨神所思行佐止久詔天皇大命乎、諸聞食止詔、

續日本紀

四元明天皇　慶雲四年秋七月壬子（十七日）、天皇卽位於大極殿、詔曰、現神八洲御宇倭根子天皇詔旨勅命、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞宣、（中略）如是仕奉侍爾、去年十一月爾、威加母我王朕子天皇（文武）乃詔豆久、羅朕御身勞坐故、暇閒得而、御病欲治、此乃天豆日嗣之位者、大命爾坐世、大坐坐而治可賜止讓賜命乎受被賜坐而、答曰豆久、羅朕者不堪止辭白而、受不坐在間爾、遍多久日重而讓賜倍婆、勞美威美、今年六月十五日爾、詔命者受賜止白奈羅、賀此重位爾繼坐事乎奈母、天地心乎勞美重美畏坐佐止久詔命、衆聞宣、

現神御宇倭根子天皇

續日本紀 四 元明天皇

和銅元年春正月乙巳(十一日)、武藏國秩父郡獻和銅、詔曰、現神御宇倭根子天皇詔旨勅命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞宣、(中略)今皇朕御世爾當而坐者、天地之心乎勞彌重彌辱彌恐彌坐爾、聞看食國中乃東方武藏國爾、自然作成和銅出在止奏而獻焉、此物者、天坐神、地坐祇乃相于豆奈比奉、福波倍奉事爾依而、顯久出多留寶爾在羅之止奈母、神隨所念行須、是以天地之神乃顯奉瑞寶爾依而、御世年號改賜換賜波久詔命乎、衆聞宣、故改慶雲五年而、和銅元年爲而、御世年號止定賜、

天皇

續日本紀 十 聖武天皇

天平元年八月戊辰(十日)、詔立正三位藤原(光明子)夫人爲皇后、壬午(二十四日)、喚入五位及諸司長官于內裏、而知太政官事一品舍人親王宣勅曰、天皇大命良麻止、親王等、又汝王臣等語賜幣止勅久、皇朕高御座爾坐初由利、今年爾至麻氐六年爾成奴、此乃間爾、天都位爾嗣坐倍伎次止爲氐、皇太子侍豆、由是其婆婆止在須藤原夫人乎皇后止定賜、(中略)此乃六年乃內乎擇賜試賜而、今日今時、眼當衆乎喚賜而、細事乃狀語賜布止詔勅聞宣、

現神御宇天皇

續日本紀 二十一 淳仁天皇

天平寶字二年八月庚子朔、高野(孝謙)天皇禪位於皇太子(淳仁天皇)、詔曰、現神御宇天皇詔旨良麻止詔勅乎、親王、諸王、諸臣、百官人等衆聞食宣、高天原神積坐皇親神魯弃神魯美命、吾孫知食國天下止、事依奉乃任爾、遠皇祖御世始氐、天皇御世御世聞看來天日嗣高御座乃業止、奈母、隨神所念行久止宣天皇勅、衆聞食宣、(中略)掛畏朕婆婆皇太后朝爾母、人子之理爾不得定省波、朕情母日夜不安、是以此位避氐、間乃人爾在氐之、如理婆婆爾波仕奉倍止自所念行氐、奈母日嗣止定賜弊流皇太子爾授賜久止宣天皇御命、衆聞食宣、

日本國天照大神比治洲國給布坐倭根子天皇給天皇

續日本紀 二十八 稱德天皇

神護景雲元年八月癸巳(十六日)、改元神護景雲、詔曰、日本國爾坐天大八洲國照給比治給布倭根子天皇我御命良麻止勅布御命乎、衆諸聞食止宣、今年乃六月十六日申時仁、東南之角爾當天、甚奇久異爾麗岐雲七色相交天立登天在、此乎朕自毛見行之、又侍諸人等毛共見天、怪備喜備都在間仁、(中略)又示顯賜弊流瑞乃末末仁、爾年號波改賜布、是以改天平神護三年、爲神護景雲元年止詔布天皇我御命遠、諸聞食止宣、

續日本紀 三十一 光仁天皇

寶龜元年冬十月己丑朔、卽天皇位於大極殿、改元寶龜、詔曰、天皇我詔旨勅命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食宣、掛母恐伎奈良(稱德)宮御宇倭根子天皇、去八月爾、此食國天下之業乎、拙劣朕爾被賜而仕奉止負賜授賜伎止勅天皇詔旨乎、頂爾受被賜恐美受被賜懼、進母不知爾、退不知爾、恐美坐久止勅命乎、衆聞食宣、(中略)辭別詔、今年八月五日、肥後國葦北郡人日奉部廣主賣獻白龜、又同月十七日、同國益城郡人山稻主獻白龜、此則並合大瑞、故天地貺大瑞者、受被賜歡受被賜可貴物爾在、是以改神

明神御八洲養德根子天皇

護景雲四年、爲寶龜元年、（中略）止宣天皇勅、衆聞、食宣、

續日本紀

三十一光仁天皇　寶龜二年正月辛巳（二十三日）立他戸親王爲皇太子、詔曰、明神御八洲養德根子天皇詔旨勅命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食宣、隨法爾皇后御子他戸親王立爲皇太子、故此狀悟氐、百官人等仕奉詔天皇御命、諸聞食止宣、

續日本紀

三十六光仁天皇　天應元年夏四月己丑朔、（中略）遣散位從五位下多治比眞人三上於伊勢、（中略）以固關焉、以天皇不豫也、辛卯（三日）詔云、天皇我御命良麻等詔大命乎、親王等、王等、臣等、百官乃人等、天下公民衆聞食止宣、（中略）加以元來風病爾苦都身體不安、復年毛彌高成爾耳、餘命不幾、今所念久、此位波避天、暫間毛御體欲養止奈毛所念須、故是以皇太子止定賜留（稙武天皇）山部親王爾、天下政波授賜布、（中略）是日、皇太子受禪即位、

續日本紀

三十六光仁天皇　天應元年夏四月壬辰（四日）、立皇弟早良親王爲皇太子、詔曰、天皇（稙武）勅命乎親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食止宣、隨法爾可有伎政止志耳、早良親王立而皇太子止定賜布、故此之狀悟天、百官人等仕奉禮止詔天皇勅旨乎、衆聞食宣、

內裏式

上元正受群臣朝賀式　辰一刻、皇帝乘輿、入大極殿後房、（中略）皇帝服冕服就高座、（中略）御前命婦二人、褰御帳復本座、女嬬還本座、宸儀初見、（中略）奏賀者便留宣命之位、奏瑞者復本列、訖乃宣制曰、明神止御大八洲日本根子天皇我詔旨良萬宣不大命乎、衆聞食與止宣、王公百官稱唯再拜、訖更宣云、供奉親王等、王等、臣等、百官人等、天下百姓衆諸、新年乃新月乃新日爾、與天地共爾萬福乎平久長久受賜禮止勅不天皇我詔旨乎、衆諸聞食與止宣、王公百官共稱唯再拜、舞踏再拜、武官俱立振旆稱萬歲、

明神止御大八洲日本根子天皇

現神止大八洲國所知倭根子天皇

現神と大八洲國所知須天皇

東宮御元服部類

六東宮元服祝文　御元服

（宇多）現神止大八州國所知倭根子天皇我詔良止万勅御命乎、親王、諸臣、百官乃人等云々、皇太子止定多留（醍醐天皇）敦仁親王乎、今日新加元服天、此位乎授賜布、諸衆此狀乎悟天、清直心乎持天仕奉天、天下乎平介久令有與云々、

寛平九年七月二日、在御即位宣命同、

卽位部類記、

（天慶九年四月）廿八日戊子、今日巳刻、（村上）天皇卽位於大極殿、子細、在別注奥、宣命文、現神と大八洲國所知須天皇我詔旨良万と宣勅乎、親王、諸臣、百官人、天下公民衆聞食と宣、掛畏岐平安宮仁御宇志（朱雀）倭根子天皇我宣、此天日嗣高座之業（御脫カ）を、掛畏岐近江の大津乃宮仁御宇之（天智）天皇乃初賜比定賜へる法隨爾仕奉度、仰賜比授賜布大命を受賜利恐美、受賜利懼利、進母不知仁、退母不知仁、恐美坐久度宣天皇勅乎、衆聞食度宣、（座カ）照皇と坐天天下治賜君波、賢

人能良佐を得天之、天下乎波平久安久治賜仁在と奈聞食須、故是以本今(大命カ)坐宣久、朕雖拙劣、親王等を始天、王等、臣等、國(食脱カ)能天下之政波平久安久仕奉奈武所念行ス、是以、以正直之心天、天皇朝廷を衆助仕奉と宣天皇勅乎衆聞食度宣、辭別宣久、仕奉人等中爾、其仕奉狀隨爾、冠位上賜布、又大神宮乎始、諸寺智行有聞留、并天下僧尼能年八十已上仁施物多麻布、又左右京、五畿內乃鰥寡孤獨、不能自者(存脱カ)及天下給侍流人等仁給御物布、又天慶元年以往租稅未納、悉免給波久と勅不天皇御命を衆聞食と宣、

新儀式

五臨時下冊命皇后事　前一日、大臣奉勅、令外記召式部省、(中略)又召內記、令作宣命、(中略)次宣命大夫進就版、宣制曰、現神止大八洲所知須和根子天皇詔旨良萬止勅命乎、親王、王、公、百寮人等、天下公民衆聞食止宣、群官稱唯再拜、訖更宣云、食國天下政波、獨知倍支物爾波不有、必之毛後倍政有倍之、自古行來留事爾氐、皇后定氐志、闇中乃政波成物止奈毛常所聞志行須、故是以某乎皇后止定賜布、故此狀悟而供奉止勅布天皇命乎、衆聞食止宣、群官俱稱唯再拜、此間宣命大夫就本位、訖親王以下退出、即以還御、

新儀式

五臨時下冊命皇太子事　冊命皇太子、或依公卿論奏、或有勅答、(中略)大臣喚宣命大夫、(中略)承詔者進就版、宣制曰、現神止大八洲所知須倭根子天皇我詔旨良萬止勅命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆共稱唯再拜、

後二條師通記　別記

「(編裏書)　寬治

寬治七年二月廿二日立后記」

寬治七年二月廿二日己巳、(中略)頭辨來就膝突、被仰立后事、以篤子內親王可爲中宮、(中略)左府曰、仰可持參宣命草之由、承此旨退去、奉草案了、

(堀河)現神と大八洲國所知須倭根子天皇大命良と勅布、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食と宣、(中略)

故是以三品篤子內親王を皇后と定賜布、(中略)

寬治七年二月廿二日

兵範記

保元三年八月十一日戊戌、今日可讓位於皇太子(二條天皇)、(中略)

(後白河)現神度大八洲國所知須倭根子天皇我詔旨良度万勅御命乎、親王、諸王、諸臣、百官能人等、天

下公民衆諸聞食度宣、
朕以薄德天、天日嗣乎承傳賜倍留事、漸歷年序利、愚庸之身波、此位乎不可堪度歎畏賜比
天、令避皇位賜比奈牟度所念行天奈牟、皇太子度定賜倍留守仁親王仁、此天日嗣乎授賜布、衆諸
此狀乎悟天、清直心乎持天、皇太子乎輔導支仕奉天、天下乎平介久令有與、(下略)

岡屋關白記 (御即位記)

貞永元年十二月五日庚辰、是日天皇(四條)即位於太政官廳、(中略)
宣命如此、
現神止大八洲所知須天皇我詔旨良止宣勅布、親王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食止宣、
掛畏支平安宮(後堀河)爾御宇之倭根子天皇我宣、此天日嗣高座(御脫力)之業乎、掛畏近江乃大津乃宮仁
御宇之天皇乃、初賜比定賜倍留法隨仁、仕奉止仰賜比授賜布大命乎受賜利、恐美受賜利
懼利、進母不知仁、退母不知仁、恐美坐之止宣天皇勅乎、衆聞食止宣、然皇止坐旦天下治賜
君波、賢人乃良佐乎得天之、天下乎波平久安久治賜爾在止奈牟聞食須、故是以大命坐宣之、
朕雖拙劣、親王等遠始天、王等、臣等乃相穴奈比奉利、相扶奉牟事仁依旦、此乃仰賜比授賜
倍留食國乃天下之政波、平久安久仕奉倍奈牟之止所念行須、是以以正直之心旦、天皇朝廷遠、
衆助仕奉止宣天皇勅乎、衆聞食止宣、

辭別天宣久、仕奉人等中仁、其仕奉狀隨仁、冠位已(上)賜布、又太神宮遠始旦、諸社禰宜祝等仁
給一階、又僧綱遠始旦、諸寺智行有聞留并天下僧尼乃年八十已上爾施物多萬布、又左右京
五畿內乃鰥寡孤獨、不能自存者、及天下給侍留人等爾給御物布、又嘉祿元年以往租稅未
納、悉免給波止久勅布天皇御命衆聞食止宣、
貞永元年十二月五日

拾芥記

永正(天永元)十八年三月廿二日、御即位(後柏原天皇)也、(中略)
現神度大八洲國所知須天皇我詔旨良万止宣勅乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民聞
食度宣、掛畏岐平安宮爾御宇志倭根子天皇我宣、此天日嗣高座之業乎、掛畏岐近江乃大
津乃宮爾御宇志天皇乃初賜比定賜倍留法隨爾仕奉度仰賜比授賜布大命乎受賜利、恐
美受賜利懼利、進母不知爾、退母不知爾、恐美坐久度宣天皇我勅乎衆聞食度宣、
然皇度坐旦、天下治賜君者、賢人乃良佐乎得旦、天下乎者平久安久治賜物爾在度奈牟聞
食須、故是以大命坐宣久、朕雖拙劣、親王等乎始旦、王等、臣等乃相穴奈比奉利相扶奉牟事
爾依旦、此乃仰賜比授賜倍留食國乃天下之政者、平久安久仕奉倍志奈牟度所念行須、是以正
直之心旦、天皇朝廷乎衆助仕奉度宣天皇勅乎、衆聞食度宣、

永正十八年三月廿二日

延享 **讓位傳奏記** 榮親卿　柳原家記錄

延享四年五月二日、子上剋參內、行幸幷御讓國之儀等在別記、(中略)

(櫻町)現神度大八洲國所知須倭根子天皇我詔旨良止万宣布勅乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆食(聞脫カ)度宣布、朕以薄質氏、天日嗣乎承傳賜比氏、保歷年紀世利、菲德之身波、此位仁不可堪止歎畏賜比氏、避皇位賜比奈牟止所念行志、以謙光之操明禮志、以博愛之心讓仁留、隨法仁可有岐政止爲氏、皇太子止定賜倍留遐仁(桃園天皇)親王爾、此天日嗣高座之業乎授賜布、(中略)此狀乎悟氏、食國乃天下之政乎、平久安久令有止所念行須天皇朝廷乎助仕奉禮止宣布天皇我勅乎、衆聞食止宣布、

延享四年五月二日

贈內大臣經逸公記 柳原家記錄

安永(天明元)十年三月十五日戊子、今日可有冊命皇后日也、准三宮維子、近衛准后內前公女、廿三、(中略)宣命、後桃園院女御也、春秋廿三、(中略)宣命、

(光格)現神止大八洲國所知須天皇我詔良止万宣布勅乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食止宣、凡人子乃蒙福末久願欲而毛、親愛乃恩乎酬牟我爲止奈所聞須、爰爾准三后藤原氏者、朕我准母止之天心整、操修禮利、殊爾如所生爾相憑相賴所念行須、故是以皇太后爾上奉利崇賜布、此狀乎悟氏、隨法爾供奉止勅布天皇我御命乎衆聞食止宣、

安永十年三月十五日

慶應四年八月 **御卽位** 柳原家記錄　宣命文

(明治)現神止大八洲國所知須天皇我詔旨良止万宣布勅命乎、親王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食止宣布、掛畏伎平安宮爾御宇須倭根子天皇我宣布此天日嗣高座乃業乎、掛畏伎近江乃大津乃宮爾御宇志天皇乃、初賜比定賜倍留法隨爾仕奉止仰賜比授賜比恐美受賜倍留御代々々乃御定有可上爾、方今天下乃大政、古爾復志賜比弖、橿原乃宮爾御宇志天皇御創業乃古爾基伎、大御世袁彌益々爾吉伎御世止固成賜波牟其大御位爾即世賜比弖、進毛不知爾、退毛不知爾、恐美坐佐久宣布大命乎、衆聞食止宣布、(中略)

(明治元)慶應四年八月廿七日

外國使に宣する詔書に於ける用法

明神御宇日本天皇

日本書紀 二十五孝德天皇　大化元年秋七月丙子(十日)、高麗、百濟、新羅、並遣使進調、百濟調使兼領任那使、進任那調、唯百濟大使佐平緣福遇病、留津館而不入於京、巨勢德太臣詔於高麗使曰、明神御宇日本天皇詔旨、天皇所遣之使、與高麗神子奉遣之使、既往短而將來長、是故

可以溫和之心相繼往來而已、又詔於百濟使曰、明神御宇日本天皇詔旨、始我遠皇祖之世、以百濟國爲內官家、譬如三絞之綱、

續日本後紀　十一　仁明天皇　承和九年三月甲子(二十九日)、遣侍從正五位下藤原朝臣春津於鴻臚館、宣勅曰、天皇詔旨良麻止宣久、有司奏久、彼國(渤海)王乃上啓外乃別狀等事乎、存問使詰問爾、引過伏理奴、是故爾彼國使等遠波待爾、不可以常禮止奏、然止毛守年紀氏、自遠參來留遠念行氏毛、奈殊矜免賜布止宣、又詔久、客伊自遠參來禮理、平安以不、又長門以來路間波、如何爲都加都參來志、宜相見日爾至萬波、旦此爾侍天休息止宣布、

三代實錄　二十一　清和天皇　貞觀十四年五月十九日戊子、勅遣參議正四位下行左大辨兼勘解由長官近江權守大江朝臣音人、向鴻臚館、賜渤海國使、授位階告身、詔命曰、天皇詔旨良萬止勅命乎、客倍衆聞食止宣、國乃王楊成規等乎差天進度志天、天皇我朝廷乎拜奉留事乎矜賜比慈賜比天、冠位上賜比治賜布、然常都例波、大宮乃內爾召天治賜介理、此廻思女須大心大坐麻爾須依天毛、奈使乎遣天治賜波止久勅天皇我大命乎聞食止宣布、

三代實錄　八　清和天皇　貞觀六年二月十六日癸酉、制定僧綱位階、(中略)是日、勅遣參議大藏卿正四位下源朝臣生、從五位上行少納言兼侍從藤原朝臣諸葛等、依式率所司、於西寺綱所、任僧正已下律師已上十六人、策命云、天皇詔旨登、法師多知白佐部爾登宣大命乎白須、天皇我朝廷乃天日嗣乃位爾平安爾御座之、又御冠加賜比、人止成利賜布事波、諸佛弟子多乃知護持知護念比奉利末左依天之奈流止奈毛念行米須、依此天、常例與利外爾、此度僧綱數多久治賜布、或波先帝乃遺勅爾依天治賜布、或波相護利奉禮流狀乃隨爾治賜布毛在利、故是以、大僧都傳燈大法師位眞雅乎法印大和尙位僧正爾(中略)任賜比治賜布、自今以後毛、合力一心爾之天、上下和睦天、天皇我朝廷乎平安久誓願比奉利、天下乎平爾護持知萬左倍止白世止宣布天皇我勅命乎白、

座主宣命　第四　安慧和尙號金輪院座主、又云新堂座主、治山四年、

宣命云、年五十五、

天皇(清和)我詔旨止、山中乃法師等爾白佐止倍宣勅命乎白、大法師安慧波、故座主圓仁大法師乃弟子爾志天、眞言止觀乃業乎兼習利、故是以、彼座主乃平生爾定申志爾々隨天、座主仁治賜(サタメ)布事乎白佐止倍宣勅命遠白、

貞觀六年二月十六日　宣命始于此、爲永格云々、

朝野群載　十二　宣命　內記任大臣

天皇（醍醐）我詔旨良止万宣大命乎、親王、諸王、諸臣、百官等、天下公民衆聞食止宣、食國乃法止定賜比行賜倍留國法隨仁、先立云々止、右大臣正二位藤原忠平朝臣乎左大臣官爾任賜布、又宣久、大納言正三位藤原定方朝臣波、於朕天近親爾毛在、又可仕奉支次爾毛在爾依天奈牟、右大臣官爾治賜久止勅不天皇大命乎、衆聞食止宣、〔延長二年正月二十二日宣命〕

本朝世紀　久安五年十月廿五日癸酉、（中略）今日有任太政大臣事、

新宰相中將經宗記

酉剋參內、隱文帶、（藤原忠通）螺鈿劔、攝政依任太政大臣事也、（中略）

天皇（近衛）我詔旨と勅御命を、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食と宣、

攝政從一位藤原朝臣者、家門相繼天國の賢佐ナリ、忠貞乃心を持天、先々ノ御世ヨリ、天下ノ政を相穴奈比助奉る事モ久シ、（中略）頃年モ舊例ノ任ニ、早久太政大臣ノ官ニ上賜はむと念御坐しを、謙損の心彌深クシテ、先朝の御宇爾、件官を辭退せり、而有所思天太政大臣の官爾上給比治賜布と勅布、但攝政之職ハ、今毛彌益爾勤仕奉禮と勅御命乎、衆聞食世と宣、

久安五年十月廿五日

本朝世紀　仁平三年五月十九日丁未、今日、左大臣着座之後、始被行結政、（中略）戌刻、權中納言忠雅卿着仗座、行任僧綱事、（中略）次召大內記遠明、被仰宣命事、（中略）

天皇（近衛）我詔旨と、法師等爾白佐倍と宣勅命乎、自今治賜布僧綱等乃年薦智德乃次第乃隨仁上賜比治賜布、故是以權僧正行慶乎僧正爾、權大僧都乎法印和尙位爾、少僧都元海乎權大僧都爾、權少僧都道覺、々繼等乎少僧都爾、律師猷乘、敎仁、權律師惠曉、眞助、靜灌等乎權少僧都法眼和尙位爾、權律師宗覺、々讃、仲胤、實寬等乎律師仁、大法師行海、重愉、覺珍等乎權律師法橋上人位爾、大法師位聖源、良影等乎法橋上人位仁任賜比治賜布事乎白佐倍と宣勅命乎白、

仁平三年五月十九日

玉葉　治承三年十一月十五日己巳、（中略）寅刻、大夫史隆職注送曰、

關白藤基通、

內大臣同、

氏長者同、

止關白、（中略）

天皇(高倉)我詔旨良萬度勅御使(命)乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食度宣、從二位藤原朝臣(藤原基通)者、功臣之子孫度志、朝恩乎可蒙支人奈留爾依天、內大臣之官爾任賜布度勅乎、衆聞食度宣、

治承三年十一月十五日

十六日庚午、(中略)

前僧正明雲

還任

還補座主(中略)

天皇我詔旨止、山中乃法師爾白佐倍(止脫カ)宣勅命乎白、

僧正法師大和尙位明雲波、年薦高幾上仁、覺快法親王乃辭退代爾、重天慈覺大師乃門徒仁、之天、眞言止觀乃業乎兼習利、故是以座主仁、重天任賜布事乎白佐倍止宣勅命乎白、

治承三年十一月十六日

康富記　寶德二年六月廿七日己亥、(中略)是夜任大臣節會事任大臣、權大納言右大將實量卿、權大一、正三、任內大臣給、(中略)

外國に對する帝號の用法　日出處天子

天皇(後花園)我宣旨度勅大命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下能公民衆聞食止宣、正二位行權大納言右近衞大將藤原朝臣者、累代賢佐能家爾稟氐、朝弊乎可蒙支人奈留爾依旦、內大臣能官爾上賜比治賜布、又宣久、正三位行權中納言藤原朝臣乎、權大納言能官爾、正三位藤原朝臣乎權中納言能官爾、任賜止者久勅御命乎、衆聞食止宣、

寶德二年六月廿七日

座主宣命　第百六十五　尊鎭法親王　天文十年五月二日補、同十九年、九十三入滅、

宣命　使少納言長雅朝臣(中略)

天皇(後奈良)我詔旨良止、万山中乃法師等爾白佐止倍宣勅命乎白久、二品尊鎭法親王者、慈覺大師乃門徒多留上爾、天倫乃好毛深久、祖宗乃業於嗣久、眞言止觀乎兼習志、酌佛海之法水旦、仰惠日之照臨久、故是以座主爾治賜布事乎宣御命乎白、

天文十年五月二日

四　隋書

八十一　倭國列傳

大業(推古天皇十五年)三年、其王多利思比孤、遣使朝貢、使者曰、聞海西菩薩天子、重興佛法、故遣使朝拜、兼沙門數十人、來學佛法、其國書曰、日出處天子、致書日沒處天子、無恙云云、帝覽之不悅、謂鴻臚卿曰、蠻夷書有無禮者、勿復以聞、

東天皇

天皇

日本書紀　二十二推古天皇　十六年九月辛未朔辛巳(十一日)唐客裴世清罷歸、則復以小野妹子臣爲大使、吉士雄成爲小使、福利爲通事、副于唐客而遣之、爰天皇聘唐帝、其辭曰、東天皇敬白西皇帝、使人鴻臚寺掌客裴世清等至、久憶方解、季秋薄冷、尊候何如、想清悆、此即如常、今遣大禮蘇因高、大禮乎那利等往、謹白不具、

續日本紀　三文武天皇　慶雲三年十一月癸卯(三日)、賜新羅國王勅書曰、天皇敬問新羅國王、朕以虛薄、謬承景運、慚無練石之才、徒奉握鏡之任、日旰忘飡、翼々之懷愈積、宵分輟寢、業々之想彌深、

續日本紀　十聖武天皇　神龜五年夏四月壬午(十六日)、齊德等八人、各賜綵帛綾綿有差、仍賜其王璽書曰、天皇敬問渤海郡王、省啓具知、恢復舊壤、聿修曩好、朕以嘉之、宜佩義懷仁、監撫有境、滄波雖隔、不斷往來、

續日本紀　二十二淳仁天皇　天平寶字三年春正月庚午(三日)、帝臨軒、高麗(渤海)使揚承慶等貢方物、(中略)二月戊戌朔、賜高麗王書曰、天皇敬問高麗國王、使揚承慶等遠涉滄海、來弔國憂、誠表慇懃、深增酷痛、但隨時變禮、聖哲通規、從吉履新、更无餘事、兼復所貽信物、依數領之、

日本後紀　八桓武天皇　延曆十八年夏四月己丑(十五日)、是日、渤海國使太昌泰等還蕃、遣式部少錄正六位上滋野宿禰船白等押送、賜其王璽書曰、天皇敬問渤海國王、使昌泰等、隨賀萬至、得啓具之、王遜慕風化、重請聘期、占雲之譯交肩、驟水之貢繼踵、每念美志、嘉尙無已、

日本後紀　二十四嵯峨天皇　弘仁六年春正月(二十二日)甲午、渤海國使王孝廉等歸蕃、賜書曰、天皇敬問渤海王、孝廉等至、省啓具懷、先王不終遐壽、奄然殂背、乍聞惻怛、情不能已、王祚流累葉、慶溢連枝、遠發使臣、聿脩舊業、

續日本後紀　十一仁明天皇　承和九年夏四月丙子(十二日)、遣勅使於鴻臚館、宣詔、賜渤海王書曰、天皇敬問渤海國王、福延等至、得啓具之、惟王奉遵明約、沿酌舊章、一紀星廻、朝覲之期不爽、萬里溟濶、賕貢之款仍通、言念乃誠、無忘鑒寐、

三代實錄　三清和天皇　貞觀元年六月廿三日丁未、賜渤海國王勅書曰、天皇敬問渤海國王、書獻悉至、披覽具之、維王文武兼體、忠孝由衷、襲當國之徽猷、敦親仁之舊好、傾心久契、無疎就日之誠、利涉長期、不廢飛雲之軫、乃顧深款、何靡增懷、先皇以去年八月昇遐、遺詔不許奔赴、朕以寡德、荷託鴻圖、奉先訓而聿脩、撫舊甿以自恤、

菅家文草　八詔勅　答渤海王勅書

天皇(清和)敬問渤海國王、成規等至、省啓昭然、惟王家之急、繕粉澤施治、(中略)

貞觀十四年五月日、內記作、

延喜式　十二中務省　慰勞詔書式

天皇敬問云云、大蕃國云天皇敬問、小蕃國云天皇問、

本朝文集　六十七　贈蒙古國中書省牒　菅原長成

日本國太政官牒　蒙古國中書省、附高麗國使人牒送、

牒、得太宰府去年九月二十四日解狀、去十七日申時、異國船一隻、來著對馬嶋伊奈浦、(中略)

凡自天照皇大神耀天統、至日本今皇帝受日嗣、聖明所覃、莫不屬左廟右稷之靈、得一無貳之盟、(中略)

文永七年正月日

○按ずるに、本書は故障に因り送付せられずして止みたるものなり、

外國よりの國書に於ける帝號の用法

日本國王主明樂美御德

五　欽定全唐文　二百八十七　張九齡　勅日本國王書

勅、日本國王主明樂美御德、彼禮義之國、神靈所扶、滄溟往來、未嘗爲患、

秉燭譚　一　主明樂美御德ノ事

唐張九齡カ作レル勅日本國王書ノ首ニ云、勅、日本國王主明樂美御德ト云々、文苑英

華四百七十一卷ニ出、異稱日本傳撿出ノ、コレヲ載ス、主明樂美御德ハ、スメラミコトト訓ス、日本天子ノ稱ナリ、

日本書紀　二十二推古天皇　十六年秋八月壬子(十二日)、召唐客於朝庭、令奏使旨、時阿倍鳥臣、物部依網連抱二人、爲客之導者也、於是大唐之國信物置於庭中、時使主裴世清親持書、兩度再拜言上使旨而立之、其書曰、皇帝問倭皇、使人長吏大禮蘇因高等至具懷、朕欽承寶命、臨御區宇、思弘德化覃被含靈、愛育之情、無隔遐邇、知皇介居海表、撫寧民庶、境內安樂、風俗融和、深氣至誠、遠脩朝貢、丹欵之美、朕有嘉焉、稍暄、比如常也、故遣鴻臚寺掌客裴世清等、指宣往意、并送物如別、

善隣國寶記　上　鳥羽院元永元年

宋國附商客孫俊明鄭清等書曰、矧爾東夷之長、實惟日本之邦、人崇謙遜之風、地富珍奇之產、曩修方貢、歸順明時、隔濶彌年、久缺來王之義、遭逢熙且(カ)、宜敢(致カ)事大之誠云云、此書叶舊例否、命諸家勘之、四月廿七日、從四位上行式部大輔菅原在良、勘隋唐以來獻本朝書例曰、推古天皇十六年、隋煬帝遣文林郎裴世清、使於倭國書曰、皇帝問倭皇云云、天智天皇十年、唐客郭務悰等來聘書曰、大唐帝敬問日本國天皇云云、天武天皇元年、郭務悰等來、安置大津

館、客上書函題曰、大唐皇帝敬問倭王書、又大唐皇帝勑日本國使衞尉寺少卿大分等書曰、皇帝敬到書於日本國王、

○按ずるに、本文天智天皇十年及び天武天皇元年の記事は、日本書紀には其の記載なし、

日本國天皇

日本書紀　二十六齊明天皇　五年秋七月丙子朔戊寅(三日)、遣小錦下坂合部連石布、大山下津守連吉祥、使於唐國、仍以陸道奥蝦夷男女二人示唐天子、(伊吉連博德書曰、(中略)廿九日(己未閏十月)馳到東京、天子在東京、卅日、天子相見、問訊之、日本國天皇平安以不、使人謹答、天地合德、自得平安、)

天皇

三代實錄　二清和天皇　貞觀元年五月十日乙丑、(中略)存問兼領渤海客使大內記安倍朝臣清行、加賀國司等、奉進渤海國啓牒信物、王啓曰、虔晃啓、孟冬漸寒、伏惟、天皇起居萬福、即是虔晃、蒙恩當國、間年使命、永展先親之禮、將累代之情、悅續任風之影、恒無隔紀、以至于今、

日本國王

玉葉　承安二年九月十七日癸未、(中略)午刻許、左少辨兼光來、(中略)又語云、自大宋國供物于法皇(後白河)幷平相國(平清盛)入道等云々、其注文云、賜日本國王物色、送太政大臣物色云々、賜國王頗奇怪、仍可被返遣歟、將可被留置歟、有其議、然而事體不可被返歟、又不可及返牒云云、異國定有所言歟、可恥々々、

廿二日戊子、巳時許、大外記賴業眞人來、(中略)賴業語云、自大唐有供物、獻國王之物、幷送太政大臣入道之物有差云々、其送文、二通、(一通書云、賜日本國王、一通書云、送日本國太政大臣、)此狀尤奇怪、昔朱雀院御時、大唐賜物于公家幷左右大臣、(左大臣貞信公、右大臣仲平公、)於公家御分者、自兩府被返了、(有返牒、)左右大臣分者留之、(各有返牒、)其後、一條院御時、異國供物、其牒狀書主上御名、(但仁懷、書聞違歟、)仍不及沙汰被返了、承曆之比、又有此事、其牒狀書廻賜日本國、因之殊有沙汰、兩度被問諸道、遂經兩三年被留了、時人謗之、今度供物、非彼國王、明州刺史供物也、而其狀奇怪也、尤可返遣、上古相互送使賜物、其牒狀、自大唐ハ天皇に送上と書、彼國王ヲハ天子ト書、自我朝ハ又送と書、相互無差別、而今度之所爲不足言、而無音被留之條、異國定有所存歟、尤可悲事也云々、

蒙古國牒狀　奈良縣　東大寺所藏

上天眷命大蒙古國皇帝、奉書日本國王、朕惟自古小國之君、境土相接、尙務講信修睦、(中略)高麗朕之東藩也、日本密邇高麗、開國以來、亦時通中國、至於朕躬、而無一乘之使以通和好、尙恐王國知之未審、故特遣使持書布告朕意、冀自今以往、通問結好、以相親睦、且聖人以四海爲家、不相通好、豈一家之理哉、至用兵、夫孰所好、王其圖之、不宣、

至元三年八月日

異國牒狀事

侯爵　前田利建氏所藏　應神天皇の御代より、正應にいたるまて

數十ケ度の例、いまさらしるし申におよはす、且は異朝の牒書の事、方人なとの存知すへき事なり、しかあれとも日本國事は、ことに往跡にまかせて、沙汰ある事なれは、粗先規をしるし申はかりなり、凡太元天子は日本國に相對して、同輩の禮のあらむするは本儀にてあるへし、いさゝかも勝劣ある時は、これをきらふ、太元といふも、當時□國王にてあれとも、もとは蠻夷のたくひと申へき哉、次に高麗國は、神功皇后三韓を退治せられしより、なかく我朝に歸して、西藩となりて、君臣の禮をいたし、朝貢を毎年舟八十艘をおくりし事、上古はたえす、しかるに中古以來、太元國にしたかへられて、彼藩臣となる、しかありとも、いかてか舊盟をわすれん、仍代々、高麗の禮は各別の事なり、無禮の事、ことに其沙汰あり、彼國よりは皇帝天皇なとかけとも、本朝よりは國王とも、渤海の王とも、ふるくはかきしなり、しかあるに皇帝聖旨とかき、本朝を國主とかく段、太元の朝よりも、高麗には、なをそのとかふかゝるへし、仍先々、殊其沙汰あるか、又今度牒のはしにあて所なし、年號なし、箱に入らす、此等の條々も、無禮といふへし、(中略)代々の太宰府の牒、又返牒なき時の官符宣下以下の文章、少々しるし獻す、これにてなすらへらるへきにや、所詮この段は、先規をしらさるあいた、中々僧中なとひなり、しかあれとも、帝位につきて、その禮をいたす時は、とかむへきにあらす、假令自他皇帝とも、天皇とも、天子ともかきたらむは、禮に違さるにてあるへし、和王とも、國主とも、國王ともかきたらんは、其禮をそむきたるにてあるへし、先例禮にかなふ時は返牒あり、□□(禮にカ)そむく時は返牒なし、(中略)

一、代々異國よりの禮節の事、禮にかなふ例をも少々のす、應神天皇廿八年九月、高麗の牒狀到來、その文にいはく、高麗の王、日本國に敎ふとこれをかく、太子免(菟)道稚郎子、その文をよみて、高麗の使をせめて無禮なりとて、即これを破棄つ、推古天皇二年正月、隋國の牒狀到來、その文にいはく、皇帝和王に問、聖德太子、此狀を御らんして、天子と書すして、和王とかける事をにくみて、その使を賞せす、同十六年八月、又隋煬帝の書にいはく、皇帝和王にとふとかく、無禮なりといへとも、返牒をつかはしていはく、東天王、西皇帝に申とかゝる、隋煬帝これをみて悅はすと云々、齊明天皇七年、高麗の王の牒狀にいはく、大高麗國天皇、謹白大和國天皇、高麗は本朝にしたかへる國也、無禮のよし沙汰あり、天智天皇

十年、牒狀到來、その書にいはく、大唐皇帝敬問日本國天皇、禮節は仔細なしといへとも、返牒はなし、天武天皇元年二月、唐牒狀のはこの上に題云、大唐皇帝、敬て和王に問と書く、返牒なし、文武天皇、慶雲二年、唐牒狀にいはく、皇帝書を日本國の王に致すとかく、返牒なし、

可畏天皇

日本書紀　十九　欽明天皇　九年夏四月壬戌朔甲子(三日)、百濟遣中部杆率掠葉禮等、奏曰、德率宣文等奉勅、至臣蕃曰、所乞救兵、應時遣送、祇承恩詔、喜慶無限、(中略)伏願、可畏天皇(西蕃皆稱日本天皇、爲可畏天皇、)先爲勘當、暫停所乞救兵、待臣遣報、

十三年五月戊辰朔(八日)乙亥、百濟加羅安羅遣中部德率木劦今敦、河內部阿斯比多等、奏曰、高麗與新羅通和并勢、謀滅臣國、與任那、故謹求請救兵、先攻不意、軍之多少隨天皇勅、詔曰、今百濟王、安羅王、加羅王、與日本府臣等、俱遣使奏狀聞訖、亦宜共任那并心一力、猶尙若茲、必蒙上天擁護之福、亦賴可畏天皇之靈也、

十五年春正月丙申(九日)、百濟遣中部木劦施德文次、前部施德曰佐分屋等於筑紫、諮內臣佐伯連等曰、德率次酒、杆率塞敦等、以去年閏月四日到來云、臣等(內臣等者、謂臣也、)以來年正月到、如此遣而未審來不也、又軍數幾何、願聞若干、預治營壁、別諮、方聞奉可畏天皇之詔、來詣筑紫看送賜軍、聞之歡喜無能比者、

日本照臨天皇

續日本紀　十八　孝謙天皇　天平勝寶四年六月己丑(十四日)、新羅王子金泰廉等拜朝、并貢調、因奏曰、新羅國王言、日本照臨天皇朝庭、新羅國者、始自遠朝、世々不絕、舟檝並連、來奉國家、今欲國王親來朝貢進御調、而顧念、一日无主、國政絕亂、是以、遣王子韓阿湌泰廉、代王爲首、率使下三百七十餘人入朝、兼令貢種々御調、謹以申聞、

日本照臨聖天皇

續日本紀　十九　孝謙天皇　天平勝寶五年五月乙丑(二十五日)、渤海使輔國大將軍慕施蒙等拜朝、并貢信物、奏偁、渤海王言、日本照臨聖天皇朝、不賜使命、已經十餘歲、是以、遣慕施蒙等七十五人、賫國信物、奉獻闕庭、

日本照臨八方聖明皇帝

續日本紀　二十二　淳仁天皇　天平寶字三年春正月庚午(三日)、帝臨軒、高麗使揚承慶等貢方物、奏曰、高麗國王大欽茂言、承聞、在於日本照臨八方聖明皇帝、登遐天宮、攀號感慕、不能默止、是以、差輔國將軍揚承慶、歸德將軍揚泰師等、令賫表文并常貢物入朝、

明治以後に於ける帝號の用法

六法全書　明治元年　第十七　正月十日(正月十五日、兵庫ニ於テ、佛英伊孛荷米六國公使ニ付シ、五月二十九日、箱館ニ於テ、魯國領事ニ付ス、)

日本國天皇、告各國帝王及其臣人、嚮者將軍德川慶喜、請歸政權、制允之、內外政事親裁之、

天皇

乃曰、從前條約用大君名稱、自今而後、當換以　天皇稱、而各國交接之職、專命有司等、各國公使諒知斯旨、

慶應四年戊辰正月十日　御名印

外國の元首に對する親書に於ける用法

太政官日誌　明治二年第百四號　東京城第六十七

○十月八日丙午米利堅公使參朝、（中略）

米國公使へ勅答

日本天皇

日本天皇米利堅大統領ニ復ス、（中略）今舊公使國ニ歸ル、因テ懇ロニ、朕カ意ヲ傳ヘシメ、以テ大統領ノ健康安寧ヲ祝ス、

明治二年己巳十月

奉勅　　右大臣從一位藤原朝臣實美

法規分類大全　一政體門三　詔勅式　米利幹合衆國大統領ヘノ國書　五年四月十八日

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ承ル大日本國天皇御名敬テ

米利幹合衆國大統領閣下ニ白ス（中略）

明治五年壬申四月十八日東京宮城ニ於テ自ラ名ヲ署シ璽ヲ鈐ス

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル日本國皇帝

御名　國璽　　太政大臣從一位三條實美

奉勅

法規分類大全　一政體門三　詔勅式　伊太利帝ニ復スル御親書　六年一月二十日

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル日本國皇帝御名敬テ威望隆盛友誼親密ナル

伊太利國第二世皇帝ウヰクトルエンマニユール陛下ニ復ス（中略）

神武天皇即位紀元二千五百三十三年明治六年一月二十日東京宮城ニ於テ親ラ名ヲ署シ璽ヲ鈐ス

御名　國璽　　外務卿副島種臣

奉勅

法規分類大全　一政體門三　詔勅式　白耳義國帝ニ復スル御親書　八年十月五日

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐タル日本國皇帝

白耳義國皇帝レヲポール陛下ニ復ス（中略）

清國朝鮮國の元首に對する親書に用ひる大日本國大法皇帝

神武天皇即位紀元二千五百三十五年
明治八年十月五日東京宮中ニ於テ親ラ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名　國璽

奉勅

外務卿寺島宗則

法規分類大全　一政體門三　詔勅式

佛國大統領ヘ御復書十二年五月十日

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル日本國皇帝御名敬テ
佛蘭西共和國大統領ジヴール、グレビー氏ニ復ス（中略）
神武天皇即位紀元二千五百三十九年明治十二年五月十日東京宮中ニ於テ親ラ名ヲ
署シ璽ヲ鈐セシム

御名　國璽

奉勅

外務卿寺島宗則印

法規分類大全　一政體門三　詔勅式

清國皇帝ヘノ國書五年十一月十九日

大日本國大皇帝敬テ
大清國大皇帝ニ白ス（中略）

明治五年壬申十一月十九日

御名　國璽

奉勅

外務大臣副島種臣

法規分類大全　一政體門三　詔勅式

朝鮮國王ヘノ國書十三年十一月八日

大日本國大皇帝敬テ
大朝鮮國大王ニ白ス（中略）
神武天皇即位紀元二千五百四十年明治十三年十一月八日東京宮中ニ於テ親ラ名ヲ
署シ璽ヲ鈐セシム

御名　國璽

奉勅

外務卿正四位勳一等井上馨

法規分類大全　一政體門三　詔勅式

清國駐劄特命全權公使宍戸璣解任ノ國書十五年八月十八日

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル大日本國大皇帝敬テ
大清國大皇帝ニ白ス（中略）

神武天皇即位紀元二千五百四十二年明治十五年八月十八日東京宮中ニ於テ親ラ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名　國璽

奉勅

外務卿

朝鮮國王ヘノ國書十七年十二月二十一日

法規分類大全　一政體門三　詔勅式

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐タル日本國大皇帝敬テ朕カ良友ナル大朝鮮國大王ニ白ス（中略）

神武天皇即位紀元二千五百四十四年明治十七年十二月二十一日東京宮城ニ於テ親ラ名ヲ記シ璽ヲ鈐ス

御名　國璽

奉勅

太政大臣公爵三條實美　官印

法規分類大全　一政體門三　詔勅式

露西亞國千島ト樺太兩島交換條約證認批準ノ詔　八年十一月十日

條約書ノ例ニ倣ヒ本書ハ外務省ニテ認ム

國際條約の批准書に於ける用法

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐タル日本皇帝

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐タル日本國皇帝

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐タル日本皇帝此書ヲ以テ宣示ス朕全露西亞皇帝陛下ト望ヲ同シ朕ハ樺太島（薩哈連島）ノ內朕カ所領タル部分ヲ全露西亞皇帝陛下ヘ讓與シ全露西亞皇帝陛下ハ其所領タル千島群島（クリール）（イランス）ノ全部ヲ朕ニ讓與スルコトヲ互ニ決シタルヲ以テ雙方ノ全權重臣明治八年五月七日彼得堡ニ會シ其條約ヲ締盟調印セリ即其條款左ノ如シ（中略）

朕親シク右條約ヲ通覽シ其旨ヲ至當トス故ニ今此書ヲ以テ之ヲ全ク證認批準シ天地ト悠久ヲ期シ總テ條約中所裁ノ條款ハ正ニ之ヲ遵行セン事ヲ約ス右定證トシテ爰ニ朕カ名ヲ親記シ國璽ヲ鈐セシム

神武天皇即位紀元二千五百三十五年明治八年八月二十二日

御名　國璽

奉勅

外務卿寺島宗則印

法規分類大全　一政體門三　詔勅式

萬國郵便聯合條約書ニ御批準書　十一年十二月五日　銀罰紙

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐タル日本國皇帝御名此書ヲ見ル有衆ニ宣示ス

千八百七十八年六月一日巴里府ニ於テ萬國郵便聯合條約締盟ノ擧アルニ際シ善良

適宜ナル朕カ特別ノ全權ヲ有セル委員及ヒ同盟各國ヨリモ同一ナル特別ノ全權ヲ有セル委員ヲ以テ日本及ヒ同盟各國ノ間ニ取結シ約書ヲ朕親ラ閲覽點檢セシニ能ク朕カ意ニ適シ更ニ間然ス可キナキカ故ニ之ヲ嘉納批準シ其例規約文ノ如ク日本國ニ於テ履行遵守セシム可キ旨ヲ玆ニ確約ス

神武天皇即位紀元二千五百三十八年明治十一年十二月五日東京宮中ニ於テ親ラ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名　國璽

宣戰の詔書に於ける用法

官報 明治二十七年八月二日號外　詔勅　外務卿寺島宗則

奉敕

天佑ヲ保全シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國皇帝ハ忠實勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕玆ニ清國ニ對シテ戰ヲ宣ス（中略）

御名　御璽

明治二十七年八月一日（副署　省略）

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本國皇帝ハ忠實勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕玆ニ露國ニ對シテ戰ヲ宣ス（中略）

御名　御璽

明治三十七年二月十日（副署省略）

天祐ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本國皇帝ハ太政大臣從一位三條實美ヲ明治勳章ノ勳一等ニ敍シ旭日大綬章ヲ授與ス仍テ卿ハ此位ニ屬スル禮遇及特權ヲ有スルヲ得ヘシ

神武天皇即位紀元二千五百三十六年明治九年十二月二十九日東京宮城ニ於テ親ラ名ヲ署シ璽ヲ鈐ス

御名　大日本國璽　（下略）

動記に於ける用法

岩倉公實記 下　具視勳一等旭日大綬章敍賜ノ事

（明治九年）是歳十二月二十九日、三條實美ト具視トニ勳一等旭日大綬章ヲ敍賜ス、其具視ニ賜フ

所ノ勳記ニ曰ク、

天祐ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐タル日本國皇帝ハ右大臣從一位岩倉具視ヲ明治勳章ノ勳一等ニ敍シ旭日大綬章ヲ授與ス仍テ卿ハ此位ニ屬スル禮遇及特權ヲ有スルヲ得ヘシ

神武天皇即位紀元二千五百三十六年明治九年十二月二十九日東京宮城ニ於テ

親ラ名ヲ署シ璽ヲ鈐ス

御名　大日本國璽　（下略）

法規分類大全

二勳等　族爵門

賞勳局稟定　二十一年十月九日

本年第一號勅令ヲ以新設被仰出候各種勳章、追々御授與ノ運ニ至リ候ニ付テハ、勳記文別紙ノ通御制定相成可然哉、此段允裁ヲ仰ク、

（別紙）

頸飾勳記　內國皇族及臣僚

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル日本國皇帝ハ官品勳某親王又ハ官位勳爵某ニ大勳位菊花頸飾章ヲ授與ス

神武天皇即位紀元　年明治　年　月　日東京帝宮ニ於テ親ラ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名　國璽

賞勳局總裁位勳爵　某

賞勳局副總裁位勳爵　某

局印　此證ヲ勘査シ第　號ヲ以テ大勳位簿冊ニ記入ス

賞勳局書記官位勳　某（下略）

官報

昭和十一年五月十六日　第二千八百九號　土曜日

條約第三號

猥褻刊行物ノ流布及取引ノ禁止ノ爲ノ國際條約（條約文省略）

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐メル大日本帝國天皇（御名）此ノ書ヲ見ル有衆ニ宣示ス

朕大正十二年九月十二日「ジュネーヴ」ニ於テ帝國全權委員ガ關係各國全權委員ト共ニ議定シ且宣言ヲ附シテ署名シ更ニ昭和十一年二月十四日附ヲ以テ帝國政府ガ帝國

外國又は外國人に對する用法の改正

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐メル大日本帝國天皇